佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第15集

KOSHI MAKI NISHI OHO KU BO

腰巻・西大久保II

MAGARI O

曲尾II

長野県佐久市上平尾 腰巻・西大久保II遺跡 香坂・曲尾II遺跡
発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

口絵 一

縵巻遺跡航空写真、遺跡真上より（株式会社 協同測量社撮影）

羅巻遺跡航空写真、上・西方対岸より、下・北方より（株式会社 協同測量社撮影）

例　　言

1　本書は、昭和62年度北部幹線道路（腰巻Ⅰ区）建設工事事業、市道香坂曲尾線新設事業（高速道路関連道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　佐久市土木課

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地籍

腰巻遺跡（略号SKM）　佐久市上平尾字腰巻639、640、643、644、645、646

西大久保Ⅱ遺跡（略号SNOⅡ）　佐久市上平尾字西大久保691－5、651

曲尾Ⅱ遺跡（略号KMOⅡ）　佐久市大字香坂字曲尾319、320－1,298－1・2

字下中原649－1

5　調査期間及び面積

腰巻・西大久保Ⅱ遺跡　昭和62年8月3日（月）～9月28日（月）、9月29日（火）～昭和63年3月26日（土）　5,100㎡

曲尾Ⅱ遺跡　昭和62年10月16日（金）～11月9日（月）、11月10日（火）～昭和63年3月26日（土）　2,000㎡

6　調査団の構成

事務局　佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長	西沢正巳	調査係主任	高村博文
庶務係主査	畠山俊彦	調　査　係	三石宗一
庶　務　係	田中芳美（臨時職員）		小山岳夫

腰巻・西大久保Ⅱ遺跡調査団

団　　長	黒岩忠男（佐久考古学会副会長）
調査指導者	林　幸彦・羽毛田卓也（佐久市教育委員会）
調査担当者	小山岳夫
調査主任	羽毛田伸博（佐久考古学会員）
調　査　員	篠原浩江（佐久考古学会員）
調査補助員	神部妙子
発掘協力者（五十音順）	五十嵐勝吉、北沢千吉、工藤豊、樹沢三之助、樹沢延子、小林幸子、関口正、関口正彦、関口与志子、樋田和子、樋田咲枝、中沢徳重、宮川百合子、和久井義雄（佐久考古学会員）

整理協力者　小林幸子、平林美津江、宮川百合子、和久井義雄

地形・地質・石質指導　白倉盛男（佐久考古学会副会長）

遺物　写真　畠山俊彦

曲尾II遺跡調査団

団　長　黒岩忠男

調査指導者　林　幸彦・羽毛田卓也

調査担当者　高村博文

調査主任　羽毛田伸博、三石宗一

調　査　員　篠原浩江

調査補助員　神部妙子

協　力　者　小林幸子、平林美津江、宮川百合子、和久井義雄

遺物　写真　畠山俊彦

7　曲尾II遺跡出土縄文土器の鑑定を百瀬忠幸・近藤尚義両氏にお願いした。

8　本書の編集は、腰巻・西大久保II遺跡を小山が、曲尾II遺跡を高村・羽毛田伸博が行った。

腰巻・西大久保II遺跡の執筆は、第II章第1節を白倉盛男、第II章第2節を黒岩忠男が、他の章は、小山、篠原が分担し、文末に記して文責を明らかにした。

曲尾II遺跡の執筆は、羽毛田伸博、高村が分担し、文末に記して文責を明らかにした。

9　本書および腰巻・西大久保II遺跡、曲尾II遺跡に関するすべての資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

腰巻・西大久保II遺跡発掘調査において上平尾区長中島長市郎氏、下平尾区長依田好人氏、横根区長岩崎守氏、柳沢包治氏、高橋金雄氏、また、曲尾II遺跡発掘調査において中島美代太氏、安藤静氏をはじめ地元の方々には、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただき、さらに報告書作成にあたって下記の各氏よりご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

宇賀神誠司、臼田武正、河西克造、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、桜井弘人、笹沢浩、島田恵子、堤　隆、寺嶋俊郎、花岡　弘、原　明芳、福島邦男、丸山敏一郎、百瀬忠幸、森泉かよ子、山下誠一、由井茂也。　（敬称略　五十音順）

凡　　例

1　本書は、腰巻・西大久保II遺跡と曲尾II遺跡についての報告書である。第1編に腰巻・西大久保II遺跡について、第2編に曲尾II遺跡について記載してある。

2　曲尾II遺跡の遺跡の環境については『淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I』(1987　佐久埋蔵文化財調査センター）に記載してあるので、本報告書では再録してない。

3　腰巻・西大久保II遺跡の遺構全体図は協同測量社作成の航空測量図を使用した。

4　遺構の略称　竪穴住居址⇨H　竪穴遺構⇨Ｔａ　溝状遺構⇨M　土壙⇨D

5　水糸レベルについては各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。

6　挿　　図

1）重複遺構については、上端のみを実線で表示した。

2）縮　尺　　竪穴住居址・竪穴遺構⇨1/80、溝状遺構⇨随時、土壙⇨1/60

土器・青銅器⇨1/4（但し拓本土器は1/3)、鉄器⇨1/3、鉄滓⇨1/2、

石器（鏃）⇨2/3、

石器（石斧・砥石・叩石等）⇨1/3、石器（台石）⇨1/6

写真図版中の遺物の縮尺は上記に準拠する。

3）遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーンは下記の内容の表現である。

遺構実測図

地山　　焼土　　灰　　カマド・炉

遺物実測図

赤色塗彩　　須恵器断面　　土師器内面黒色研磨

7　竪穴住居址の記述は検出位置⇨検出層序⇨重複関係⇨平面形態⇨覆土⇨壁⇨床面⇨柱穴⇨炉⇨遺物の出土状況⇨その他の観察事項の順に記載する。

8　報文・土器観察表において（　　）は推定値、〈　　〉は残存値を示す。

目　　次

例　言
凡　例
第1編　腰巻・西大久保II遺跡
第I章　発掘調査の経緯……1
第1節　発掘調査に至る動機……1
第2節　調査日誌……2
第II章　遺跡の立地と環境……3
第1節　佐久市上平尾腰巻遺跡付近の自然環境……3
第2節　遺跡の歴史的環境……4
第III章　基本層序……8
第IV章　遺構と遺物……9
第1節　検出遺構・遺物の概要……9
第2節　竪穴住居址・竪穴遺構……9
1）第1号住居址……9　5）第5号住居址……25
2）第2号住居址……15　6）第6号住居址……30
3）第3号住居址……17　7）第7号住居址……38
4）第4号住居址……22　8）第1号竪穴遺構……41
第3節　溝状遺構……42
1）第1号溝状遺構…42　2）第2・3号溝状遺構…42　3）第4号溝状遺構…46
第4節　土　　壙……46
1）第1号土壙……46　3）第3号土壙……47
2）第2号土壙……46　4）第4号土壙……48
第5節　グリッド・表採遺物……48
第V章　調査のまとめ……50
引用参考文献……54
付　　編……55
写真図版
第2編　曲尾II遺跡
第I章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機……79
第２節　調査日誌……80
第Ⅱ章　基本層序及び概要
第１節　基本層序……80
第２節　検出遺構・遺物の概要……83
第Ⅲ章　遺構と遺物
第１節　土　　壙……84
第２節　区出土遺物……88
１）土　　器……88　２）石　　器……94
第Ⅳ章　曲尾・木戸平Ａ遺跡既出資料……99
第Ⅴ章　調査のまとめ……106
写真図版

挿図目次

腰巻・西大久保Ⅱ遺跡
第１図　腰巻・西大久保Ⅱ遺跡の位置……1
第２図　周辺遺跡分布図……2
第３図　基本層序模式図……8
第４図　腰巻・西大久保Ⅱ遺跡発掘区設定図……10
第５図　腰巻・西大久保Ⅱ遺跡遺構全体図……11
第６図　第１号住居址実測図……13
第７図　第１号住居址カマド実測図……14
第８図　第１号住居址出土佐波理鉤実測図……14
第９図　第１号住居址出土鉄器実測図……14
第10図　第２号住居址実測図……15
第11図　第２号住居址カマド実測図……16
第12図　第２号住居址出土土器実測図……16
第13図　第３号住居址実測図……17
第14図　第３号住居址炉址実測図……18
第15図　第３号住居址炭化材分布図……19
第16図　第３号住居址遺物分布・接合関係図……20
第17図　第３号住居址出土土器実測図……21
第18図　第３号住居址出土石器実測図……22
第19図　第４号住居址実測図……23
第20図　第４号住居址炉址実測図……23
第21図　第４号住居址炭化材・遺物分布図……23
第22図　第４号住居址出土土器実測図……24
第23図　第５号住居址実測図……25
第24図　第５号住居址炉址実測図……26
第25図　第５号住居址炭化材分布図……26
第26図　第５号住居址遺物分布・接合関係図……27
第27図　第５号住居址出土土器実測図……28
第28図　第５号住居址出土石器実測図……29
第29図　第６号住居址実測図……31
第30図　第６号住居址炉址実測図……32
第31図　第６号住居址炭化材分布図……33
第32図　第６号住居址遺物分布・接合関係図……34
第33図　第６号住居址出土土器実測図……35
第34図　第６号住居址出土土器拓影図……36
第35図　第７号住居址実測図……38
第36図　第７号住居址炭化材分布図……39
第37図　第７号住居址遺物分布・接合関係図……40
第38図　第７号住居址出土土器実測図……40
第39図　第７号住居址出土石器・鉄滓実測図……40
第40図　第１号竪穴遺構実測図……41
第41図　第１号竪穴遺構出土土器実測図……41

第42図　第1号溝状遺構出土土器実測図……42
第43図　第1号溝状遺構実測図……43
第44図　第2・3号溝状遺構実測図……45
第45図　第1号土壙実測図……47
第46図　第2号土壙、第4号溝状遺構実測図……47
第47図　第3号土壙実測図……47
第48図　第4号土壙実測図……47
第49図　グリッド・表採土器実測図……48
第50図　表採および溝内出土石器実測図……50
曲尾II遺跡
第1図　曲尾II遺跡の位置……79
第2図　曲尾II遺跡第3地区基本層序模式図……80
第3図　曲尾II遺跡全体図……81
第4図　第10～12号土壙実測図……84
第5図　第9・13～17号土壙実測図……85
第6図　第13・14・16号土壙出土土器拓影図……86
第7図　第3地区No土器拓影図〈1〉……89
第8図　第3地区No土器拓影図〈2〉……90
第9図　第3地区No土器拓影図〈3〉……91
第10図　第3地区No土器拓影図〈4〉……92
第11図　第3地区No石器実測図……92
第12図　第1～4地区表採土器拓影図……93
第13図　第2地区表採土器実測図……94
第14図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器表採地域図……99
第15図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈1〉……100
第16図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈2〉……101
第17図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈3〉……102
第18図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈4〉……102
第19図　曲尾I・II・III遺跡全体図……107

付表目次

腰巻・西大久保II遺跡
第1表　周辺遺跡一覧表……6
第2表　第3号住居址出土土器観察表……21
第3表　第4号住居址出土土器観察表……24
第4表　第5号住居址出土土器観察表……28
第5表　第6号住居址出土土器観察表……37
第6表　第1号竪穴遺構出土土器観察表……41
第7表　住居址一覧表……51
曲尾II遺跡
第1表　第13・14・16号土壙出土土器拓影図観察表……87
第2表　第1～3地区出土中期後半土器分類表……88
第3表　第3地区N○石器観察表……92
第4表　第3地区N○土器拓影図観察表……95
第5表　第1～4地区表採土器拓影図観察表……98
第6表　曲尾・木戸平A遺跡既出石器観察表〈1〉……103
第7表　曲尾・木戸平A遺跡既出石器観察表〈2〉……104

写真図版目次

腰巻・西大久保II遺跡
図版　一　1　腰巻遺跡遺景
2　腰巻遺跡南部段丘面近景
図版　二　1　第1号住居址
2　第1号住居址遺物出土状況
図版　三　1　第1号住居址鉄刀子出土状況
2　第1号住居址佐波理鐙出土状況
3　第1号住居址カマド
4　第2号住居址カマド
5　第2号住居址
図版　四　1　第3号住居址
2　第3号住居址炭化材出土状況
図版　五　1　第3号住居址遺物・炭化材出土状況
2　第3号住居址炉址
3　第3号住居址北東側遺物・炭化材出土状況
4　第3号住居址北東側炭化材出土状況

5　第3号住居址北東壁下炭化材出土状況
図版　六　1　第3号住居址P_1柱材出土状況
2　第3号住居址P_1柱穴半截状況
3　第3号住居址P_2柱穴半截状況
4　第3号住居址P_3上炭化材出土状況
5　第3号住居址P_3上炭化材出土状況
6　第3号住居址P_3柱穴半截状況
7　第4号住居址遺物出土状況
図版　七　1　第4号住居址
2　第4号住居址遺物出土状況
図版　八　1　第5号住居址
2　第5号住居址遺物・炭化材出土状況
図版　九　1　第5号住居址炭化材出土状況
2　第5号住居址炉址
3　第6号住居址炉址掘り方
4　第6号住居址炉址半截状況
5　第6号住居址炉址
図版　十　1　第6号住居址
2　第6号住居址遺物・炭化材出土状況
図版　十一　1～4　第6号住居址遺物出土状況
5　第7号住居址
図版　十二　1　第7号住居址炭化材出土状況
2　第7号住居址炭化材出土状況
3　第7号住居址遺物出土状況
4　第1号竪穴遺構遺物出土状況
図版　十三　1　第1号竪穴遺構
2　第1号土坑
3　第2号土坑
4　第3号土坑
5　第4号土坑
図版　十四　1　第2・3号溝状遺構
2　第4号溝状遺構
3　スナップ
図版　十五　1　第1号住居址出土佐波理鏡
2　第1号住居址出土鉄刀子
3　第3号住居址出土土器
4　第3号住居址出土石器
5・6　第5号住居址出土土器
7～9　第6号住居址出土土器
図版　十六　1～5　第6号住居址出土土器
6　第1号竪穴遺構出土土器
7　第1号竪穴遺構出土管玉
8・9　表採・溝内出土石器
図版　十七　1　現地説明会スナップ
2～5　スナップ
曲尾II遺跡
図版　一　1　曲尾II遺跡全景
2　第1地区全景
図版　二　1　第2地区全景
図版　三　1　第3地区近景
2　第4地区全景
図版　四　1　第10～12号土坑
2　第9号土坑
3　第10号土坑
4　第11・12号土坑
図版　五　1　第15号土坑
2　第14号土坑
3　第16号土坑
4　第17号土坑
図版　六　1　第13・14・16号土坑出土土器
2　第3地区No土器〈1〉
図版　七　1　第3地区No土器〈2〉
2　第3地区No土器〈3〉
図版　八　1　第3地区No土器〈4〉
2　第1～4地区表採土器
図版　九　1　第3地区No石器
2　曲尾・木戸平A遺跡既出石器〈1〉
図版　十　1　曲尾・木戸平A遺跡既出石器〈2〉
2　曲尾・木戸平A遺跡既出石器〈3〉
図版　十一　1　曲尾・木戸平A遺跡既出石器〈4〉
2　第2地区表採土器

第Ⅰ編　腰巻・西大久保Ⅱ遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る動機

腰巻・西大久保II遺跡は佐久市上平尾に所在し、腰巻遺跡は佐久市の北東より屈曲しながら南流する湯川左岸河岸段丘の中段（2段目）、西大久保遺跡は上段の3段目にあたる。

佐久市遺跡詳細分布調査では腰巻遺跡は弥生～平安、西大久保遺跡は縄文～平安時代の遺物が表面採集されている。西大久保遺跡は昭和61年に東方約200m余の地点で南北方向に全長約700m、幅約10mの範囲が発掘調査され、縄文時代の遺物の他、中世と考えられる遺物が検出された。また、腰巻遺跡の南西約600mの地点には当遺跡と同じ河岸段丘の2段目にあたる地形上に存在する下小平遺跡が昭和54年に発掘調査されており、弥生終末～古墳初頭の集落址、方形周溝墓群が検出された。以上の分布調査、発掘調査の成果、および地形・環境から考えて、腰巻遺跡では弥生～古墳時代前期の集落址、あるいは墓址群、また、西大久保遺跡では縄文・中世の遺構・遺物の検出が予想された。

昭和62年度、佐久市土木課が行う、北部幹線道路（腰巻Ⅰ区）建設工事事業が、本遺跡内で計画されたため、現地にて佐久市教育委員会、佐久市土木課の二者で協議が行われた。その結果、遺跡の破壊がやむなきに至り、緊急に調査し、記録保存する必要性が生じた。そこで佐久市土木課、佐久市教育委員会より委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。

第1図　腰巻・西大久保II遺跡の位置（1：50,000　国土地理院地形図による）

第2節　調査日誌

昭和62年8月1日（土）

佐久市土木課・佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター3者で現地にて協議を行う。

8月3日（月）

発掘区の設定、重機搬入の打ち合せを行う。

8月4日（火）～8月17日（月）

器材搬入、テント設営を行う。北部地区より表土除去作業を開始する。北部地区の表土除去は8日（土）まで、南部地区は10日（月）から開始する。

8月18日（火）～8月20日（木）

南部地区重機による表土除去継続する。地元協力者が参加し、セクション面、遺構確認面の精査作業を開始する。腰巻遺跡分の表土除去は20日（木）に終了。第1号溝状遺構の掘り下げを開始。

8月21日（金）～25日（火）

第1号溝状遺構の掘り下げを行い、III区まで終了する。

8月26日（水）・27日（木）

第1号住居址の掘り下げ、セクション図作成。南部地区の確認面精査作業を行う。標高点移動を行い西大久保II遺跡730.6m、腰巻遺跡北部地区715.8m、南部地区715mに標高点を設定する。

8月28日（金）～9月2日（水）

南部地区プラン確認作業継続。第2・3・5号住居址、第1～3号溝状遺構、第1号竪穴状遺構の掘り下げ、実測、写真撮影を行う。

9月3日（木）～9月5日（土）

西大久保II遺跡の表土除去作業を行う。第2・3・4・5号住居址掘り下げ、実測、写真撮影を行う。第1号溝状遺構セクション図作成を行う。

9月7日（月）～9月16日（水）

第6・7号住居址の掘り下げ、実測、写真撮影、第3・4・5号住居址の精査、図面作成、第1～4号土坑、第4号溝状遺構の掘り下げ、図面作成、写真撮影を行う。

9月17日（木）～28日（月）

第5・6号住居址を中心に全遺構図面を作成、3・6号住の炭化材取り上げを行う。26日（土）航空測量を実施し、28日（月）器材を撤収し、現地調査を終了する。

9月29日（火）～昭和63年3月26日（土）

室内において報告書作成作業を行い、すべての調査を完了する。

第II章　遺跡の立地と環境

第1節　佐久市上平尾　腰巻・西大久保II遺跡付近の自然環境

浅間火山南東斜面標高1300m付近の白糸の滝付近を水源地とする湯川は小瀬川を合せ、標高1200m付近市ヶ滝からの支流も合せ一路南方向に流れ中軽井沢・油井部落に至り、南軽井沢から西流して来る泥川と合流して、流路を南西方向に変え、小支流も合せて御代田町を流下して佐久市に流入している。南軽井沢・油井部落以西の佐久市に入るまでの湯川の流路は南西方向を示し、上信国境にある妙義荒船佐久高原国定公園の一部となっている佐久山地と浅間火山堆積平地との境界線を流下し、深い浸蝕谷を形成し、河流は極端に蛇行している。この地形を利用して構築したのが御代田広戸の標高814m地点を堰止めた湯川ダムである。湯川ダムは下流域の洪水災害調節・潅漑用水確保のために昭和53年に完成した高さ50m・堤長53m・堤幅5m・最大貯水量340万m³のコンクリート式ダムで構築以後湯川流域の用水安定災害防止に役立っている。

この湯川も佐久市内に入ると横根付近からようやく谷幅を増し、両岸に僅かな河岸段丘の発達も見られる。この付近では地盤の隆起運動の結果と見られる河床の下方浸蝕がはげしく流路は蛇行し、河流の側面攻撃で高い断崖を造り、反対面には第一段丘を形成しそこには古くからの水田が拓かれている。

腰巻遺跡は上平尾地区湯川左岸の第一段丘上に削り残された極めて狭い第二段丘上にある。対岸には急崖を経だって標高735m岩村田台地面の栗毛坂遺跡がある。湯川は岩村田地区から西に流れを変え177㎡の水田をうるおして佐久市北岩尾枇杷島北で千曲川に合流している。

岩村田地区を流れる湯川の両岸台地を構成する地層は浅間火山第一次の黒斑火山当時の噴出物である塚原泥流によって最下部の骨格が造られて凸凹のある原地形が造られ、湯川の流路が南に変えられ岩村田町以西中佐都地区まで突兀たる流れ山分布地域が形成され、その低い部分は沼沢湿地帯となり、続いて大爆発噴出物を多量に長期間活動を続けた黒斑火山の火山灰砂・多量な浮石・火山弾岩層が沼沢地に厚く堆積した。その層厚は御代田駅付近で25m以上・鼻顔稲荷神社付近で20m・根々井で約10m程である。この地層は水中堆積の部分もあり、空中降下堆積の部分もあり湯川層と呼ばれ、荒牧重雄（東大教授）は第1軽石流P_1と名づけている。塚原泥流は主として平塚・塚原・赤岩付近を中心に田園地帯の中に流れ山を百余の多数を分布しているが岩村田町内にも小規模なもの―黒岩城・信濃石―もある。湯川層は岩村田台地三井平根地区の地表面を覆い、

部分的の差異はあるが浮石火山灰砂を主として20m以上の層厚を示している。若い火山灰砂は凝結不充分で水の浸蝕抵抗力が弱く、湯川の谷を最大として至る所にきり立った両岸を持つ“田切り”の地形が発達しており、浅間火山裾野の特殊地形を造っている。この田切りの谷底平地が佐久地方の最も古い水田地帯との考え方もある。

腰巻遺跡は平根小学校と湯川温泉を結ぶ直線上湯川左岸の狭い第二河岸段丘上にある。ここの第一段丘は湯川上流では最も大きい谷底平地で東西300m南北600mの水田地帯で現在では基盤整備も完了して良田となっているがこの平地は浸蝕谷として形成後湯川の遊水氾濫堆積後の平地化したもので沼沢地として長期間植物繁茂を示す草泥炭層―俗称やちまぐそ―が厚く最初の開田には格別の苦労した話が残されていた。標高は約700mである。この泥炭層からはメタンガスの湧出もあり対岸にあった岩子の湯はこれを熱源にしたと伝えられているが現在は岩子の湯はない。

第二段丘は湯川層の浸蝕残丘で浸蝕崖に沿って幅広い所で100m長さ約600mの西向き標高715m内外の崖棚状台地で近くに湧水もあり、表土は上部からの崖堆堆積のものも加わって良質黒色壌土厚さ１mを超す部分もある。ここが現在良質で知られる平根地区りんご・ももの果樹園として先鞭をつけた地点である。古墳時代の祖先の知恵が偲ばれる。

ここより東部上面が平根台地標高730m上平尾部落の現在生活面で湯川層堆積最上面である。

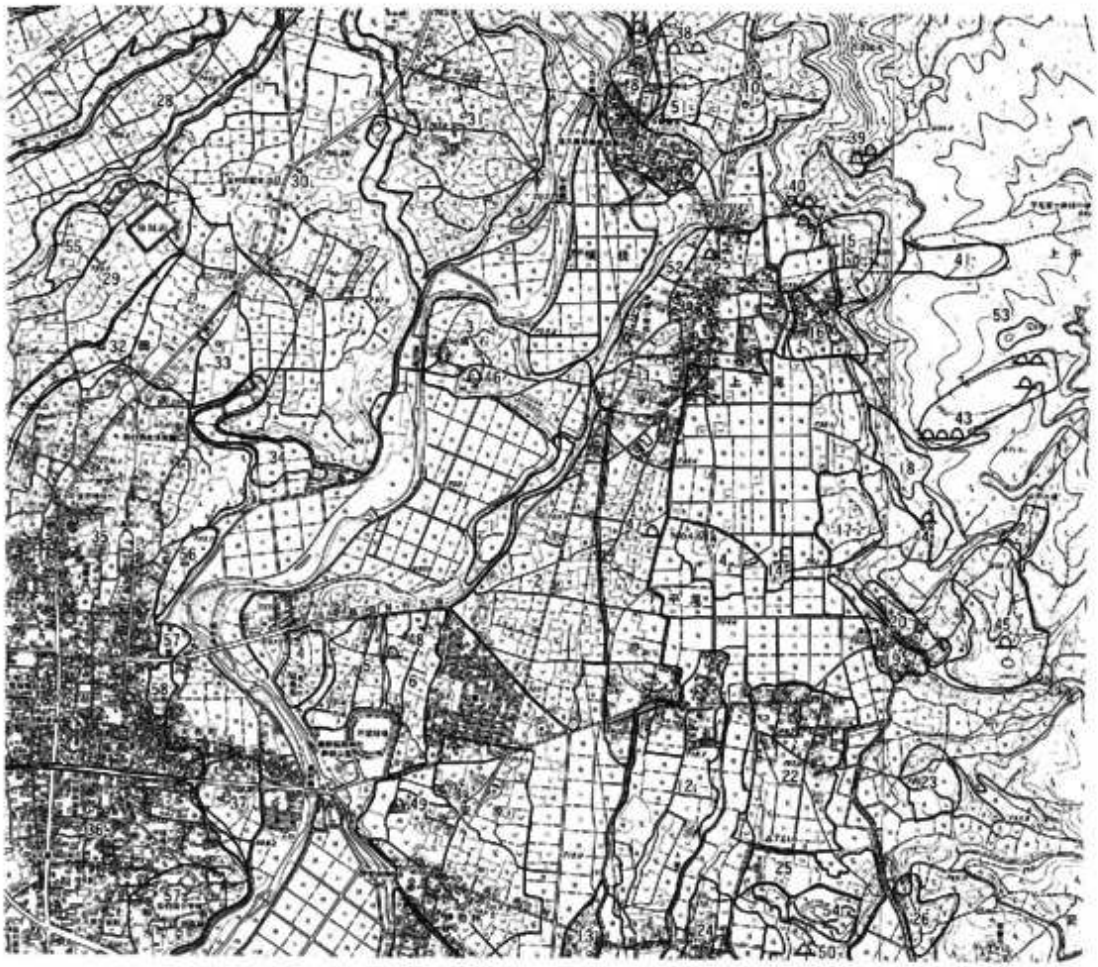
（白倉盛男）

第２節　遺跡の歴史的環境

腰巻遺跡は佐久市上平尾に位置し、浅間山麓を源流に佐久市の北東より屈曲しながら南流する湯川左岸段丘の２段目標高715m内外を測る地域に所在する。

佐久市教育委員会が実施した佐久市遺跡詳細分布調査報告書によると、湯川沿岸地帯には縄文時代から中世まで数多くの遺跡が分布している。特に湯川左岸の台地・山麓には古墳時代から平安時代までの遺跡・古墳が濃密に分布・所在する。本調査対象の腰巻遺跡でも弥生時代から平安時代の遺物が表面採集されている。隣接する湯川段丘の上段目に所在する西大久保遺跡群（２）も縄文時代から平安時代の遺物が表面採集されていた。昭和61年度に道路改修のため本遺跡の東方約200m内外の地点で南北方向に700m・幅10mの狭範囲で発掘調査が行なわれ縄文時代の遺物と中世と考えられる遺物の出土を見たが遺構等の検出はなかった。腰巻遺跡の南南西約600mの地点に当遺跡と同じ河岸段丘２段目にあたる地形上に下小平遺跡（４）が所在する。昭和55年度特別養護老人施設建設工事に伴い発掘調査が行なわれ縄文時代の明確な遺構は検出され得なかったが、縄文時代中期後半の曽利式土器少量・後期堀之内式・加曽利Ｂ式土器等が出土した。主に深鉢と注口土器の器種であった。打製石斧・石鏃も出土した。弥生時代では、後期竪穴住居址５棟

検出、内1棟から「ベット状遺構」が検出され興味深い資料を得た。遺物は弥生時代後期の壺・甕・高坏・坏・甑等の土器を多く出土している。古墳時代では前期の方形周溝墓2基も検出され主体部は検出されなかったが、周溝底より壺・坩・甕の土器類がほぼ完形に近い状態で出土している。腰巻遺跡の南方約3km内外の段丘三段目に蛇塚遺跡群（7）が所在する。昭和54年度長野県営住宅団地造成工事に伴ない蛇塚B遺跡発掘調査が実施され平安時代にあたる竪穴住居址5棟・土坑2基・溝状遺構1基が検出され土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器・石器等を出土している。土器類の大半は土師器で什器形態の坏形土器が占めている。なお、蛇塚古墳も（49）所在する。腰巻遺跡の南方約2.5km内外の段丘台地上に猫久保遺跡群の西御堂遺跡（13）・筒畑遺跡群の池畑遺跡（24）が所在し、佐久建設事務所が行なう県道香坂線の道路改良工事に伴ない長さ池畑遺跡約100m・西御堂遺跡約70m・幅10mの狭小な範囲の発掘調査が行なわれ、池畑遺跡から弥生時代終末期の竪穴住居址1棟・古墳時代初頭期の竪穴住居址1棟・時代不明溝状遺構2基、奈良時代から9世紀代の土坑1基、西御堂遺跡からは時代不明の土坑2基がそれぞれ検出された。又



第2図　周辺遺跡分布図

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分 No.	遺跡名	所在地	立地	時代 縄	弥	古	奈	平	中	備考
1	46	腰巻遺跡	上平尾字腰巻・高内	藤川二段丘		○	○		○	○	本調査
2	47	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保，下平尾字六間，上・中・下大久保他	藤川三段丘	○	○	○	○	○		S61年度発掘調査 本調査
3	53	袁石遺跡	上平尾字袁石・中川原他	二段丘		○	○	○	○		
4	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	藤川二段丘		○	○	○	○		S55年発掘調査
5	49	上小平遺跡	岩村田字上小平	三段丘					○		
6	48	横飯遺跡	安原字横飯	三段丘					○		
7	119	蛇塚A遺跡群	安原字蛇塚他	三段丘					○		
8	19	平の原遺跡群	横根字平の原・赤岩・伊勢石	二段丘	○	○	○	○	○		
9	17	延寿城遺跡群	横根字延寿城・石						○		
10	18	上の原遺跡群	横根字上の原・八本木・塚原・入大久保	三段丘	○	○	○	○	○		
11	56	東大久保遺跡群	上平尾字東大久保他，下平尾字宮の西他	三段丘	○	○	○	○	○		
12	127	戸屋敷遺跡群	安原字戸屋敷他，下平尾字下前原他	台地					○		
13	128	脇久保遺跡群	安原字脇久保・西御堂	台地					○		S60年度西御堂遺跡調査
14	59	宮前遺跡	下平尾字宮前	台地					○		
15	58	矢沢遺跡	上平尾字矢沢	山裾					○		
16	57	十二前遺跡	上平尾字十二前	山裾					○		
17	60	北山寺遺跡	下平尾字北山寺	山裾					○		
18	61	梅ケ窪遺跡	上平尾字梅ケ窪	山裾					○		
19	62	太田橋遺跡	下平尾字太田橋・開崎	山裾					○		
20	63	万助久保遺跡	下平尾字万助久保	山裾					○		
21	64	下伴居A遺跡	下平尾字下伴居	新田					○		
22	131	東村遺跡群	下平尾字東村・東前原	台地	○	○	○	○	○		
23	136	大角遺跡	下平尾字大角	台地		○	○	○	○		
24	130	筒畑遺跡群	安原字筒畑・池畑・下筒，新子田字田鶴	台地	○	○	○		○		S60年度筒畑遺跡調査
25	132	狭室遺跡群	安原字狭室他	台地			○	○	○		
26	134	岩久保遺跡	安原字岩久保	山裾		○			○		
27	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上中原・北中中原・上芝宮・下芝宮他	台地	○	○	○	○	○		S54・55・57年度発掘調査
28	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂通し，塩石他	台地		○	○	○	○	○	
29	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂・久保田畑・鑓溝鳴他 長土呂字舟久保	台地		○	○	○	○		S55・60 年度発掘調査 枇杷坂，上前跡遺跡
30	10	蕨毛坂遺跡群	小田井字笹沢・鼓藤窪，岩村田字東赤座・赤座原・東芝間他	藤川二～三段丘		○	○	○	○		S60・61・62年度発掘調査 依久畑文センター・県埋文センター
31	11	鈴板遺跡群	小田井字鈴月・鼠鳴澤他，横根字鈴坂他	三段丘		○	○	○	○		
32	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田他	低地		○	○	○	○		
33	43	西赤座遺跡	岩村田字西赤座他	台地		○	○	○	○		S61・62 年度発掘調査
34	44	上岩子遺跡	岩村田字上岩子他	低地					○		
35	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後・行人塚・新町・番田・荒町・古城他	藤川三段丘		○	○	○	○	○	S55・60 ～62年度調査 六供後・新町・官王遺跡
36	117	上の城遺跡群	岩村田字月通・上の城・西八日町他	藤川三段丘	○	○	○	○	○		S48・54・58年度調査 上の城・西八日町遺跡
37	118	下倉農石遺跡	岩村田字下倉農石他	二段丘					○		
38	22	横根古墳群	横根字赤坂・石・上の原・塚原他	三段丘			○				1～28号墳
39	24	平古墳群	横根字平1860—1	山頂			○				1号墳S60年度発掘調査
40	23	矢口古墳群	横根字矢口1838，1836—5，1816—1	山裾			○				1～3号墳
41	68	矢沢古墳群	上平尾字矢沢	山裾			○				
42	72	窟古墳	上平尾字窟988—1	三段丘			○				
43	69	城古墳群	上平尾字城	山裾			○				1～6号墳
44	74	一本松古墳	下平尾字一本松2835—1	山裾			○				
45	70	丸山古墳群	下平尾字丸山2742—8	山裾			○				
46	54	袁石古墳	上平尾字袁石559 —6	二段丘			○				
47	73	宮の西古墳	下平尾字宮の西419	台地			○				
48	55	横飯古墳	安原字横飯1520	三段丘			○				
49	126	蛇塚古墳	安原字蛇塚1367，1377	三段丘			○				
50	141	安原大塚古墳	安原字城前	山裾			○				
51	539	延寿城跡	横根字延寿城	二段丘						○	
52	67	白岩城跡	上平尾字古城跡	三段丘						○	
53	66	平尾城	上平尾字狐塚山	山頂						○	
54	139	鳳城跡	安原字城山・城裏	山頂						○	
55	541	曽根新城跡	岩村田字下火袋	台地						○	
56	51—2	石笠城跡	岩村田字石笠他	三段丘						○	
57	51—1	王城跡	岩村田字古城	三段丘						○	S54年度一部調査
58	51—3	鳳岩城跡	岩村田字古城	三段丘						○	S55・59年度発掘調査
59	542	藤ケ城跡	岩村田字東八日町・南上ノ城	三段丘						○	

池畑遺跡からは弥生時代後期から末期の壺・甕・高坏・蓋・手捏等の土器類・古式土師器の小型高坏・奈良・平安時代の所産の甕・坏形土器・灰釉陶器片・石器・石製品・チャートの石核・紡錘車を出土し、平安時代の土坑より馬骨・牛骨を出土している。腰巻遺跡東方の丸山古墳群（45）

地帯より県埋文センターの調査で古墳前期竪穴住居址1棟が検出された。このように湯川左岸で発掘調査された遺跡は広大な台地に点と点の狭小な面積であるため実態は今一つ不鮮明であるが、遺跡密集度は右岸地域に比べるとやや希薄な感を受ける。とは言え、潰石遺跡（3）・上小平遺跡（5）・棧敷遺跡（6）・蛇塚A遺跡（7）・芋の原遺跡（8）・延寿城遺跡（9）・上の原遺跡（10）・東大久保遺跡群（11）・戸屋敷遺跡群（12）・猫久保遺跡群（13）・宮前遺跡（14）・矢沢遺跡（15）・十二前遺跡（16）・北山寺遺跡（17）・橋ヶ窪遺跡（18）・本田橋遺跡（19）・万助久保遺跡（20）・下伴助遺跡（21）・東村遺跡群（22）・大角遺跡（23）・筒畑遺跡群（24）・筏室遺跡群（25）・岩久保遺跡（26）等の広大な面積を有する未発掘調査遺跡は、まだまだ興味深い事実を内包している可能性が高いと言えよう。更に左岸地域は28基を数える横根古墳群（38）をはじめ平古墳（39）・矢口古墳群（40）3基・矢沢古墳群（41）・宿古墳（42）・城古墳群（43）6基・一本松古墳（44）・丸山古墳群（45）・潰石古墳（46）・宮の西古墳（47）・棧敷古墳（48）・蛇塚古墳（49）・安原大塚古墳（50）等佐久平でも有数の群集墳密集地帯でもあるが発掘調査された古墳は1基もなく、実態は不明確で前期古墳も確認されていない。対岸の湯川右岸台地では芝宮遺跡群（27）・批杷坂遺跡群（29）（上直路遺跡）・栗毛坂遺跡群（30）・東赤座遺跡・西赤座遺跡・上の城遺跡群（36）など弥生～平安時代の大規模な集落址の発掘調査が進行しており、その密集度は佐久平では随一と言える。

以上腰巻遺跡中心に湯川流域の遺跡を概観したが、正式発掘調査した遺跡は数少なく、面積も極めて狭小であるため不鮮明さは拭いきれないが、右岸地域と比べると遺構密度がやや希薄であること、弥生時代終末～古墳時代前期の遺構分布が多そうであることなどが指摘できる。今後の調査の展開に期待されるところ大である。

（黒岩忠男）

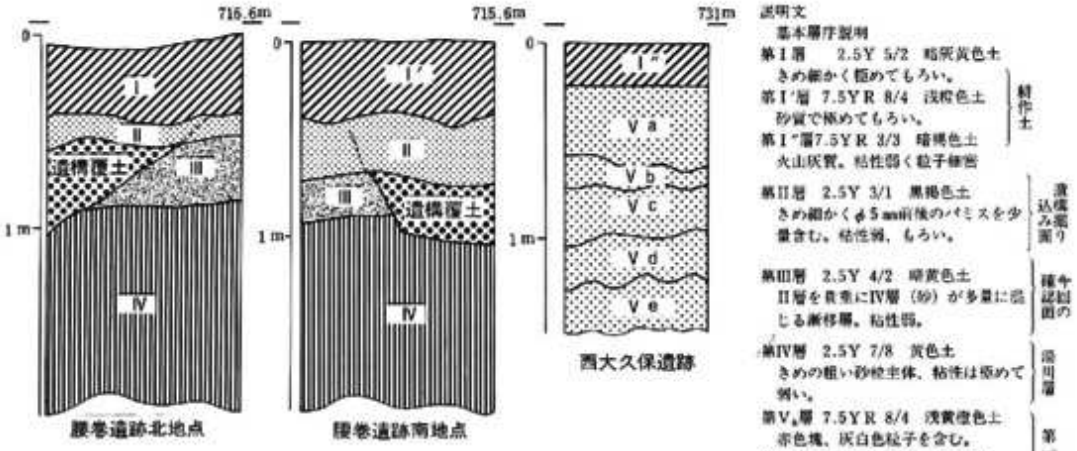
第Ⅲ章　基 本 層 序

（第３図）

腰巻・西大久保II遺跡は湯川左岸の河岸段丘上に立地する遺跡である。標高715m内外の２段目の段丘面が腰巻遺跡、標高730m内外の３段目の段丘面が西大久保II遺跡にあたり、２～３段目の比高差は15m以上におよび、地盤も大きな異なりをみせる。

腰巻遺跡の基本土層は概ね四層に分かれる。耕作土は火山灰・砂質で色調が明るく粘性が弱い。三段目からの崩落土と第II層が攪拌されて形成されたと考えられる。第II層黒褐色土は段丘先端部では薄く、基部に向って漸次厚い堆積を示す。遺構掘り込み面はこの層上にあったと考えられるが、遺構覆土との分別が極めて困難であったため、今回は第II層上での遺構確認はできなかった。第Ⅲ層は第Ⅳ層砂層から第II層黒褐色土への移行過程において形成された漸移層である。今回は第Ⅲ層上において遺構確認を行った。第Ⅳ層は砂粒主体の所謂『湯川層』である。地表下、２mまでの層厚は確認されたが、それ以下は未確認である。

西大久保II遺跡の基本土層は大別で二層からなり、昭和60年度に本調査区から東方約200mの地点で行われた第１次調査と大差ない。耕作土は火山灰・砂質の粘質の弱い土で、層厚は30cm内外と薄い。以下は２段目の段丘面では確認できなかった第Ⅴ層追分第一軽石流（ローム層）の厚い堆積が認められた。今回は遺構は検出されなかったが、確認面は第Ⅴ層上と考えられる。



第３図　基本層序模式図

第IV章　遺構と遺物

第１節　検出遺構・遺物の概要

腰巻遺跡

遺構　竪穴住居址　７棟　（弥生時代後期１、古墳時代前期４、平安時代２）

竪穴遺構　１基　（古墳時代前期１）

溝状遺構　４基　（中世（？）１、時期不明３）

土　坑　４基　（時期不明）

遺物　縄文時代　土器　深鉢等　石器　打製石斧等

弥生時代　土器　壺・甕・鉢・高坏

古墳時代　土器　壺・甕・鉢・高坏・坩　石器・磨製石鏃・敲石・台石・砥石

平安時代　土器　壺・甕等　金属器　佐波理鋺　鉄刀子

中世遺構　陶磁器　土師器

西大久保II遺跡　遺構・遺物なし

第２節　竪穴住居址

１）第１号住居址

遺構（第６・７図、図版二・三）

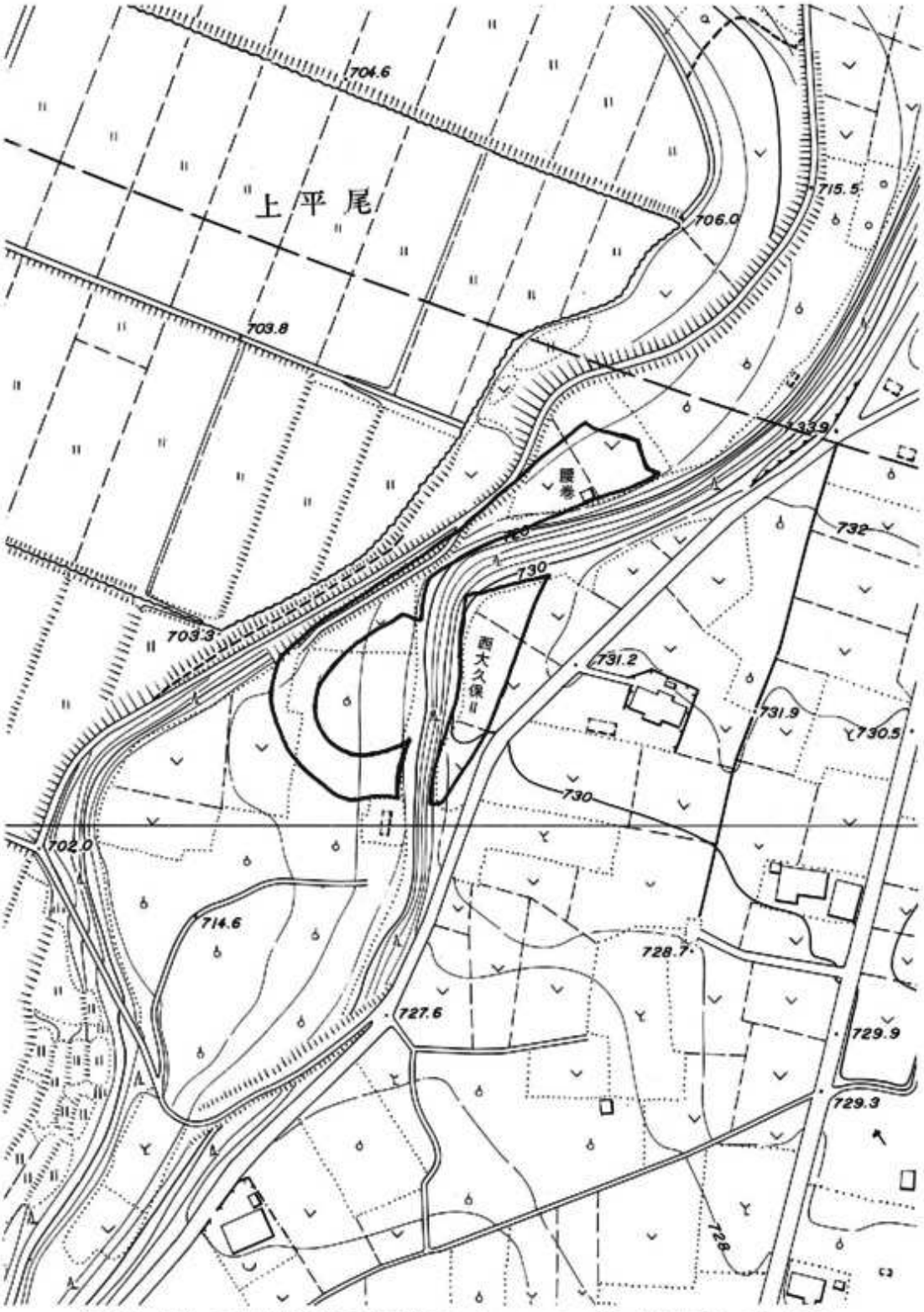
本址は調査北部地区の中央う・え－２・３グリッド内に位置し、第III層上において確認された。他遺構との重複関係はないが表土削平時に北・東壁を破壊した。

平面形態は南北短軸長386cm、東西長軸長420cm、北壁長368cm、東壁長315cm、西壁長316cm、南壁長386cmのやや不整な隅丸方形を呈し、長軸方位はN－51°－Eを示す。

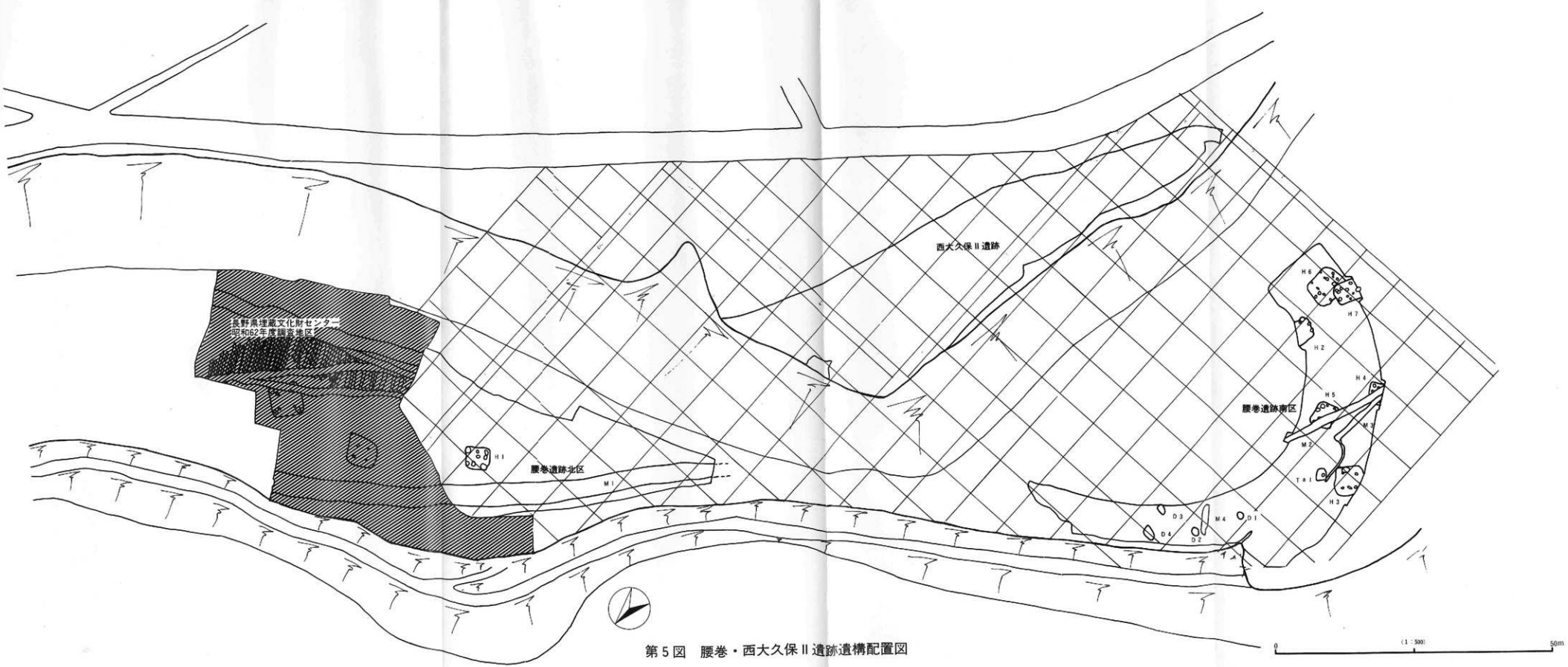
覆土は極く小さい砂粒とφ３cm内外のパミスを含む黒褐色土１層が確認されたのみである。

確認面からの壁高は残存する西壁で５～９cm、南壁で６cm内外を計測する。壁体は第III・IV層をそのまま利用したと考えられる。壁面は平滑とは言い難く、床面からの立ち上がりは緩い。

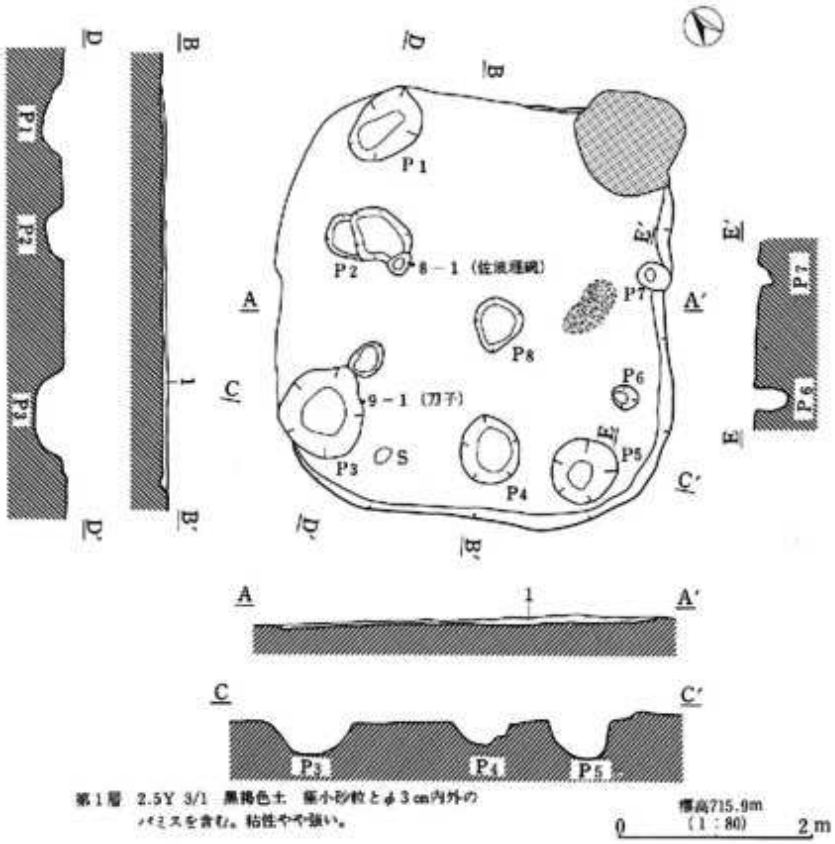
壁溝は検出されなかった。



第4図　腰巻・西大久保II遺跡発掘区設定図（1：2,500　佐久市基本図9・10による）



第5図　腰巻・西大久保Ⅱ遺跡遺構配置図

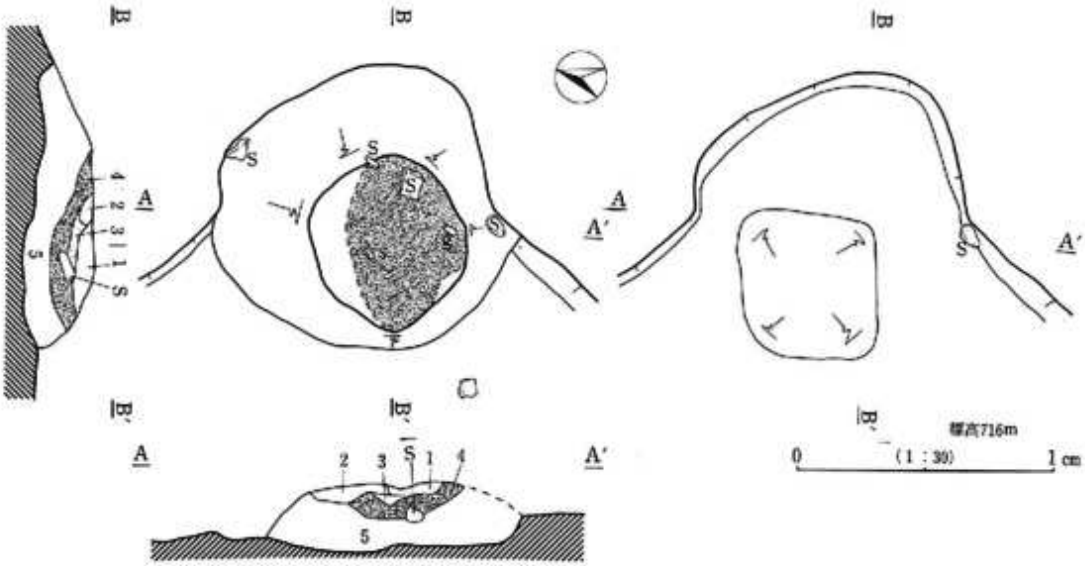


第6図　第1号住居址実測図

床面は第Ⅲ層上全面にわたって暗褐色の薄い貼床が認められた。概ね平坦であるが、南西から北東方向へ向って徐々にレベルが低くなる傾向にある。構築状態は叩きしめてはいるものの堅固ではなく、やや軟弱である。

ピットは8個検出された。規則的な配置とは言い難く、主柱穴と断言できるものはない。柱穴は設けなかったと考えるのが妥当である。北壁に沿ってP_1～P_3、西壁に沿ってP_3～P_5、南壁に沿ってP_5～P_7が並び住居のほぼ中央部にP_8が位置する。P_1が85×59cmの楕円形で深さ21cm、P_2が88×56cmの楕円形で深さ21cm、P_3が87×97cmの不整円形で深さ32cm、P_4が60×71cmの楕円形で深さ22cm、P_5が67cm×69cmの円形で深さ40cm、P_6が27×25cmの円形で深さ34cm、P_7が35×29cmの楕円形で深さ11cmを測る。

カマドは南東コーナーより検出された。遺存状態は悪い。規模は焚口～煙道までの長さ120cm、幅118cmを測る。煙道部は南東コーナー壁を約30cm程三日月型に掘り込んだ部分に設定され、火床面は床面上に10cm以上盛られた第5層黄灰色土上に67×47cmの不整楕円形の範囲で認められた（第4層）。真赤に焼け込んだ状態であった。天井、袖については明らかでないが、少なくとも床



第1層　7.5YR 8/6　浅黄橙色土　流土に黒色土がまじる。(天井構築土か？)
第2層　2.5Y 2/1　黒色土　きめ細かく純度が高い。
第3層　7.5Y 8/1　灰白色土　灰層
第4層　5YR 7/8　橙色土　純粋な流土層（火床）
第5層　2.5Y 4/1　黄灰色土　φ5mm前後のパミスを含む。(構土と考えられる。)

第7図　第1号住居址カマド実測図

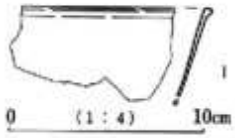
面よりも高位に火処をもつ、稀有な構造のカマドであったと考えられる。

遺物の出土状態

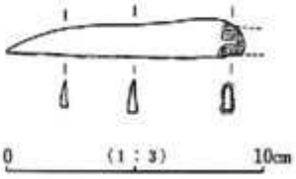
遺物は少なく、土器の小片が床面上、カマド内に散在するのみである。炭化物も散布する。

遺物（第8・9図、図版十五）

土師器・金属器がある。土師器はいずれも細片で形態の知られるものはない。羽釜の鍔状部分と考えられるものが一点ある。



第8図　第1号住居址出土佐波理鋺実測図



第9図　第1号住居址出土鉄器実測図

金属器は青銅製と鉄製がある。青銅製には佐波理鋺8－1がある。口縁端部が短く肥厚外反する特徴をもつが、強い燃焼を受けたためか歪みが著しく、全体形状、法量を知ることはできない。鉄製品には刀子9－1があり、刀部長は8.5cmを測る。茎部は欠損するが、断面形は矩形を呈し、木質が付着する。刃関、背関ともあり、両関の刀子である。

本址の所産は羽釜と考えられる破片の存在から平安時代10世紀後半以降と考えられる。(小山)

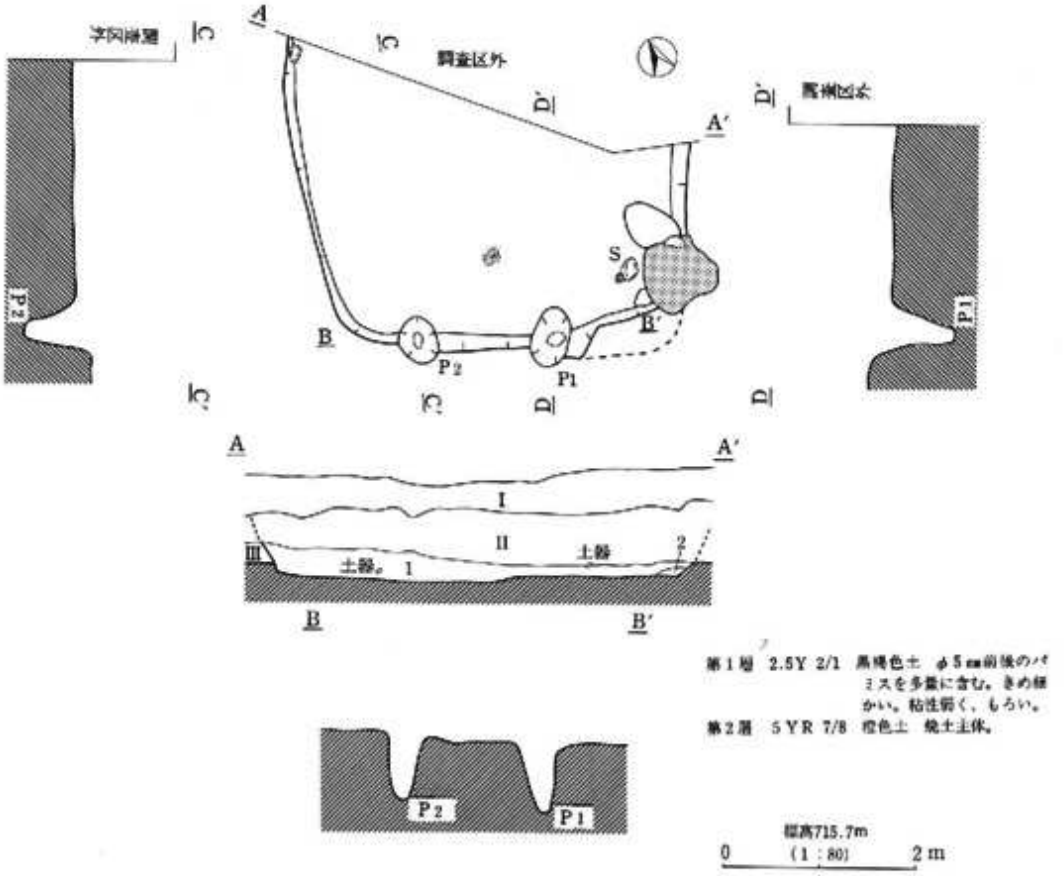
2）第２号住居址

遺構（第10・11図、図版三）

本址は調査南部地区の南側そ・たー11グリッド内に位置し、第III層上において確認された。他遺構との重複関係はもたないが、西・東壁一部はトレンチ確認調査時に破壊され、また、北半部は調査区外にある。従って形状は不明であるが、東西長が384cmを測ることから、４m以下の方形・長方形プランをもつ住居が想定される。

覆土は二層からなるが、大方は第１層黒褐色土に占められる。第２層・焼土は東壁下に極く僅かに認められる。

確認面からの壁高は破壊されていない部分で15cm～20cmを測るが、実際にはかなり深い壁高を有していたと考えられる。壁体は地山第III・IV層を利用したと考えられ、やや軟弱である。

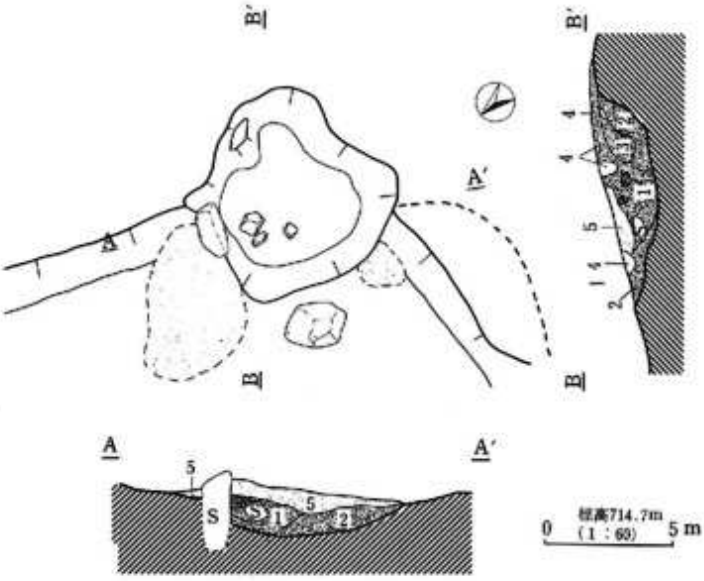


第10図　第２号住居址実測図

床面は地山第IV層砂層まで平坦に掘り窪めたのち、暗褐色土を薄く敷いて叩きしめた貼床が全面に認められる。平坦で堅固な構築状態である。

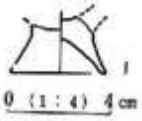
ピットは2個検出された。南壁を掘り込んだ状態で2個並んでおり、柱穴と考えられる。床面上からのピットの検出はない。P_1は62×38cmの楕円形で深さ69cm、P_2は49×40cmの楕円形で深さ50cmを測る。断面形はいずれも細長いU字形を呈する。

カマドは南東コーナーに設けられる。南東コーナー壁を大きく不整円状に掘り込んで構築されており、焚口～煙道の長さ約1m、幅約70cmを測る。遺存状態不良のため、天井、袖の形状は不明であるが、北袖の芯には礫が用いられている。火床は不整円形の掘り込み内に第1～3層を埋めもどし、床面と同レベルに平坦化された上に設けられたと考えられるが位置は不明確である。カマド内及びその周辺には灰の著しい流出が認められた。



第1層　茶褐色土　焼土粒子を多く含む。粒子粗くしまりなし。粘性なし。
第2層　暗茶褐色土　焼土の含有量は第1層よりも少ない。粒子密でしまりややあり。粘性なし。
第3層　橙褐色土　焼土層
第4層　黒褐色土　粒子密でなめらか。しまりややあり。粘性なし。灰？
第5層　白黄褐色土　粒子密でなめらか。しまりややあり。粘性なし。灰層

第11図　第2号住居址カマド実測図



第12図第2号住居址出土土器実測図

遺物の出土状態

遺物は非常に少なく細片が床上、覆土内に僅かに散布する。

遺物（第12図）

土師器片が10片検出されたのみである。器種には甕とミニュチュアの高坏の形状を呈するものがある。甕はヘラケズリ、ヘラナデの施される胴部細片ばかりで形態は把握できない。ミニュチュアの高坏と考えられる破片12－1は脚部にあたるが、これも全体形状は把握できない。

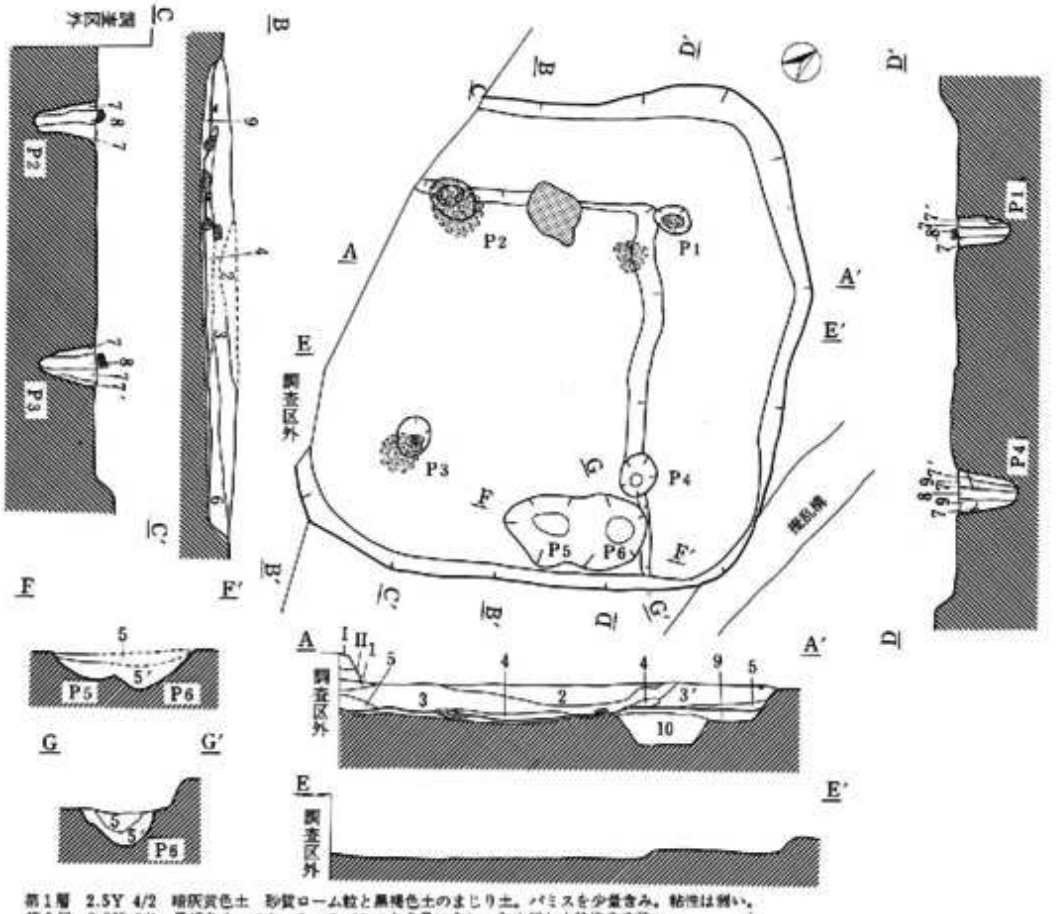
以上、出土遺物には本址の所産を決定し得るものがないが、カマドが南東隅にあることを考慮すると本址の所産は第1号住居址に近いと考えられる。（小山）

3）第3号住居址

遺構（第13・14図、図版四～六）

本址は調査南部地区の南側つ・て－15・16グリッド内にあり、第Ⅲ層上で確認された。他遺構との重複関係はもたないが南東コーナーは撹乱溝で壁の上部を破壊され、北西コーナーから西側にかけての壁と床面は調査区外にあるため、未調査である。

平面プランは東壁長443cm、西壁長（384）cm、南壁長416cm、北壁長（415）cmを測り、南北長

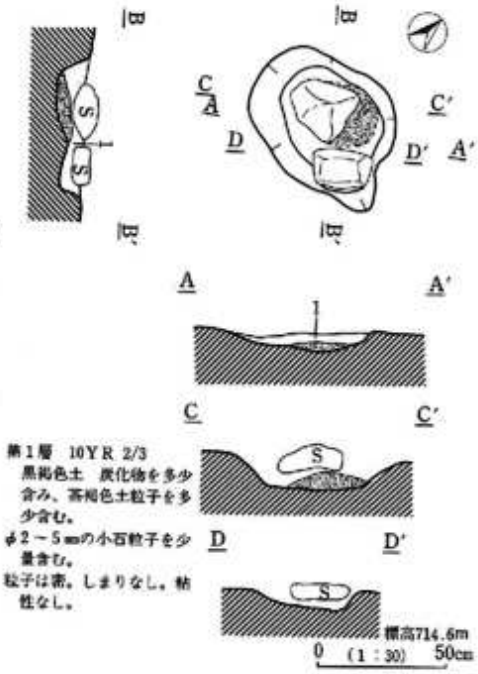


第1層　2.5Y 4/2　暗灰黄色土　砂質ローム粒と黒褐色土のまじり土。パミスを少量含み、粘性は弱い。
第2層　2.5Y 3/1　黒褐色土　φ3～5mmのパミスを多量に含む。きめ細かく粘性やや強い。
第3層　2.5Y 4/1　黄灰色土　炭化材とφ5mmのパミスを少量含む。黄色ロームのまざり。粘性極く弱い。
第3'層　2.5Y 4/2　暗灰黄色土　第3層より炭化物が少なく、ロームとパミスの量が多くなる。粘性は弱い。
第4層　2.5Y 3/1　黒褐色土　炭化材を含む。きめ細かく、粘性は極く弱い。
第5層　2.5Y 2/1　黒色土　φ5mm前後の砂粒を多量に含む。きめ細かく、粘性は強い。
第5'層　2.5Y 2/1　黒褐色土　パミス粒子を多少含み、φ2mmの小石を多少含む。粒子密。しまりややあり。粘性なし。
第6層　2.5Y 3/1　黒褐色土　砂粒とパミスを多量に含む。きめ細かく、粘性は弱い。
第7層　10YR 2/1　黒褐色土　パミス粒子を多少含み、φ2～5mmの小石粒子を少量含む。粒子密。しまりややあり。粘性なし。
第7'層　10YR 3/3　茶褐色土　第1層を基調とするが第1層よりパミス粒子を多く含み、柱穴掘入み壁の崩落層と考えられる。粒子粗くしまりなし。粘性なし。
第8層　10YR 1.7/1　黒褐色土　φ2mmの小石を少量含む。腐蝕土か。粒子密で細かく、しまりなし。粘性ややあり。
第9層　10YR 2/2　暗茶褐色土　パミス粒子とφ2～5mmの小石粒子を僅かに含む。粒子細かく、しまりあり。粘性なし。
第10層　10YR 3/4　茶褐色土　地山の黄色砂粒と茶褐色土粒の混合する層で、小礫は含まない。しまりややあり。粘性なし。

第13図　第3等住居址実測図

466cmの隅丸方形を呈し、長軸方位N－46°－Wを示す。

覆土は概ね六層からなり、ほぼレンズ状堆積の第1～3層に大方が覆われ、ここまでは自然堆積と考えられる。第1・2層は表土を主とした層、第3・3′層は炭化物・黄色ロームを含み、焼土層（第4～6層）との関連が密接である。第4～6層は床面直上に堆積し、一様に炭化物の影響を受け、黒色系の色調を呈す。大型の炭化材も多量に含むことから、住居焼失に強く関連すると思われる。

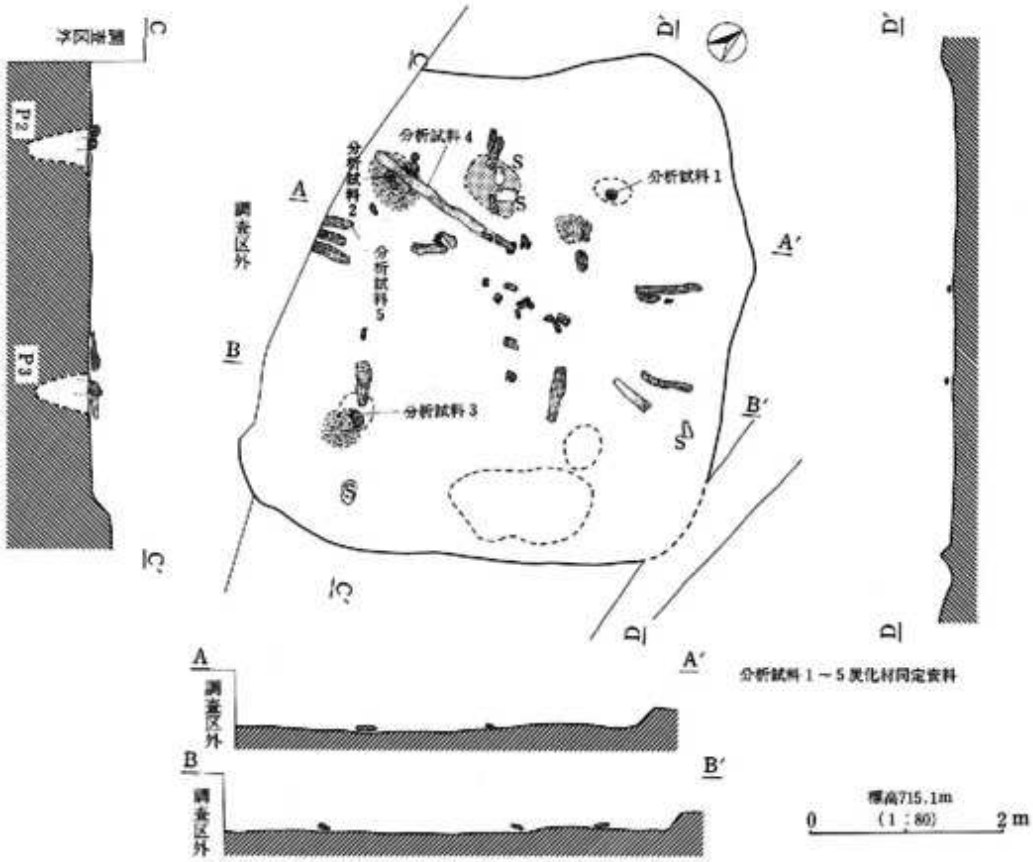


第14図　第3号住居址炉址実測図

確認面からの壁高は10～25.5cmを測り、壁体は掘り込み層第III・IV層上に極く薄く、第9層暗茶褐色土を貼って補強したと考えられるが現状は崩れ易い。床面からの立ち上がりは緩い。床面は北壁から東壁沿いに幅80～120cmの「鍵状」の高まりがみられ、所謂『ベッド状遺構』と考えられる。床面の低い部分との段差は0.5～6.5cmを測る。床面の状態は壁体と同様に暗茶褐色土が貼られており、「ベッド」部分は厚く構築され堅固であるが、他は薄くやや軟弱である。また、ベッド状遺構下の一部には深さ33cmの土坑状の掘り込みがあり、地山砂粒と茶褐色土の混ざった土が充填されていた。

ピットは6個検出された。住居各コーナーに整然と方形配置されるP_1～P_4は主柱穴である。深度は61～63cm、断面形は概ねU字形で一致する。P_1は40×29cmの楕円形を呈し、断面は中程で弱い段を有する。P_2は52×39cmの楕円形を呈し、断面は中程で弱い段を有する。P_3は42×34cmの楕円形、P_4は46×37cmの円形を呈している。P_1～P_3プランの覆土直上には現存高で10cm内外の炭化した柱が立ったままの状態で検出された。覆土は概ね二層からなり、第7・7′層は柱の固定土、第8層は炭化した柱の延長線上にあり、土中にあって炭化しなかった柱の腐触土と考えられる。P_5・P_6は南壁直下の東寄りに位置し、P_5が146×68cmの楕円形、P_6が27×28cmの円形を呈する。断面形はP_5が緩やかに窪み、P_6はU字形を呈する。覆土は住居覆土下層の第5層黒褐色土と、これに砂粒、パミスを含む第5′層からなる。

炉址は北側主柱穴P_1・P_2の中間に位置し、地床炉である。100×138cmの楕円形を呈し、最深部は23cmを測る。覆土は黒褐色土一層からなり、炭化物と茶褐色土を少量含む。火床はプラン内北側寄りに径24cmの円形範囲で5cmの厚さで分布する茶褐色土が焼けた焼土が相当する。その上に25×26cm大の略三角形偏平気味の石が、その南側に同一レベルで21×16cm大の面取りされた長方



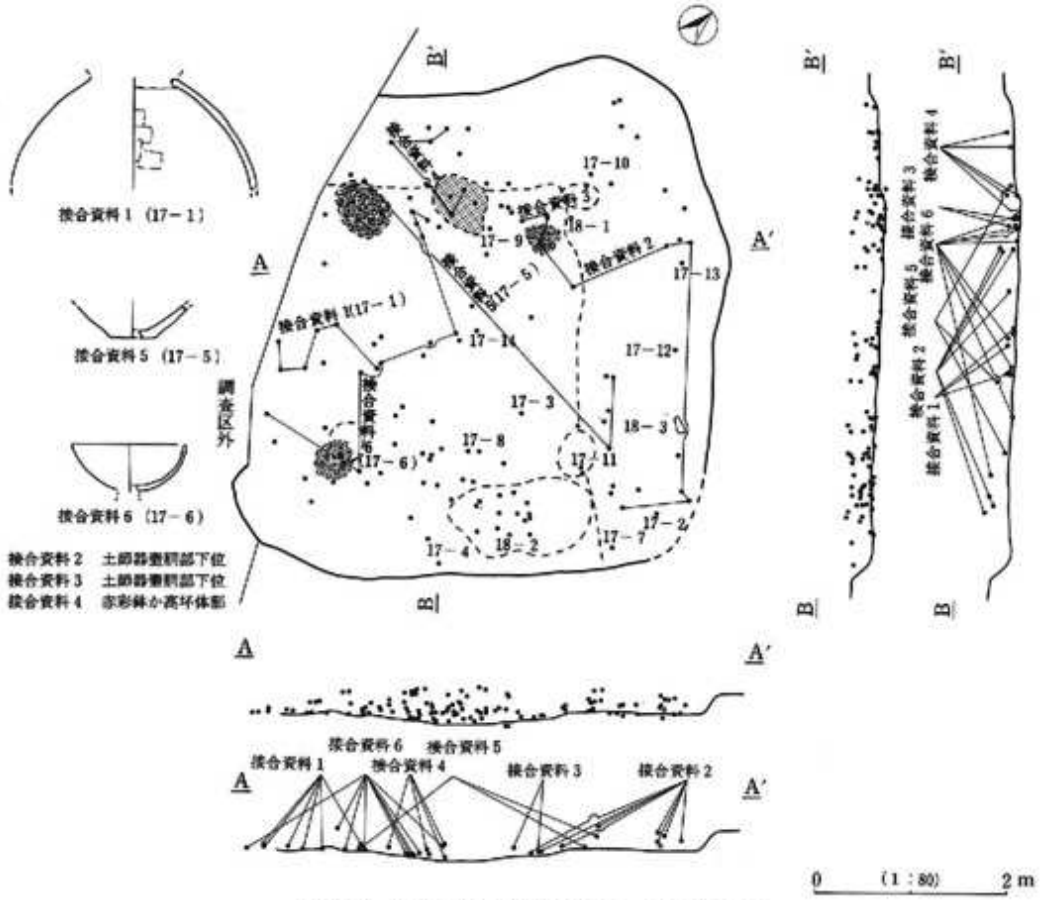
第15図　第３号住居址炭化材分布図

形偏平の石が配されている。

遺物の出土状態（第15・16図）

本住居址からは炭化材、土器、石器が出土している。炭化材は多量に分布し、そのほとんどが床面より僅かに浮いた状態で出土した。大型のものはP_2周辺により集中し、東西方向を向くものが多い。P_1・P_2・P_3上の柱とそれに接する炭化材が丸太材、他は割材である。P_3・P_4北側には南北方向を向く大型の炭化材が各一本ある。割材であり、梁・桁柱が想定できる。東壁下中央に約１mの間隔をあけて東西方向に２本並ぶ炭化材も割材である。いずれの炭化材も住居構築に深く関っていたと思われる。

土器は総数122片と少なく、総べて破損品で完存品は一点もない。分布傾向は炉・P_3周辺に比較的集中するが、全体的に散漫で、床中央部、ベッド状遺構部分の分布は特に希薄である。接合資料１・２・４・５・６は各破片が住居内各所に広く分布しており、散乱した状況が看取される。各層位毎の分布状況は床面直上第１・２層中のものはやや少なく、覆土下層の第３～６層中に多い。接合資料２は第２・３・５層、接合資料６は床面上から第３層の間で接合関係を有する。以



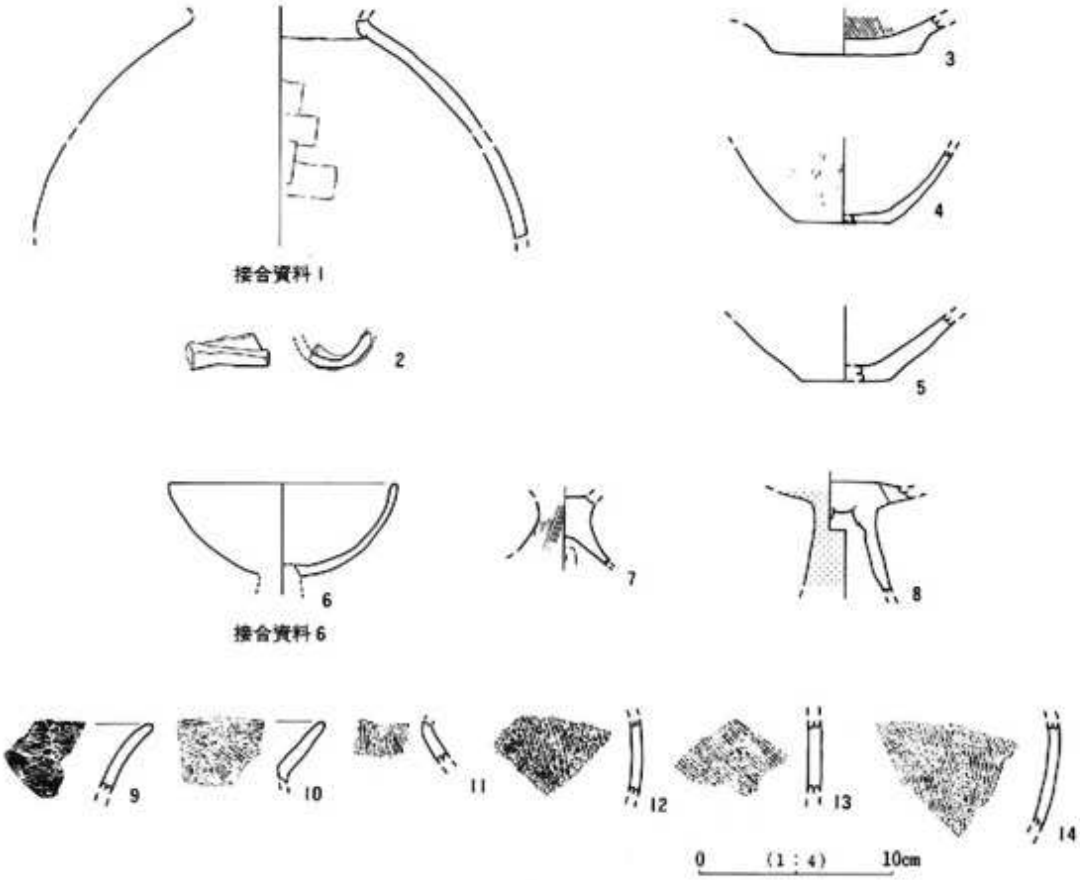
第16図　第3号住居址遺物分布・接合関係図

上のような平面・垂直分布の状況から本址の出土遺物は埋没時期に若干の時間差があるものの、ほぼ同時期のものと一括して扱って良いと思われる。石器は少なくP_1南側より18－1、P_5内よりは18－2、東壁下南側床面上より18－3が出土している。　（篠原）

遺物（第17・18図、図版十五）

土師器の器種には壺・甕・鉢・高坏・器台・注口土器がある。全形態の伺えるものはない。壺17－1は球胴を呈する。注口土器は注口部17－2がある。甕は刷毛目をもつもの17－10～15などが多い。高坏は小型高坏17－6・7と坏下部で段をもち脚部は柱状を呈する赤彩品17－8がある。鉢・器台は図化し得なかったが、椀状を呈する赤彩品（鉢）・受部が段をもって外反する（器台）がある。石器は粘板岩製磨製石鏃18－1・2と安山岩砥石18－3がある。

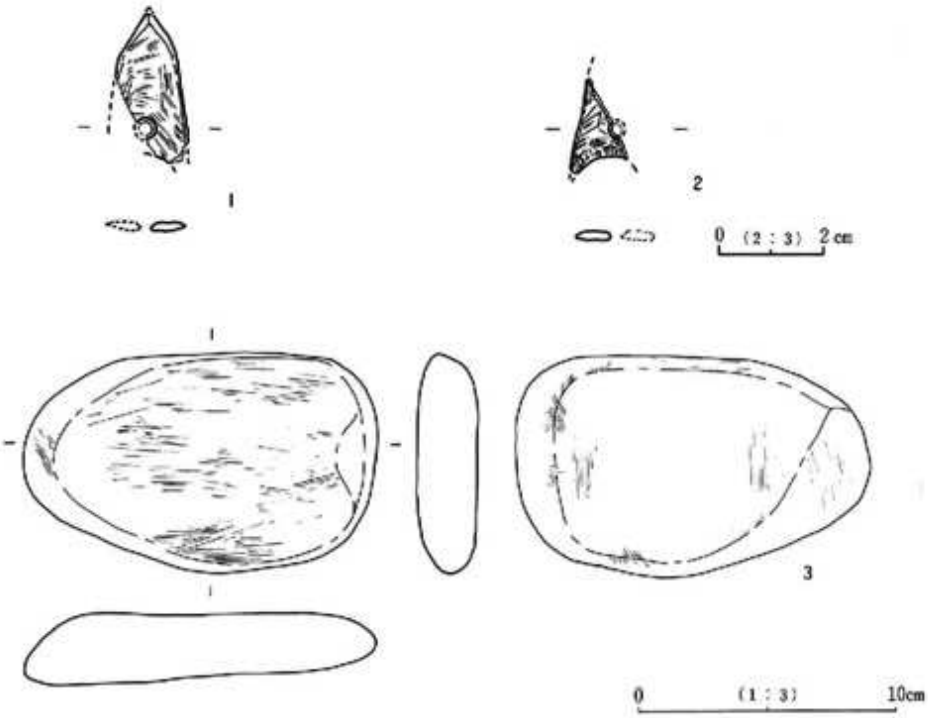
以上の遺物は古墳時代前期後半に包括される。　（小山）



第17図　第3号住居址出土土器実測図

第2表　第3号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調整	備考
17－1	土師壺	— <11.3> —	脚部欠形を呈し、頸部は強く屈曲すると考えられる。	内）横位ナデ 外）ナデののち、丁寧な横位のヘラミガキが施される。	胎土密、焼成良好 色調　7.5YR7/4（にぶい橙色） №13・14・16～18・20・21 回転実測B
17－2	土師在口鉢	— — —	口縁部が面取りされる在口鉢の在口部	内）ナデ 外）丁寧なヘラミガキ	胎土密、焼成良好 色調　2.5YR6/6（橙） 破片実測B　№83
17－3	土師壺	— <2.1> (7.6)		内）横斜位ハケメ調整 外）横位ハケメ調整ののち縦位ヘラミガキ	色調　5YR6/6（橙） 回転実測B　№91
17－4	土師甕	— <3.8> (4.6)		内）ナデ 外）ヘラ削り→横位ハケメ→縦位ヘラミガキ	色調　10YR4/3（にぶい黄褐） 回転実測B　№1
17－5	土師甕	— <3.1> (4.4)		内）横位ヘラナデ 外）縦位ヘラナデ	色調　7.5YR7/6（橙） 回転B　№32・74・78
17－6	土師高杯	11.8 <4.8> —	杯部椀状を呈す。小型高杯	内外面横ハケメ調整ののち、斜・横位の丁寧なヘラミガキ	胎土密、焼成良好 色調　5YR6/8（橙） 回転A　№7・19・34～37・120
17－7	土師高杯	— <3.6> —		内）脚部ヘラケズリののちナデ、杯部ヘラミガキ 外）ハケメ調整ののち縦位ヘラミガキ	胎土密、焼成良好 色調　10YR6/6（黄橙） 回転A　№88
17－8	土師高杯	— <5.7> —	脚部柱状を呈し、下端で水平に開くと考えられる。	内）杯部赤色塗彩、丁寧なヘラミガキ、脚部雑なナデ 外）杯部ハケメ調整ののち横位ヘラミガキ、赤色塗彩、脚部ハケメ調整ののち縦位ヘラミガキ	胎土密、焼成良好 色調　7.5YR6/8（橙） 回転A　№93



第18図　第３号住居址出土石器実測図

４）第４号住居址

遺構（第19・20図、図版六・七）

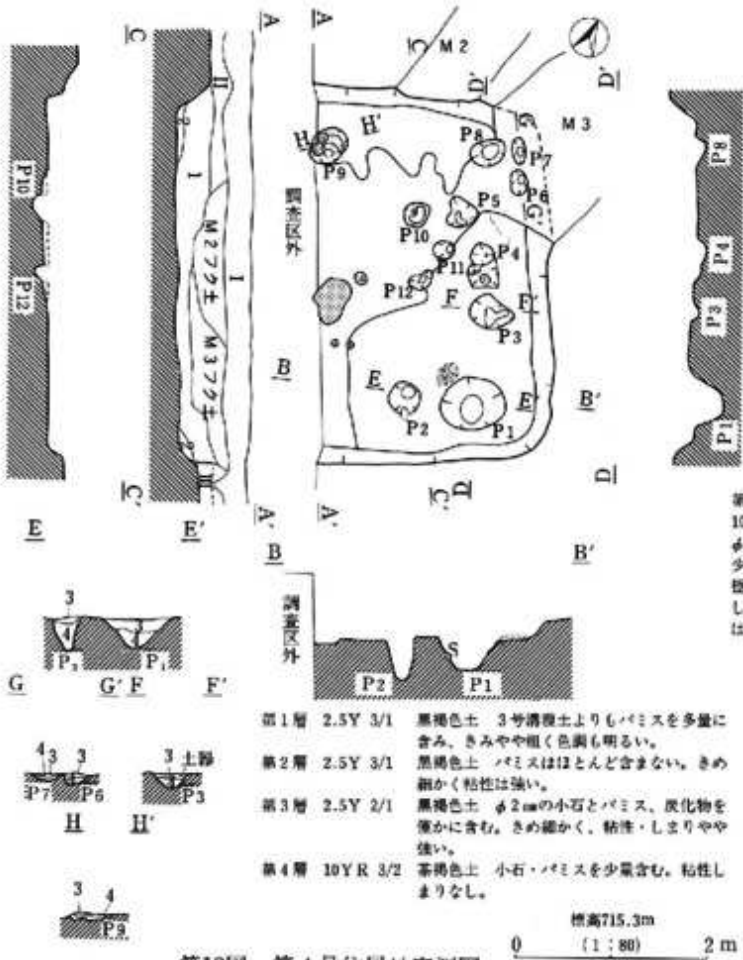
本址は調査南部地区の南側、つ－17・18グリッド内に位置し、第Ⅲ層上において確認された。第２・３号溝と重複し、北東コーナー壁および床面を破壊され、西側半分は調査区外にある。

このため、全形態は知り得ないが、東壁長305cmの方形か長方形を呈すると考えられる。

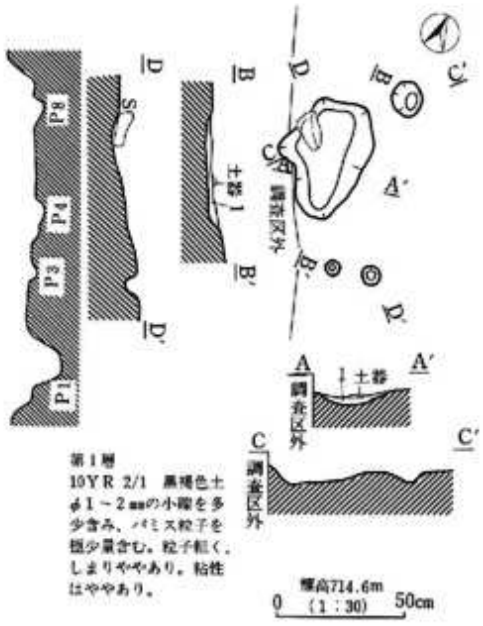
覆土は二層からなり、第１層が主体で、第２層は壁下に僅かに堆積する。これらは同色調の黒褐色土であるが、第１層はパミスを多く含むのに対し、第２層はほとんど含まず、きめ細かい。

確認面からの壁高は18.5～36.5cmを測り、壁体は地山の砂層上に極く薄く明茶褐色土を貼るが、崩れ易い。床面からは急傾斜で立ち上がる。床面も全面に黄茶褐色土を貼るが、堅固に叩きしめられるのは北壁沿いと、東壁から南壁に沿った部分のみで、北東コーナーからP_{10}・P_{12}付近にかけては第３号溝の影響からか貼床はみられず、調査区外寄りではすぐに地山砂層となり軟弱である。

ピットは15個検出されたが主柱穴と考えられるものはない。P_1は66×54cmの楕円形、断面逆台形を呈し、深度は34cm、P_2は径33cmの円形、断面U字形を呈し、深度は44cmを測る。P_4～P_{15}はやや不明瞭なピットである。P_4・P_9はそれぞれ東壁直下、北壁直下に位置し、径10cm内外の小ピット

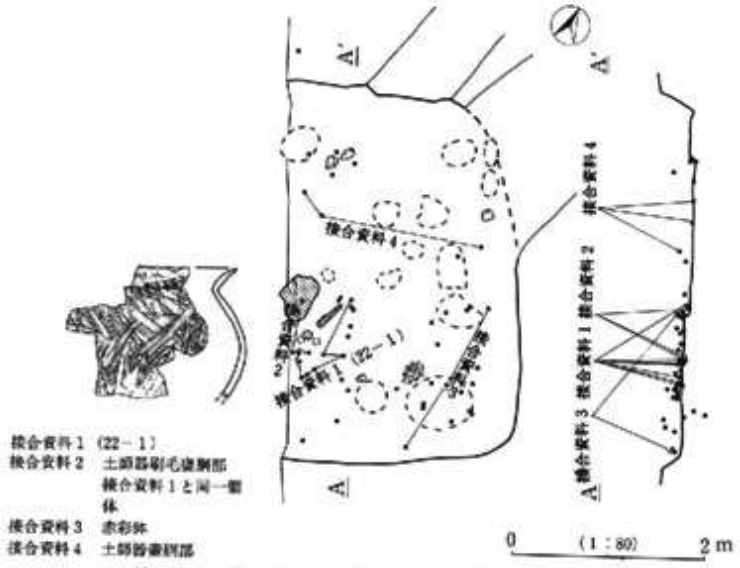


第19図　第4号住居址実測図



第20図　第4号住居址炉址実測図

を2～3個伴っており、深度はともに11cmを測る。P_6・P_7は第3号溝に破壊された北東コーナーに位置し、P_6は26×17cm、深度10cm、P_7は26×15cm、深度7.5cmを測り、酷似した形態をとる。P_7西側に隣接するP_8は37×26cmの楕円形を呈し、深度は7.5cmを測る。P_5・P_{10}・P_{11}・P_{12}は壁から離れた位置にあり、P_5は一辺32cmの略三角形、深度8.5cm、P_{11}は22×18cmの楕円形、深度9.5cm、P_{12}は27×15cmの楕円形、深度10cmである。P_{13}・P_{14}・P_{15}は径10cm内外と極端



第21図　第4号住居址炭化材・遺物分布図

に小さく、深度も4～6cmと浅い。炉付近にあるため、何らかの関連も考えられる。覆土はP_1～P_3・P_9・P_{10}が二層（第3・4層）からなり、P_4・P_5・P_8・P_{13}～P_{15}は第3層のみ、P_{10}～P_{12}は第4層のみである。

第22図　第4号住居址出土土器実測図

炉と考えられる範囲は住居中央南寄りにあり、92×66cmの略楕円形に床面を浅く掘り窪めている。東側端から4×13cmの面取りされた柱状の花崗岩が床面よりも僅かに浮いた状態で置かれており、炉縁石とも考えられる。覆土は黒褐色土一層のみである。焼土範囲がなく火処として機能したとは考え難い。

遺物の出土状態（第21図）

出土遺物には炭化材・土器がある。炭化材分布は希薄で炉址南東側の床上に南北方向を向いた大型の炭化材とその周辺に小型の炭化材がみられるのみである。

土器は出土量が非常に少なく、分布もP_1・P_4付近にやや集中する以外は全体に希薄である。垂直分布では床面から5cm以内の高さに集中する。22－1は第3号溝Ⅴ区の出土だが土器の特徴から本址にあったものと理解した。22－2はP_{13}・P_{14}付近の床面上で出土した。これらの遺物はほぼ同時期に埋没したものと思われる。（篠原）

遺物（第22図）

土師器の器種には壺・甕・鉢などがある。全形態の伺えるものはない。壺は直線的に外傾する口縁部が端部で折り返されるもの22－1の他、ヘラミガキされる胴部片、広口壺と考えられる赤彩品の頸部片がある。甕は単純口縁の刷毛調整されるもの22－1があり、台付かもしれない。鉢は椀状を呈する赤彩品があるが、高坏かもしれない。

以上の遺物は古墳時代前期後半に包括される。（小山）

第3表　第4号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調整	備考
22－1	土壺	(15.4)<5.1>—	口縁部は貼付による複合口縁を呈する。	内）上位ヨコナデ、下位斜位のナデ 外）貼付部ヨコナデ、以下はナデ	胎土密、焼成良好 破片実測　M3VK フク土
22－2	土壺	—<13.5>—	頸部で「く」の字状に強く屈曲し、胴部は中位に不明瞭な屈曲をもって大きく張り、最大径を有する。	内）頸部以上横位ハケメ、以下はヘラナデ 外）斜位ハケメ調整ののち、口縁部はヨコナデ、胴部下位はヘラナデ（ハケメは一定の方向性に乏しく単に充填を目的としていかのようである。）	胎土密、焼成良好 色調　7.5YR 7／8（黄橙色） 破片実測　№15・16・17・19・20・22・23・45

5）第5号住居址

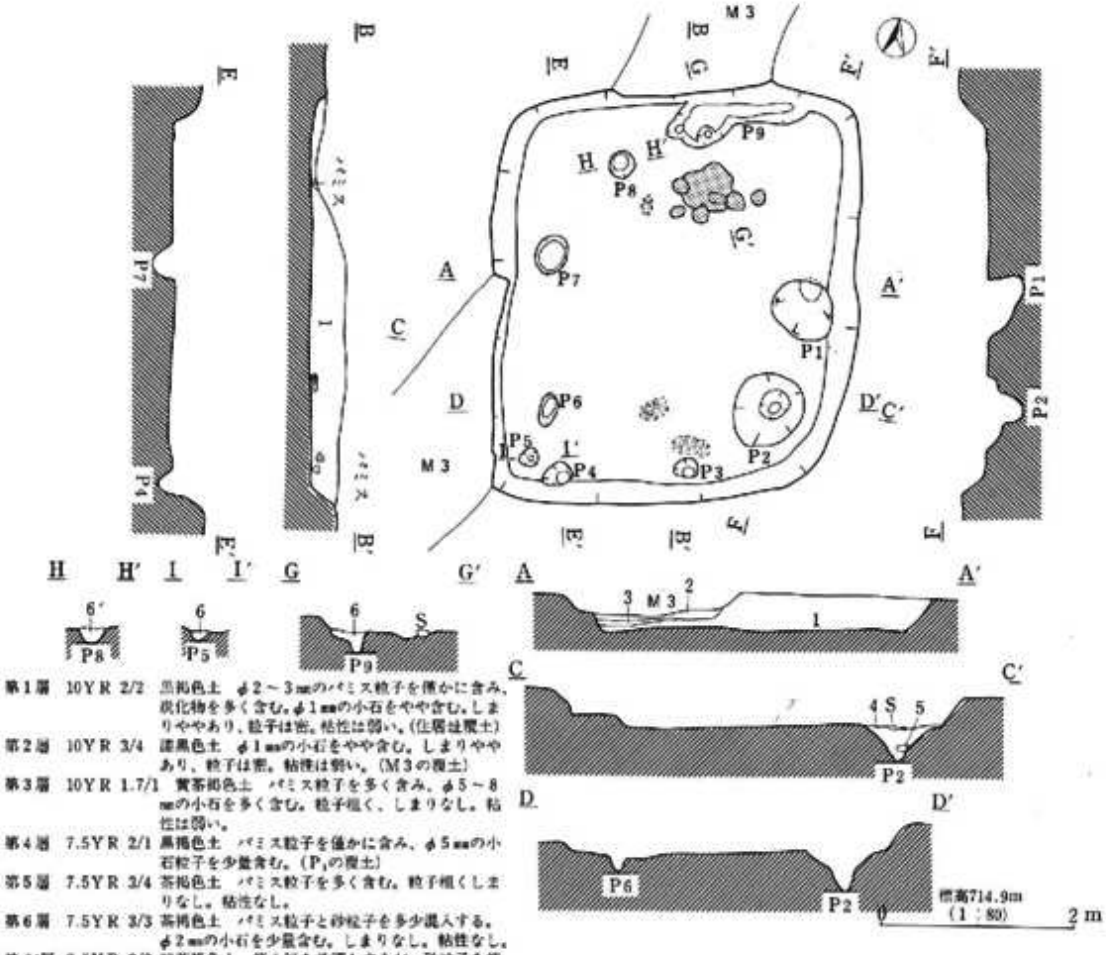
遺構（第19・20図・図版八・九）

本住居址は調査南部地区ち－16グリッド内に位置し、北壁中央から西壁南半部を縦断する第3号溝と重複し、両壁上部を破壊されている。

平面形態は東壁長342cm、西壁長359cm、南壁長289cm、北壁長304cmを測り、東西短軸長322cm、南北長軸長395cmの隅丸方形を呈する。確認面からの壁高は9.5～34cm、床面積は12.5m²を測る。長軸方位はN－11°－Wを示す。

覆土は三層からなり、第2・3層は第3号溝との関連が強く、住居覆土は第1層のみである。

壁体は地山の砂層上に茶褐色土を貼ったと考えられ、もろく崩れ易い。床面からの立ち上がりは緩い。床面は同様な茶褐色土を全面に貼るが、総体的に軟弱で、北東コーナーにやや堅固な部

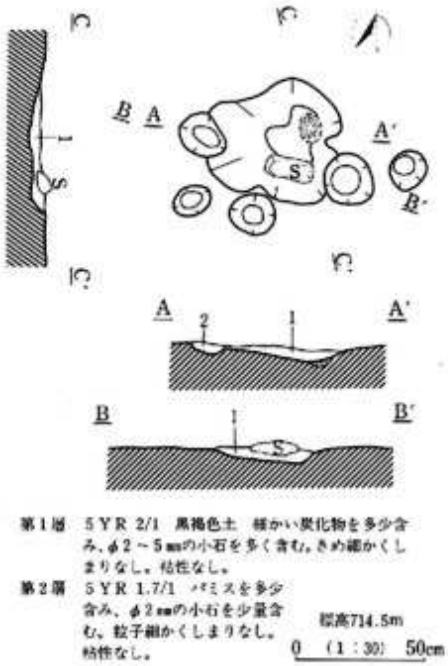


第1層　10YR 2/2　黒褐色土　φ2～3mmのパミス粒子を僅かに含み、炭化物を多く含む。φ1mmの小石をやや含む。しまりややあり、粒子は密。粘性は弱い。（住居址覆土）
第2層　10YR 3/4　濃黒色土　φ1mmの小石をやや含む。しまりややあり、粒子は密。粘性は弱い。（M3の覆土）
第3層　10YR 1.7/1　黄茶褐色土　パミス粒子を多く含み、φ5～8mmの小石を多く含む。粒子粗く、しまりなし。粘性は弱い。
第4層　7.5YR 2/1　黒褐色土　パミス粒子を僅かに含み、φ5mmの小石粒子を少量含む。（P₁の覆土）
第5層　7.5YR 3/4　茶褐色土　パミス粒子を多く含む。粒子粗くしまりなし。粘性なし。
第6層　7.5YR 3/3　茶褐色土　パミス粒子と砂粒子を多少混入する。φ2mmの小石を少量含む。しまりなし。粘性なし。
第6'層　7.5YR 3/3　暗茶褐色土　第1層を基調とするが、砂粒子を第1層より多く含む。

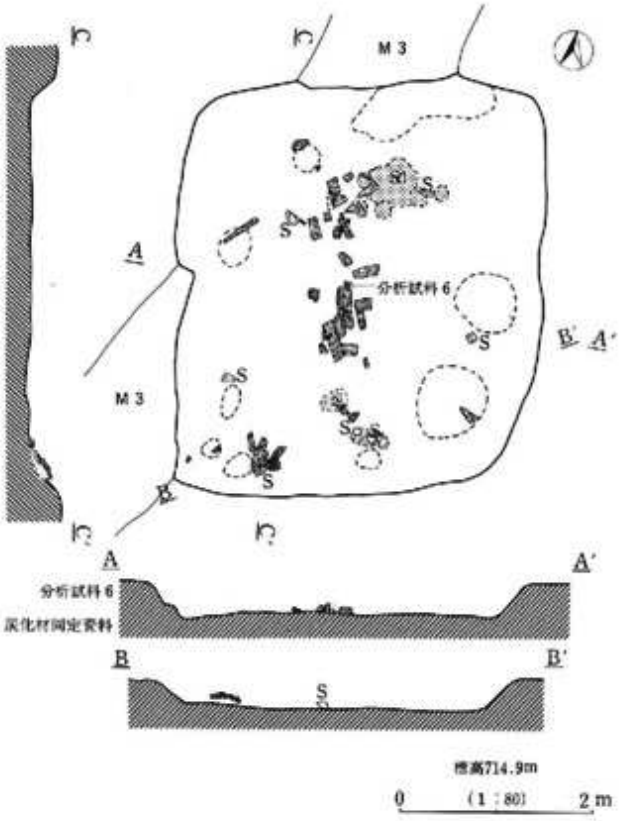
第23図　第5号住居址実測図

分が認められたのみである。

ピットは9個あり、いずれも壁の近くに位置するが、配置に規則性はない。P_1は東壁中央に位置し、67×60cmの楕円形を呈し、深度39cmを測り、北側にオーバーハングしている。P_2は南東コーナーに位置し、81×70cmの楕円形を呈し、38cmの深度を有する。断面は中程でテラスを有し、やや南側に傾いている。覆土はP_2南側に僅かに第5層茶褐色土がみられるが、P_1・P_2ともに第4層黒褐色土を主体としている。P_3～P_4はやや不明瞭なピットである。P_3・P_4は南壁際に位置しており、P_3は25×19cmの楕円形を呈し、10cmの深度を有する。P_4は31×23cmの楕円形を呈し、13.5cmの深度を有する。両者とも南側はほとんど垂直の立ち上がりで、形態が酷似し、二個一対で機能していたとも考えられる。覆土はいずれも第6層暗茶褐色土層のみである。P_5はP_4のすぐ脇に位置し径19cmの円形を呈し、7.5cmの浅い深度を有する。覆土は第6層のみである。P_6は南西コーナーに位置し、P_2と対峙する。35×18cmの楕円形を呈し、11.5cmの深度を有する。P_7は西壁中央のP_1と対峙する位置にある。41×33cm、深度18.5cmの平面楕円形、断面逆台形を呈する。覆土は第5層のみである。P_8は炉址西側に位置し、径28cm、深度15cmの平面円形、断面U字形を呈する。覆土は第6′層である。P_9は北壁中央直下に位置し、底面46×30cmの楕円形を呈し、8cmの深度を有する。底面径10cm、深度



第24図　第5号住炉址実測図

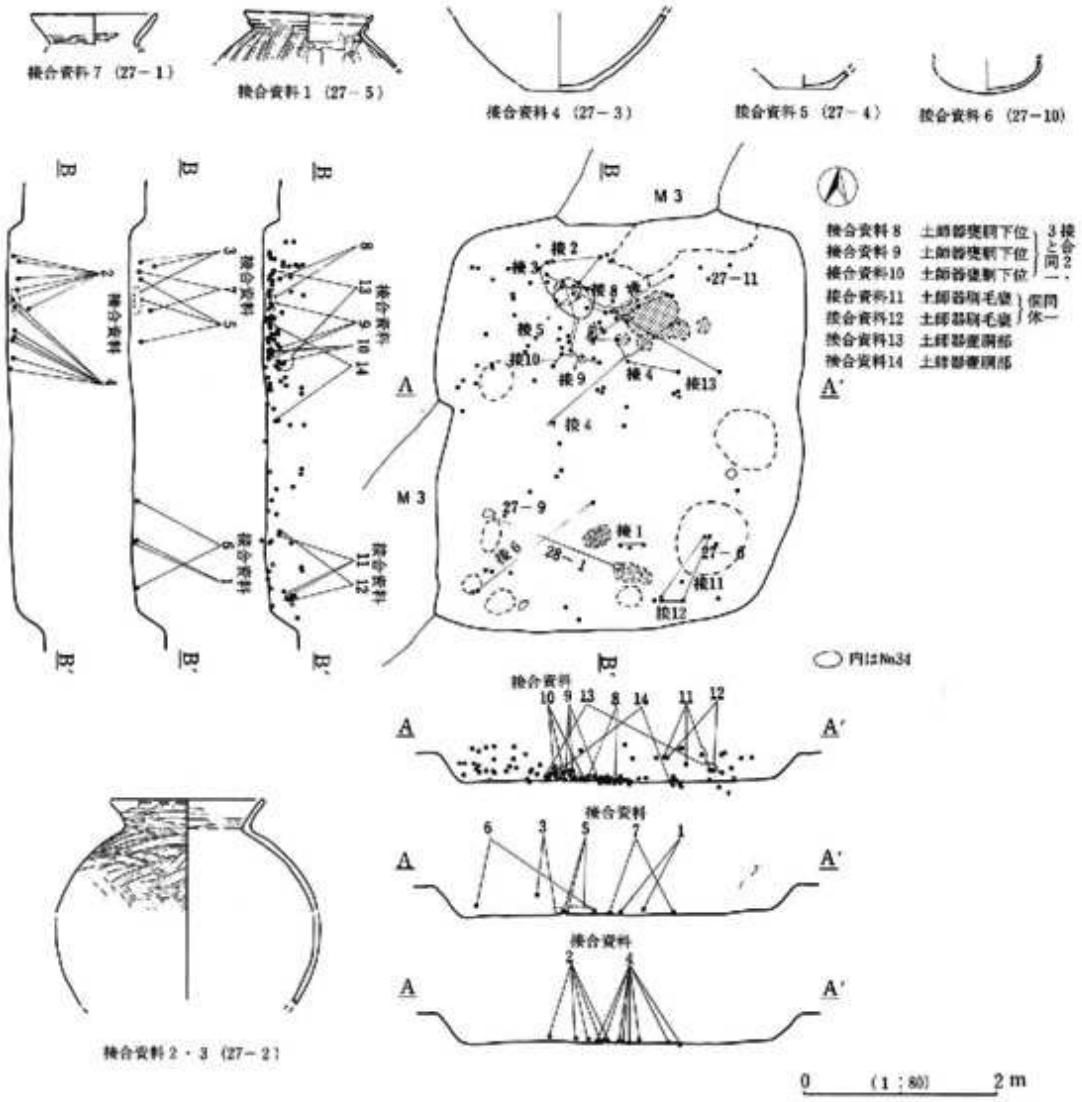


第25図　第5号住居址炭化材分布図

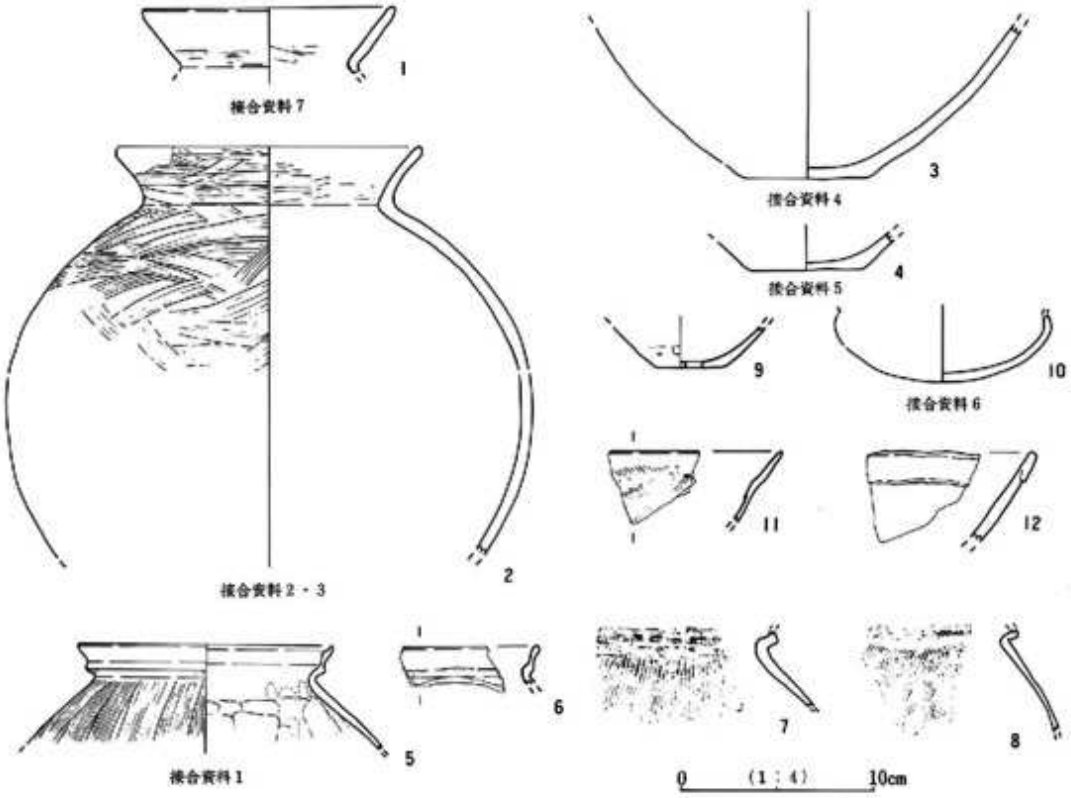
23cmと13cmの小ピットを２個伴い、壁溝に連結している。

壁溝は北壁下東半部にあり、P_9に連結する。底面幅10～14cm、長さ70cmを測り、４cmの深度を有する。

炉址は北壁寄りに位置し、49×47cmの略楕円形に床面を５cm程掘り窪めており、径15～19cm、深度３cm前後の小ピットを５個伴う。火床は東側端にあたると思われ、12×８cmの楕円形範囲で、厚さ２cmの焼土分布がみられる。また、南側端には８×19cm、厚さ５cmの長方形の石が底面より２cm程浮いて出土しており、炉縁石と考えられる。覆土は第１層黒褐色土のみであるが、小ピッ



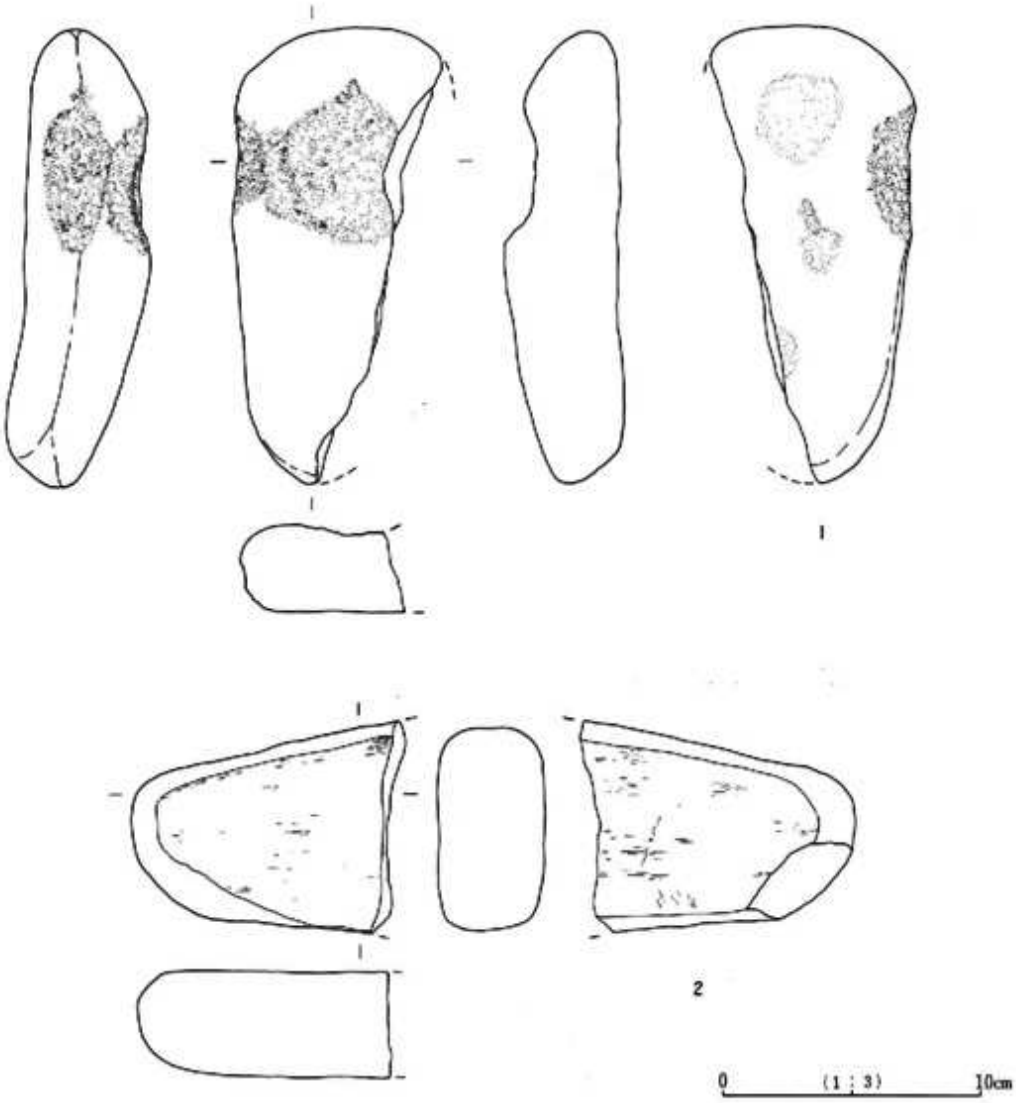
第26図　第５号住居址遺物分布・接合関係図



第27図　第5号住居址出土土器実測図

第4表　第5号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調整	備考
27－1	土師器 壺	(12.8)<3.2>—	口縁部は頸部で「く」の字状に屈曲したのち、内湾気味に短く開く。	内）ハケメ調整ののち横ヘラミガキ 外）ヨコナデののち、口縁端横位ヘラミガキ	焼成良好、胎土密 回転実測B　№4、M3№14
27－2	土師器 甕	(15.8)<11.5>—	口縁部は頸部から「く」の字状に強く屈曲して外反し、口唇部は面取り風を有する。胴部球胴を呈する。	内）頸部以上は横斜位のハケメ調整ののち、横位ヘラミガキ、胴部以下は横斜位の丁寧なヘラミガキ。 外）口～胴部中位横斜位の粗いハケメ調整、胴部は縦位のヘラミガキ。	焼成良好、胎土やや粗 色調　5YR5/4（にぶい赤褐） 回転実測B　№14・18・20・21・33・34・91、P8内、15
27－3	土師器 甕	—<3.0>6.4	球胴と考えられる。	内）胴部縦位ヘラミガキ、底部横斜位のヘラナデ 外）丁寧な縦位のヘラミガキ	焼成良好、胎土密 色調　5YR5/4（にぶい赤褐） 回転実測A　№5・9・11・36・84・88・102・103
27－4	土師器 甕	—<1.5>5.6		内）磨滅著しく不明（2次焼成のためか） 外）縦位ヘラナデ	焼成良好、胎土やや粗 色調　5YR6/8（橙） 回転B　№32・34・42
27－5	土師器 S字甕	(13.2)<5.2>—	口縁部は下段でシャープな変換点をもち、上段は直立気味に外反する。端部内面に刻みをもつ。内面下段やや丸味をもつが平坦面をもつ。胴部中位上方に張りをもつと考えられる。	内）頸部以上ヨコナデ、以下はヨコナデ→指頭押え→縦位のヘラナデ 外）頸部以上はヨコナデ、胴部は横位ヘラケズリののち、細かい右上ナナメのハケメ調整が施される。	焼成良好、胎土密 色調　10YR7/6（明黄褐） 回転B　№66、H6№5と接合
27－6	土師器 S字甕	—<2.4>—	口縁下段の変換点はやや不明瞭で上段は外反する。内面下段はやや丸味をもつが平坦面を有する。	内）ヨコナデ 外）ヨコナデ→頸部直上にハケメ調整	焼成良好、胎土密 色調　7.5YR4/4（褐色） 破片実測　№104
27－9	土師器 甕	—<2.1>(3.4)	底部中央に内面からの穿孔を有する。焼成前と考えられる。	内）丁寧な縦位ヘラナデ 外）横位ヘラケズリののち、上位ミガキ	色調　2.5YR6/8（橙） 回転B　№61
27－10	小型丸底	—<3.5>—	底部丸底、体部上位で内傾し、口縁部は大きく開くと考えられる。	内）放射状のヘラミガキ 外）斜位のヘラナデ	色調　2.5YR6/8（橙） 回転A　№72・87
27－11	小型丸底	—<3.8>—	口縁部大きく外傾する。 口縁内面は折り返しにより肥厚する。	内）口縁折返し部横位ハケメ、以下ナデ 外）口縁部ヨコナデのち下位～体部に粗いハケメ、更に細かいハケメ	焼成良好、胎土密 色調　7.5YR6/6（橙） 破片実測　№89
27－12	鉢か甑	—<4.7>—	口縁部折り返しによる複合口縁、体部内面気味に外傾、口唇部面取り。	内）横位ヘラナデ 外）折り返し部ナデ、以下縦位ヘラミガキ	焼成良好、胎土密 色調　7.5YR6/6（橙黄橙） 破片実測　覆土



第28図　第５号住居址出土石器実測図

ト内には第２層黒褐色土の堆積もみられる。

遺物の出土状態（第25・26図）

出土遺物には炭化材・土器・石器がある。炭化材はP_4周辺のものが床面より５cm程浮いている他は全て床面直上か、ややめり込む状態で出土している。これらは住居址中央南北線上と南壁上西側に集中分布する。炭化材はほぼ南北を向くものが多く、厚さ５cm前後、幅11cm前後の大きなものが主体となって折り重なっている。このような炭化材分布状況から、家屋が焼け落ちたままの状況を想起することは困難である。

土器・石器は炉を中心として住居北西部に集中し、特にP_8上に大きなまとまりがあり、他は住

居南側に散在する。全体の出土量は少なく106片を数える程度で、いずれも細片化しており完存品はない。垂直分布は覆土上層から床面直上におよぶが、特に床面直上から床上10cmの間に濃い分布が認められる。接合資料２～５、７～10、13・14は住居址北西部においてそれぞれ広範囲にわたって分布する。相互に錯綜した接合関係を示し、細片化した数個体の土器が散乱した状況である。出土層位は概ね床面から10cm以内の高さに集中する。また、接合資料１は第６号住第３層出土資料とも接合関係をもつ。住居南側に分布する接合資料１・６・11・12も各破片が散逸した状況を示している。出土層位は１・６が床面からやや浮き、11・12が15～20cm浮いている。以上のような出土状態から本址の遺物は概ね同時期に埋没したものと考えられる。　（篠原）

遺物（第27・28図、図版十五）

土師器の器種には壺・甕・甑・鉢・高坏がある。全形態の伺えるものはない。壺は小形の広口壺27－１がある。丸底とも考えられる。甕は単純口縁で胴部は球形を呈し、刷毛調整が施される27－２など刷毛調整されるものが多い。この他、Ｓ字甕もあり、27－５～８は同一個体の可能性もある。形態・施文の特徴は群馬県に分布を示すＳ字甕と類似する。甑は小型の27－９がある。鉢は丸底の27－10・11があり、口縁部は屈曲して大きく外傾すると考えられる。この他、甑とも考えられる折り返し口縁をもつ27－12、椀状を呈する赤彩品などもある。高坏は坏下部に段を有して外反する赤彩品などがある。

石器には敲石・砥石がある。敲石28－１は花崗岩製で敲打痕が顕著に認められる。640ｇを量る。砥石28－２は花崗岩製で表面は磨耗が著しい。520ｇを量る。

以上の出土遺物は古墳時代前期後半に包括される。　（小山）

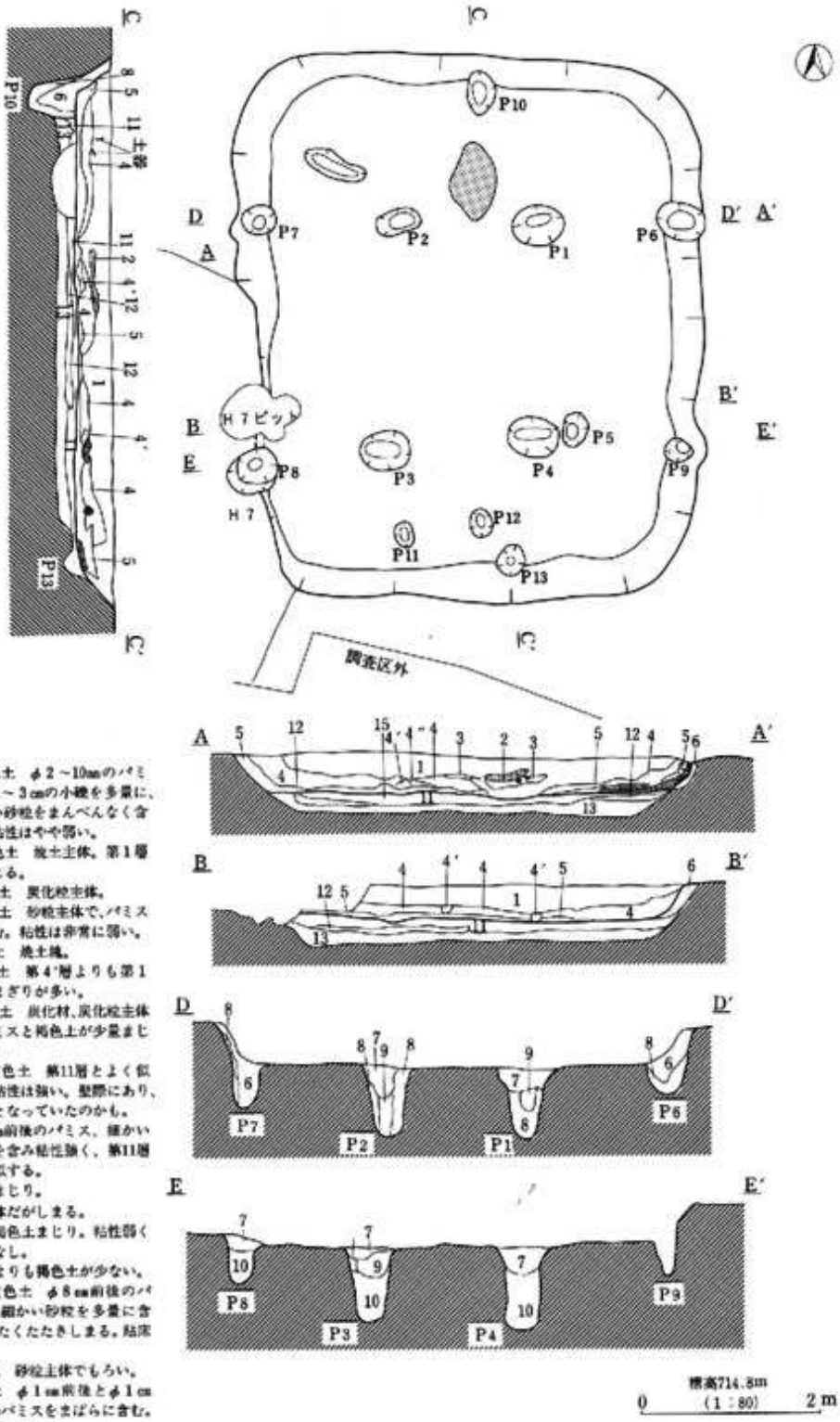
６）第６号住居址

遺構（第29・30図、図版九・十・十一）

本址は調査南部地区の南東端そ・た－18・19グリッド内に位置し、第II層上において確認された。第７号住居址と重複し、西壁南部の上位を破壊されている。

平面形態は南北長軸長538cm、東西短軸長441cm、東壁長480cm、西壁長502cm、南壁長383cm、北壁長388cmの隅丸長方形を呈し、床面積は22.9m²を測る。長軸方位はＮ－２°－Ｅを示す。

覆土は五層よりなる。第１～４層は多少の起伏をもつが、概ねレンズ状の堆積を示し、大方が人為か自然の土砂流入によって形成されたと理解される。但し、住居中央北側にのみみられる第２層（焼土）と第３層（炭化粒主体）の存在は、確実に住居埋没過程において人為的な火入れ行為があったことを想起させるものである。これは後述する遺物の出土状態でも裏付けられる。第

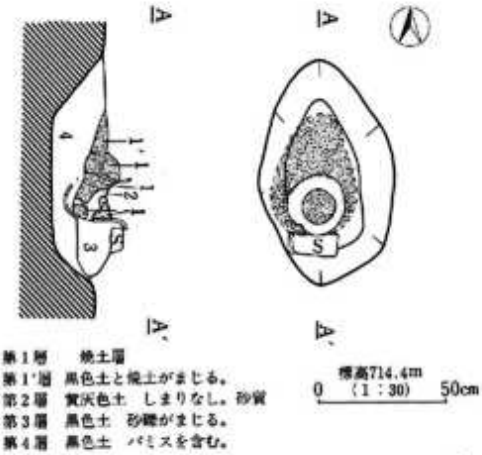


第1層　2.5Y 4/1　黄灰色土　φ2～10mmのパミスφ2～3cmの小礫を多量に、細かい砂粒をまんべんなく含み、粘性はやや弱い。
第2層　7.5YR 7/8　黄橙色土　地土主体。第1層が混じる。
第3層　2.5Y 3/1　黒褐色土　炭化粒主体。
第4層　2.5Y 5/3　黄褐色土　砂粒主体で、パミスを含む。粘性は非常に弱い。
第4'層　5YR 7/8　橙色土　焼土塊。
第4"層　5YR 7/8　橙色土　第4'層よりも第1層のまざりが多い。
第5層　2.5Y 3/1　黒褐色土　炭化材、炭化粒主体でパミスと褐色土が少量まじる。
第6層　2.5Y 5/2　暗灰黄色土　第11層とよく似る。粘性は強い。壁際にあり、整体となっていたのかも。
第7層　暗灰黄色土　φ8mm前後のパミス、細かい砂粒を含み粘性強く、第11層に酷似する。
第7'層　第11層　第13層のまじり。
第8層　黄褐色土　砂粒主体だがしまる。
第9層　黄褐色土　砂粒と褐色土まじり。粘性弱くしまりなし。
第10層　黄褐色土　第9層よりも褐色土が少ない。
第11層　2.5Y 4/2　暗灰黄色土　φ8mm前後のパミス、細かい砂粒を多量に含み、かたくたたきしまる。貼床層。
第12層　2.5Y 7/8　黄色土　砂粒主体でもろい。
第13層　2.5Y 2/1　黒色土　φ1mm前後とφ1cm前後のパミスをまばらに含む。粘性は強い。

第29図　第6号住居址実測図

5層は床面上、壁体上に一様に6cm内外の堆積を示す。漆黒に近い炭化粒主体層で大型の炭化材も多量に含まれ、住居が埋没する前に大規模な焼失があったものと理解される。

確認面からの壁高は破壊されていない部分で40cm内外を計測し、床面からの立ち上がりは緩い。掘り込みは第II～IV層まで達しているが、第IV層（砂層）は崩れ易いため、第6層暗灰黄色土のような粘性の強い土を貼って補強していたと考えられる。とは言え、第6層も現状では崩壊流出が著しく、壁体の構造を明らかにすることはできない。



第30図　第6号住居址炉址実測図

壁溝は検出されなかった。

床面は地山砂層上に20cm内外の分厚い貼床が施される。まず第13層黒色土を大量に掘り込み内に埋め没したのち、第12層砂層を各所に少量盛り、最後に粘性の強い第11層暗灰黄色土を一様に10cm内外の厚さで盛って、これを叩きしめて平坦化している。極めて丁寧な構造をもつ床面で、概ね平坦で、堅固な構築状況である。

ピットは13個検出された。P_1～P_4の4本は住居四隅に整然と長方形配置されており、主柱穴と考えられる。北壁下中央のP_{10}と、東・西両壁に各2本並ぶP_6～P_9は棟持柱穴、南壁下中央に2本並ぶP_{11}・P_{12}は入り口施設に関連する梯子受けの柱穴と理解することができる。P_5・P_{13}についての性格付けは困難である。また、P_6～P_9については佐久地方弥生時代住居址初見の例である。

各柱穴の形態規模は性格ごとに画一的な傾向を示す。主柱穴P_1～P_4は東西に長軸をもつ長楕円形を呈する。P_1は58×44cm、P_2は48×27cm、P_3は56cm×43cm、P_4は56×45cmを測る。深さは77・79・83・94cmである。断面はいずれもU字形を呈する。柱穴のこのような形状からみて、割材が使用された可能性が強い。覆土は第7～10層からなり、柱痕が残るのはP_2のみである。注意しなければならないのは床面との識別が大変困難な第7層が最上面に厚く被覆していることで、床面精査時において、主柱穴4本の検出は難しかった。

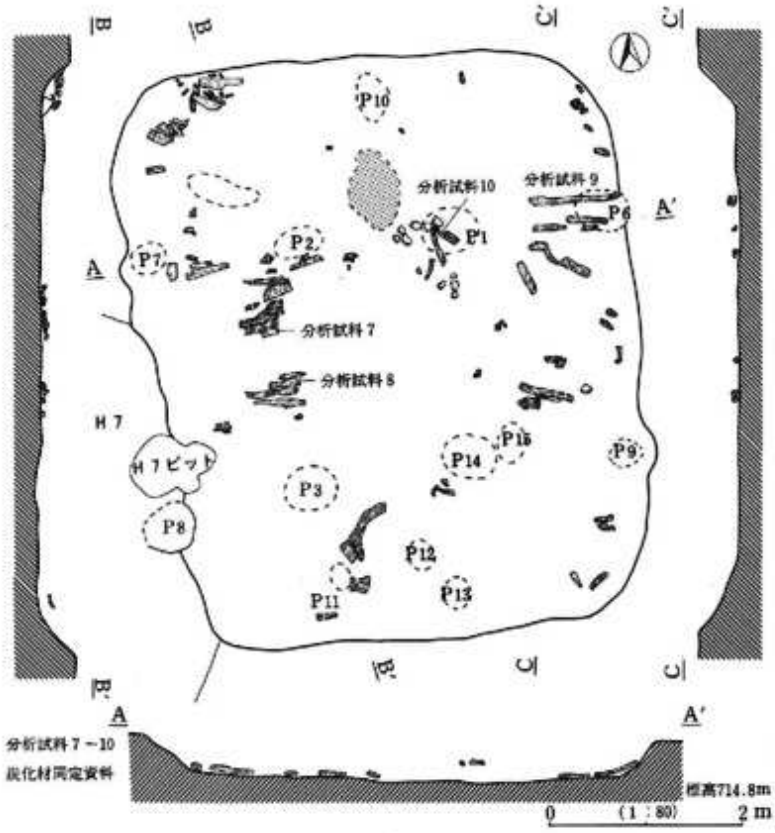
棟持柱穴P_6～P_{10}は円形か楕円形を呈するが、主柱穴程細長いプランはもたない。P_6が54×42cm、P_7が36×31cm、P_8が57×46cm、P_9が33×27cm、P_{10}が32×48cmを測り、床面からの深さは35・48・42・37・53cmを測る。断面はいずれもU字形を呈する。以上の形状から主柱穴と同様な柱材が用いられたとは考え難い。覆土は第6・7・8・10層からなる。

入り口施設に関連する梯子受けの柱穴P_{11}・P_{12}はいずれも小規模な楕円形を呈する。P_{11}が28×21cm、P_{12}が35×31cm、深さはいずれも29cmを測る。主柱穴P_1～P_4と同様、床面上でのプラン

把握は極めて困難であった。

この他 P_5は29×37cmの楕円形を呈し、25cmの深度、P_{13}は35×31cmの円形を呈し、11cmの深度を有する。

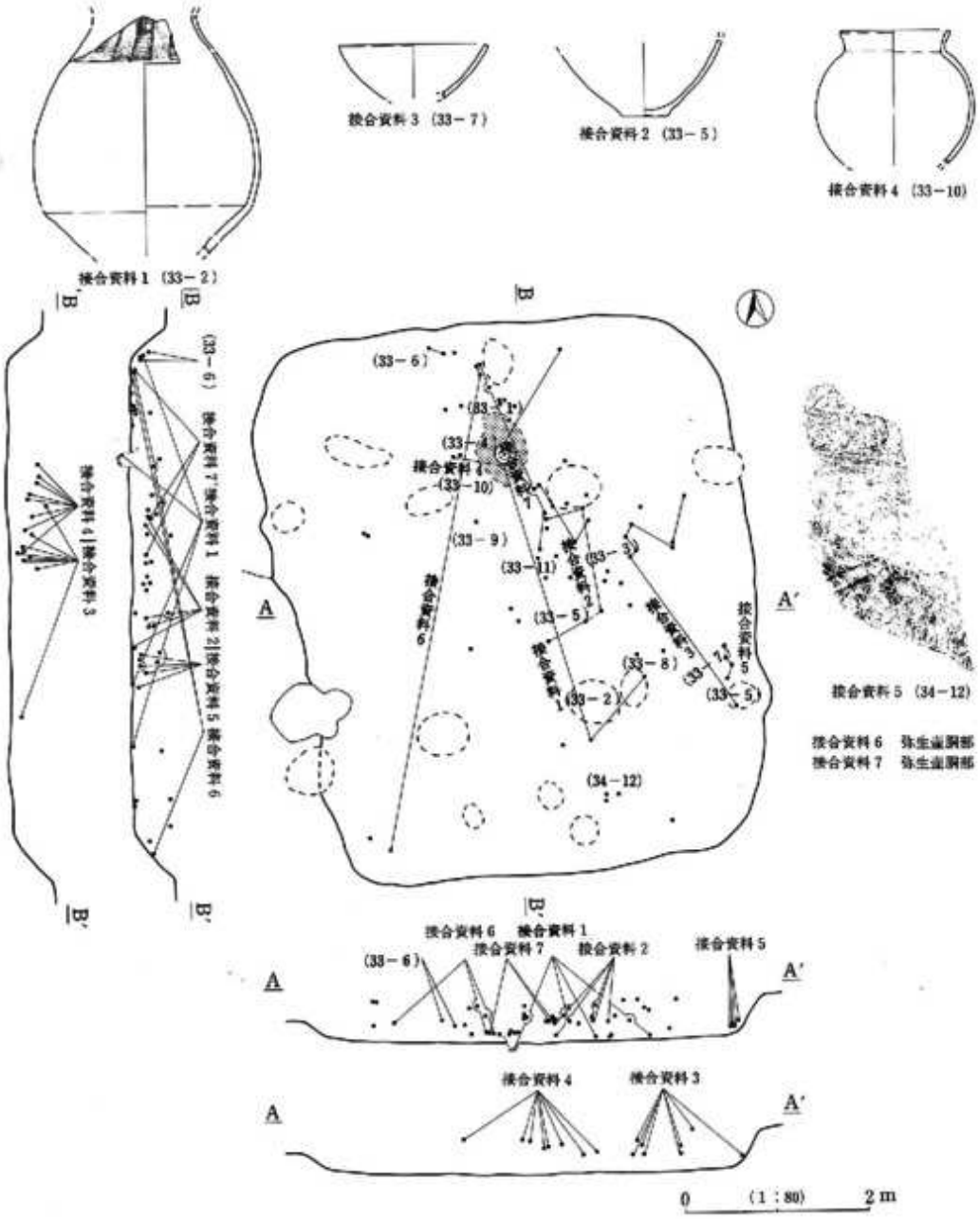
炉址は北側主柱穴 P_1・P_2間を結ぶ線の中央やや北寄りから検出された。箱清水式土器の甕を利用した埋甕炉である。実際の生活において火床として用いられた面は床面とほぼフラットか、それよりもやや高位にあったと考えられるが、構造面ではかなり深い掘り込みをもつ。まず床面を87×53cmの卵形に20cm程床面を平坦に掘り窪めたのち、第4層黒色土を分厚く埋め戻す。その際、中央やや南寄りの位置に壷の胴部破片を水平な状態で置く。更にその上に底の抜けた甕を置き、その周囲の北側には第1層ローム、南側には第3層黒色土を埋め戻して甕を固定する。甕に接する南側に直方体の石を置き縁石を設ける。以上のような順序をふまえて本炉址は構築されたと考えられる。使用後の状況であるが、甕内には15cm内外の厚さで焼土が充填されていた。また、北側の第1層ロームも真赤に焼け込んだ状態であった。かなり強い燃焼が本炉址内で行われたと理解できる。



第31図　第6号住居址炭化材分布図

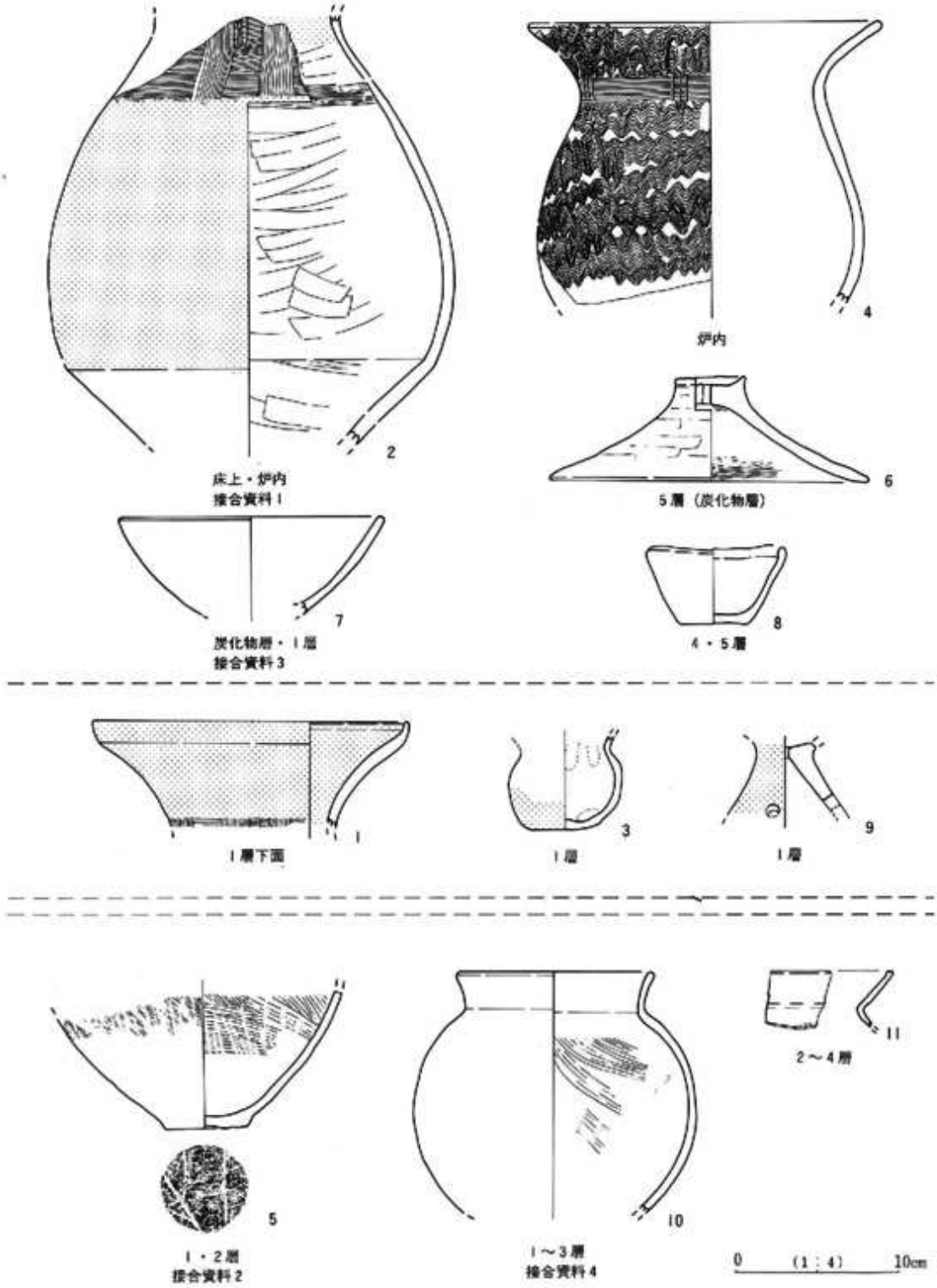
遺物の出土状態（第31・32図）

本住居址からは炭化材・土器が出土した。炭化材で図化したものは、遺存状態が良好であったもののみであり、風化・分解が著しく、粒子化したものも多く床面から壁にかけて密着する状態で分厚く堆積していた。本址内においてかなりの規模の燃焼があったことを物語るものである。遺存状態の良いものは東壁下の中央周辺、P_2・P_3間、北西コーナーに集中する。いずれも東西方向を向いて床面に落ちている。東壁下の分布はやや粗く、P_2・P_3間、北西コーナーの分布は密集

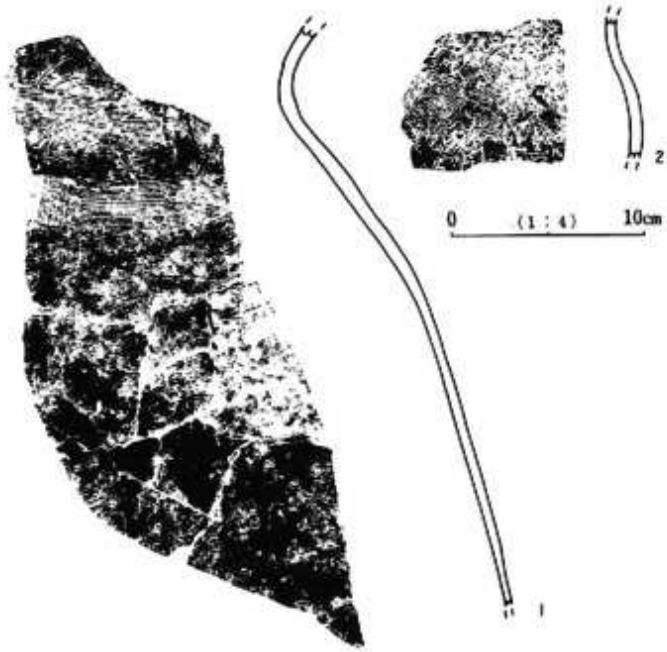


第32図　第6号住居址遺物分布図

した状況を呈している。肉眼視であるが多くは割材と判断された。この他、住居北側の中央やや東寄りの位置にも炭化材が分布する。床面よりも25cm高位の第1層中からの検出であり、他の炭化材と同時期に形成されたものとは考え難い。炭化材上には焼土（第2層）も分布しており、住居埋没過程において火入れ行為が行われたものと理解するのが適当であろう。これらの炭化材は



第33図　第6号住居址出土土器実測図



第34図　第6号住居址出土土器拓影図

細い丸太材である。

土器は破片を含めても総数74点である。住居の南北中軸線周辺にまとまって分布する傾向を示すが全体的に希薄な分布と言える。第5層（炭化物層）から出土したもの33－2・4・6～8、34－12・13、接合資料6・7は大方が弥生土器の範疇に収まる。接合資料1（33－2）は炉内からP_4・P_5周辺床面上まで、接合資料3（33－7）は東壁中央部を中心として、接合資料6（壺胴部）は住居北端から南端まで、接合資料7（壺胴部）は住居北半中央部に、それぞれ広い接合関係を有する。接合資料3は第5層のみでなく、第1～4層にも分布している。第5層以外の第1～4層出土遺物は弥生土器と土師器が混存する。第1層のみから出土した遺物には弥生土器33－1、土師器（小型器台）33－9などがあるが、両者は共存する可能性もある。これに対し、住居北側の中央やや東寄りにのみ小範囲で堆積する第2・3層（焼土・炭化物層）から出土した遺物・接合資料2・4（33－5・10）、33－11、第5号住と接合関係をもつ27－5などは明らかに新しい様相を示す。33－10と27－5は並んで出土していることも興味深い。

以上の所見から第5層から出土した遺物については本住居で確実に使用された土器も認められることから、本址の年代をあらわすもの、第1層出土遺物は土器様相に第5層出土遺物と大差が認められないことから、本址の年代にほぼ近いもの、第2・3層出土遺物は住居埋没過程（第1層形成時）において本址よりも新しい時期に使用された土器が火入れ行為に伴って供献か投棄されたものと見做しておきたい。

遺物（第33・34図、図版十五・十六）

本址から出土した遺物には弥生土器・土師器がある。弥生土器の器種には壺・小形壺・甕・蓋・鉢がある。壺は受け口状に垂直に立ち上がる口縁部をもち、櫛描簾状文とT字文が融合された頸

第5表　第6号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調整	備考
33－1	弥生壺	19.0 <6.5> —	口縁部は外反したのち頸部で屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。	内）赤色塗彩・横位の丁寧なヘラミガキ 外）赤色塗彩・立ち上がり部は横位の丁寧なヘラミガキ、以下は文様施文ののち縦位の丁寧なヘラミガキ 文）櫛描重弧状文（三連止め、右回り）→櫛描垂下文、T字文Cを構成する。	焼成良好、胎土密 色調　10YR6/6（明黄褐） 完全実測　№2
33－2	弥生壺	— <25.9> —	胴部上位はふくらみが大きく球胴化傾向を示す。下位は外稜を有し、くびれる。	内）横位ハケメののち頸部上部に赤色塗彩、横位ヘラミガキ、頸部下位に細かい縦位のハケメ調整が加えられる。 外）斜位ハケメののち胴部上部は赤色塗彩横位ヘラミガキ、外稜以下は縦位ヘラミガキ 文）12本一組の櫛描波状文（三連止め、右回り）一帯と、同工具の櫛描横走平行線文二帯を送らしたのち、櫛描垂下文を施してT字文Cを構成する。	焼成良好、胎土密 色調　7.5YR8/4（にぶい褐） 回転実測B №16・21・39・49
33－3	弥生小形壺	— <5.6> 4.0	胴部はソロバン形を呈し、器高低くずん胴である。口縁部は頸部から短く外反すると考えられる。	内）頸・底部の屈曲部に指頭押え、全体にナデ 外）赤色塗彩、丁寧なヘラミガキ	色調　10YR3/2（黒褐） 回転A　№12、外面胴部上位加熱のため黒色化。
33－4	弥生甕	21.4 <17.1> —	口縁部大きく弓状に外反し、胴部中位下方にふくらみをもつ。やや下ぶくれ気味である。 胴部最大径19.7cm	内）丁寧な横位ヘラミガキ 外）口縁部ヨコナデ、胴部下位縦ヘラミガキ 文）口～胴部に格子目状文が施されたのち、胴部に11本一組の櫛描波状文（三連止め、右回り）がほぼ等間隔7箇所に施されている。波状文施文パターンは下から上への順序を基本としているようであるが、帯と帯との間隔が極大な施文であるため、間隙を埋める帯が各所に認められる。施文パターンの乱れが著しい。	焼成良好、胎土密 色調　10YR6/4（にぶい黄褐） 回転A　№21
33－5	蓋	— — <8.2> 5.0	粘土帯接合痕できれいに欠けており、1cmの高低差からみて巻き上げ成形の可能性あり。底部に縦木葉痕あり。	内）斜位ハケメ→底部縦位ヘラナデ 外）斜位ハケメののち下位を中心に丁寧な縦位のヘラミガキ	焼成良好、胎土密 色調　7.5YR5/4（にぶい褐） 回転A　№13・28・36・45・71・フタ土
33－6	弥生蓋	つまみ (4.2) 6.4 裾径 (19.2)	つまみ部は円状呈し、φ4mmの焼成前の一孔を有する。体～裾部はやや偏平な山形を呈し、大きく開く。 全体に歪む。	内）横斜位のハケメ調整ののちやや粗略な横位のヘラナデ 外）単位不明瞭な縦位ヘラケズリ、裾端部はヨコナデ	焼成良好、胎土密 色調　5YR3/3（暗赤褐） 回転B　№1
33－7	弥生鉢	16.2 <5.9> —	体～口縁部内湾気味に開き、椀状を呈する。口唇部は面取り。	内）横斜位の丁寧なヘラミガキ 外）横位の丁寧なヘラミガキ	色調　10YR8/6（黄橙） 回転A　№6・8～11・51・72・73・フタ土
33－8	弥生小形鉢	8.2 4.5 4.0	逆台形状を呈し、口縁端部は弱く屈曲して内傾する。	内外面ともに丁寧なヘラミガキ	胎土密、焼成良好 色調　7.5YR8/8（黄橙） 完全実測　№7
33－9	小形器台	— <4.5> —	受部中央に穿孔、脚部中位にも3ヶ所に円孔が穿たれている。いずれも焼成前。	内）受部丁寧なヘラミガキ、脚部細い工具の横位ヘラナデ 外）赤色塗彩、縦位のヘラミガキ	胎土密、焼成良好 色調　10YR6/4（にぶい黄橙） 完全実測　№3
33－10	土師甕	(12.0) <14.6> —	口縁部直立気味に外反、胴部は球形を呈する。最大径胴部中位17.2cm。	内）口縁部ヨコナデ、胴部斜位のハケメ調整 外）口縁部ヨコナデ、以下横斜位のヘラミガキ	色調　10YR4/4（褐） 回転B　№4・23・25・26・46・47・67
33－11	土師甕	— <3.6> —	口縁部平坦で内面が肥厚する。頸部は「く」の字状に強く屈曲、非常に薄い胴部に至る。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 外）口縁部ヨコナデ、外面ハケメ調整	色調　10YR8/4（浅黄色） 破片実測　№31 布留系要？

部文様をもつ33－1と、同じ頸部文様をもち、胴部下半に外稜を有する33－2、頸部に櫛描簾状文・波状文が2段施される34－12がある。いずれも赤彩品である。小形壺33－3も赤彩品である。甕は櫛描波状文の施される33－4、34－13がある。4は簾状文が加わり、胴下半のふくらみが顕著である。蓋34－6は天井部に一孔を有す。鉢は椀状を呈す、33－7と小型で赤彩される33－8がある。土師器の器種には甕・器台がある。甕は27－5（S字甕）の他、球胴で台が付くことも考えられる33－10、弥生的色彩の強い5、口唇端部が肥厚し、胴部が極端に薄く削られる畿内布留式系の影響下にあると考えられる11がある。器台は小型で脚部に円孔を3箇所もち、外面赤彩・内面無彩の9がある。

本址の年代を示す第5層出土遺物は後期後半であることは確実で壺2の胴部球胴化、甕4の胴部下ぶくれ、施文パターンの乱れなどの要素は箱清水式土器解体段階の様相を示すものである。小型器台の共伴関係は明確でないが伴っても良い段階である。（小山）

7）第7号住居址

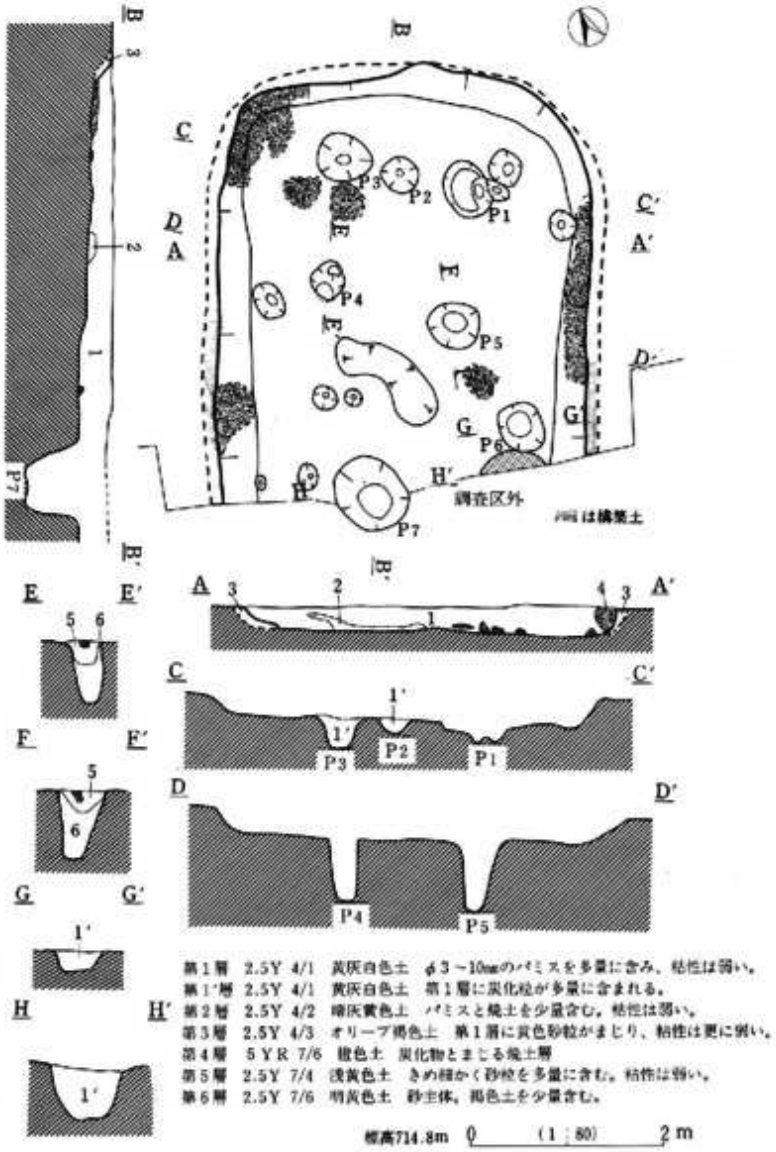
遺構（第35図、図版十一・十二）

本址は調査南部地区南東端た－18・19グリッド内に位置し、第II層上において確認された。第6号住と重複し、これを破壊する。南壁側は調査区外にあり未調査であるため、全形態は知り得ないが、南北長軸長450cm内外、東西短軸長319cmの隅丸長方形を呈すると考えられる。

覆土は二層からなり、大方は第1層黄灰色土に被覆される。

確認面からの壁高は19～34cmを測り、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は良好な遺存状態を示す。地山第II～IV層が露出した面に第3層オリーブ褐色土を8cm内外の厚さで一様に貼り付けて補強している。平滑な構築状態で、内縁部は焼失の際に燃焼を受けて赤変した部分も多く認められた。床面も同様な土を地山第IV層上に薄く敷いて構築され、平坦ではあるがやや軟弱である。

ピットは7個検出された。主柱穴となるのは住居中央の東西短軸上にほぼ並ぶP_4とP_5である。他のピットよりも深度を有し、炭化した柱が直立した状態で検出されたことからも裏付けられよう。P_4が34×40cmの楕円形、P_5が46×54cmの楕円形を呈し、深さは65・72cmを測る。この他のピットはP_7を除いて深度不十



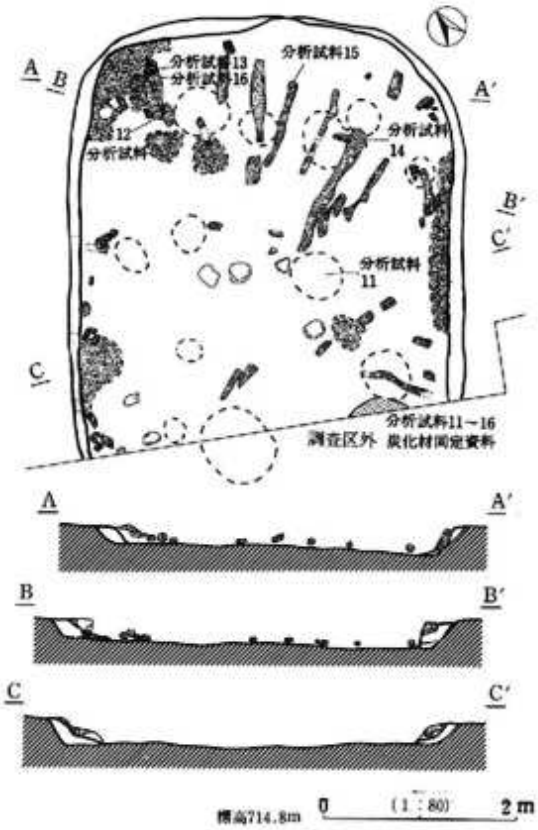
第35図　第7号住居址実測図

分で不明瞭なものが多い。P_1～P_3は北壁下にあり、東西方向に並ぶ。P_1が60×45cmの楕円形、P_2が38×38cmの円形、P_3が50×57cmの楕円形を呈し、深さは10・16・35cmを測る。覆土はいずれも炭化粒子を多く含む第1層からなる。P_5は東壁下南寄りにあり、52×50cmの円形を呈す。深さは23cmを測る。P_7は南壁下中央西寄りにあると考えられ、他に比べ大形のピットである。77×79cmの円形を呈し、57cmの深度を有する。覆土はP_6・P_7ともに第1′層からなる。

炉址は検出されなかった。南東コーナー部と考えられる部分に焼土の広がりがみられるが、床面上にのったもので、掘り込みはもたない。

遺物の出土状態（第36・37図）

本址からは炭化材・土器・石器・鉄滓が出土した。



第36図　第7号住居址炭化材分布図

炭化材は良好な遺存状態を示すものが多量に出土した。主柱穴P_4・P_5を結ぶ線よりも北側部分の床面直上に特に集中する。ほとんどが細長い割材と考えられ、30cm内外の間隔をあけてP_4・P_5間に向って放射状に近い状態で並んでいる。これらの炭化材の上には「かや」状の炭化物がのっているものもみられることを勘案すると放射状に並ぶ炭化材は屋根の骨組みに使用されていたものであることが想定できる。住居南半部の炭化材分布は散漫で、床面直上にわずかにみられる程度である。炭化材と関連する焼土の分布は東壁・北西コーナー・西壁南部などの各壁に密着した状態で検出される例が多い。

土器・石器・鉄滓の出土量は非常に少ない。加工されていない石の分布も同様である。土器は完形品はおろか、大形破片もなく、細片ばかりである。分布傾向も集中箇所はなく、極めて散漫である。接合資料1・38－1は住居東側に分布する。台石39－1は住居のほぼ中央部に、鉄滓39－2は住居南西コーナー部に分布する。

遺物（第38・39図）

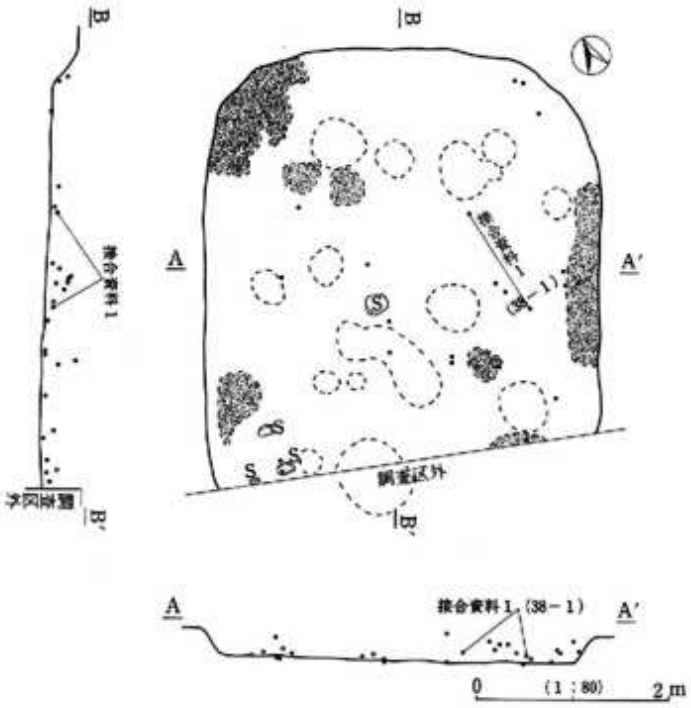
本址から出土した遺物には土師器・石器・鉄滓がある。

土師器の器種には甕・鉢がある。甕はヘラケズリ、ヘラナデされる胴部片、底部片（38－1）があるが形態の伺えるものはない。

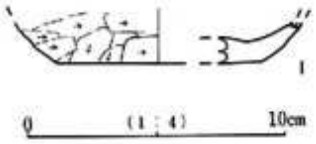
鉢は赤色塗彩される口縁部片があるが、これも形態はわからない。高坏かもしれない。

石器には台石39－1があり、安山岩製で表裏面磨耗する。2798ｇを量る。鉄滓は2.7ｇを量る。

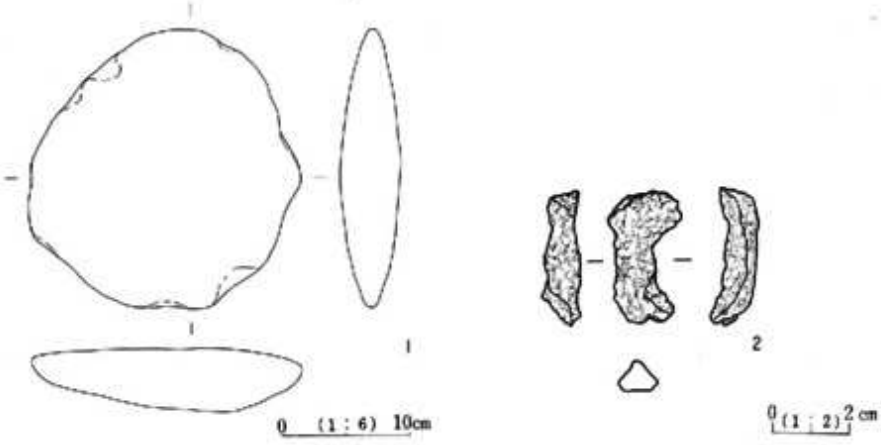
本址は時期決定できる遺物はないが、焼失住居という共通要素をもつ、第3～5号住居址に近い所産と考えたい。（小山）



第37図　第7号住居址遺物分布・接合関係図



第38図　第7号住居址出土土器実測図



第39図　第7号住居址出土石器・鉄滓実測図

8）第１号竪穴遺構

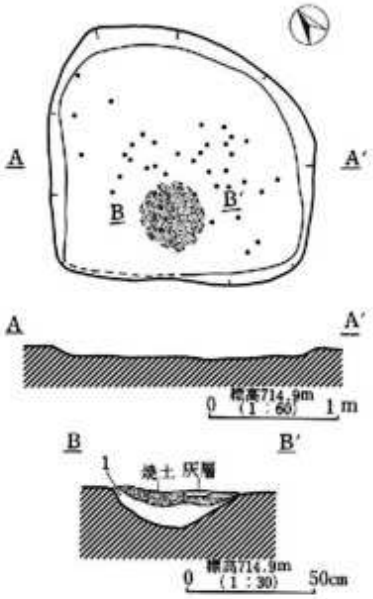
遺構（第40図、図版十二・十三）

本址はつ－15グリッド内にあり、第３号住の東側に隣接する。重複関係はなく、203×196cmの不整方形を呈し、長軸方位はN－32°－Wを示す。確認面からの壁高は３～８cmと浅く、立ち上がりは緩い。底面は概ねフラットであるがやや軟弱である。プラン内西側には47×52cmの範囲で掘り込みをもつ焼土範囲が認められたが、性格は判然としない。遺物は底面より僅かに浮いた状態で中央部を中心にまとまって分布する。細片化しているが、41－１・３・５のように同一個体のまとまりが多い。

遺物（第41図、図版十六）

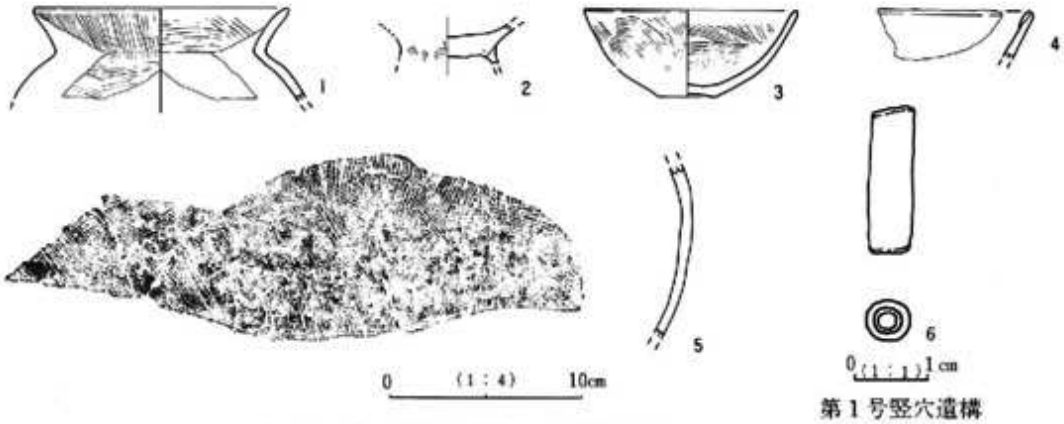
本址から出土した遺物には土師器、石製品がある。

土師器の器種には甕・台付甕・鉢がある。甕は口縁部



第１層　10YR 3/2　暗褐色土　しまりややあり、粘性なし。粒子は細かくパウダー状で、φ2～5mm大の小石粒子とパミス粒子を僅かに含む。

第40図　第１号竪穴遺構実測図



第１号竪穴遺構

第41図　第１号竪穴遺構出土土器実測図

第６表　第１号竪穴遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び整形の特徴	調整	備考
41－1	土師甕	(13.0)<4.7>—	口縁部は「く」の字状に緩く外反する。	内）口縁部最位ハケメ調整ののち、上位はヨコナデ、胴部はナデ。 外）口縁部最位、胴部最位のハケメ調整	焼成良好、胎土やや粗 色調5YR6/6（橙） 回転B No.9～11・38
41－2	土師甕 台付甕	—<1.8>—		内）ヘラナデ 外）ハケメ調整、ヘラナデ	焼成良好　胎土やや粗 色調5YR4/3（にぶい赤褐） 回転A　No.56
41－3	土師鉢	(11.0)<4.5>2.8	口～体部内面気味に開く 底部やや上げ底。	内）最下位ハケメ→体部下位最位ヘラミガキ 外）最位ハケメ調整→体部下位丁寧なヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ	色調7.5YR6/6（橙） 回転A　No.20～23・27～29・31
41－4	土師鉢？	—<2.6>—	口辺端部内側は貼付による複合口縁	内）ナデ 外）最位ハケメ→ナデ	色調7.5YR7/4（にぶい橙） 破片実測　No.13

が「く」の字状に屈曲し、胴部は球形を呈すると考えられる刷毛調整の41－1・5があり、台付甕41－2と接合する可能性もある。鉢は椀状を呈する41－3と、口縁端部内面に貼付をもつ41－4があり、3はミガキののちも刷毛目が明瞭に残る。この他、図化できなかったが壷の口・胴部片、S字甕と考えられる肉薄の刷毛調整胴部片などもある。石製品には滑石製管玉41－6があり、重量0.6gを量る。以上の出土遺物から本址は古墳時代前期後半の所産と考えられる。

（小山）

第3節　溝状遺構

1）第1号溝状遺構

遺構（第43図）

本址は調査北部地区の西端え～く－2～6グリッド内に位置し、段丘先端部に沿って北東から南西に直線的に縦走する溝である。検出長47.5mを測り、更に南北へ長く伸びる。溝幅は3～4.4mを測る。断面形はV字形を呈し、底面は極めて狭い。南端から北端部の比高差は35cmを測り、南から北へ向って漸次傾斜する。覆土は大略で黒色土系（第1・2層）の土のみからなる部分が多いが、南端部の断崖が近づく部分に至るとローム層の占める割合が高くなる。覆土中において水流の痕跡は認められなかった。遺物は少なく、細片が覆土中に散布する程度である。

遺物（第42図）

本遺構から出土した遺物は縄文・古墳・奈良・平安・中世と幅広いが、いずれも細片で図化できるものは少ない。縄文土器42－2は曽利系中期後半である。42－1は土師質の瓶か坏類の台付の底部で内外面黒色処理される。中世の土師器とも考えられる。石器では黒曜石製の不定形石器50－3、使用痕のある剥片50－4がある。以上の出土遺物から本址の所産を決定するのは困難であるが、漠然と中世以降としておきたい。

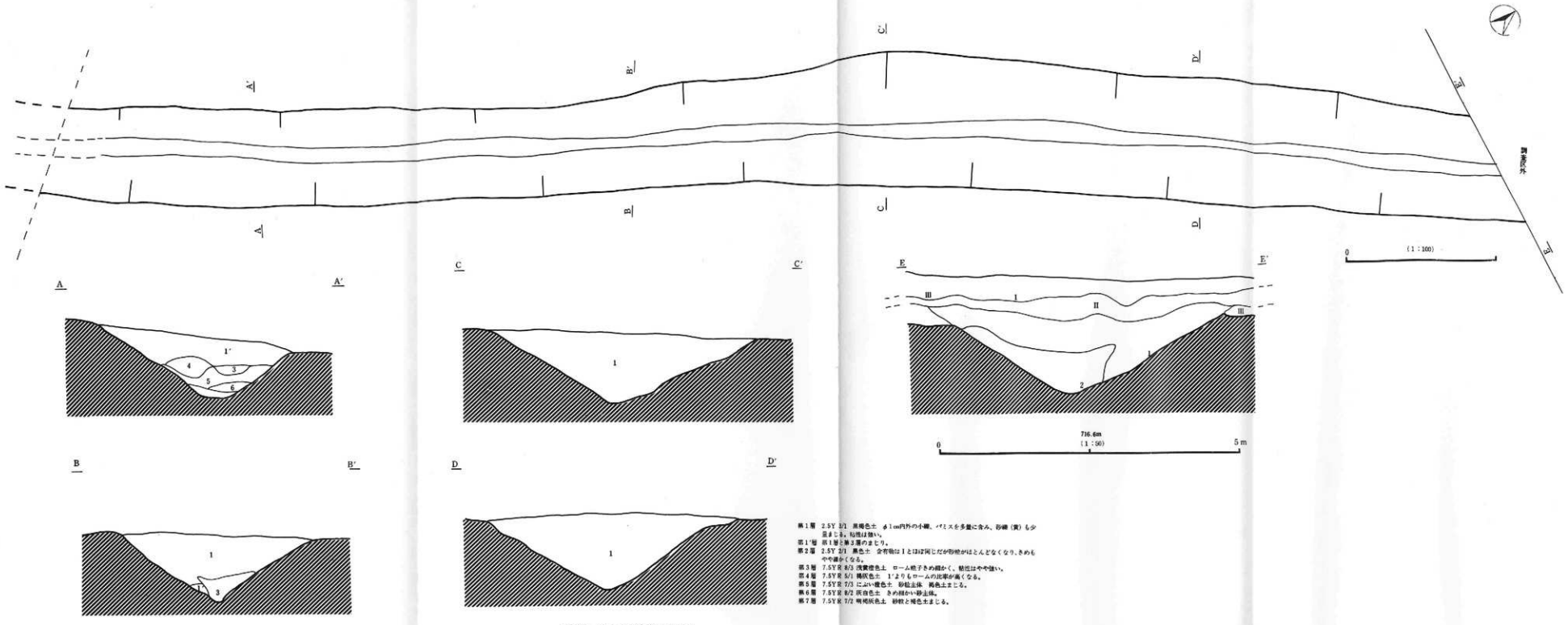
（小山）

2）第2・3号溝状遺構

遺構（第44図、図版十四）

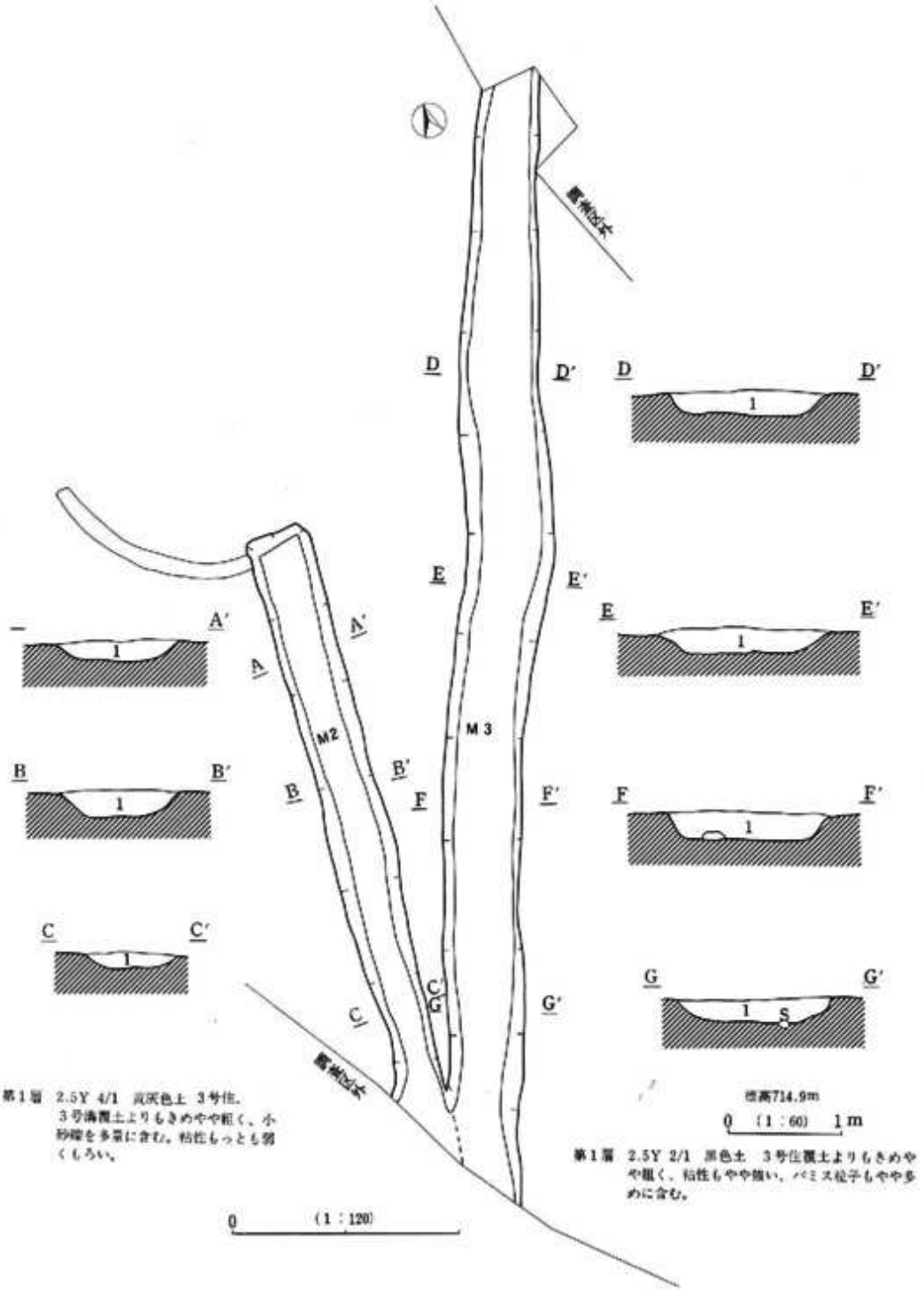
第2・3号溝状遺構は調査南部地区の南側ち・つ－15～17グリッド内に位置し、相互に重複関係をもつ。第3号が古く第2号は新しい。また、第4・5号住居址も破壊する。ともにほぼ北東から南西方向へ直線的に抜ける溝である

第42図　第1号溝状遺構出土土器実測図



第1層　2.5Y 2/1　黒褐色土　φ1cm内外の小礫、パミスを多量に含み、砂礫（黄）も少混まじる。粘性は強い。
第1'層　第1層と第3層のまじり。
第2層　2.5Y 2/1　黒色土　含有物は1とほぼ同じだが砂粒がほとんどなくなり、きめもやや細かくなる。
第3層　7.5YR 8/3 浅黄橙色土　ローム粒子きめ細かく、粘性はやや強い。
第4層　7.5YR 5/1 褐灰色土　1'よりもロームの比率が高くなる。
第5層　7.5YR 7/3 にぶい橙色土　砂粒主体　褐色土まじる。
第6層　7.5YR 8/2 灰白色土　きめ細かい砂主体。
第7層　7.5YR 7/2 明褐灰色土　砂粒と褐色土まじる。

第43図　第1号溝状遺構実測図



第44図　第2号・3号溝状遺構実測図

が、第2号はN－22°－E、第3号はN－4°－Eを向く。第3号溝状遺構は検出長19.8cm、幅108～120cmを測る。確認面からの深さは20cm内外を測り、底面は概ね平坦である。覆土は第1層黒色土のみである。遺物は散漫な分布を示すが、第5号住居址重複箇所でやや密集する。縄文土器は一片のみで、他は古式土師器である。古式土師器には壺・甕・鉢などの細片があるが、図化できた遺物はない。本遺構は古墳時代前期以降に所産が求められる。第2号溝状遺構は検出長11.4mを測り、北側の帰結部分は検出されたが、南側へは更に長く伸びる。幅70～115cm、深さ20cm内外を測る。断面形は鍋底形を呈する。覆土は黄灰色土1層のみである。遺物は極めて少なく、細片のみである。古式土師器・国産陶器があり、国産陶器には天目茶碗、灰釉製品がみられることから、本遺構は中世以降に所産が求められる。　（小山）

4）第4号溝状遺構

遺構（第46図、図版十四）

本遺構は調査南部地区ち－12･13グリッド内に位置し、第2号土坑に隣接する。長さ536cm、幅87～104cmを測る直線状に伸びる溝で中央南側から一段深い掘り込みとなる。深さは南の深い部分で33cm、北の浅い部分で15cm内外を測る。断面形は概ねU字形を呈する。出土遺物はなく時期決定はできない。　（小山）

第4節　土　　坑

1）第1号土坑

遺構（第45図、図版十三）

本址は調査南部地区ち－13グリッド内に位置し、重複関係はもたない。107×96cmの円形を呈し、長軸方位はN－39°－Wを示す。確認面からの深さは最深部で10cmを測り、断面形は鍋底形を呈する。覆土は二層からなる。出土遺物はなく、時期決定できない。　（小山）

2）第2号土坑

遺構（第46図、図版十三）

本址は調査南部地区ち－12グリッド内に位置し、第4号溝状遺構と近接する。127×119cmの円形を呈し、長軸方位はN－76°－Wを示す。確認面からの深さは最深部で19cmを測り、断面形は鍋底形を呈する。出土遺物はなく時期決定できない。

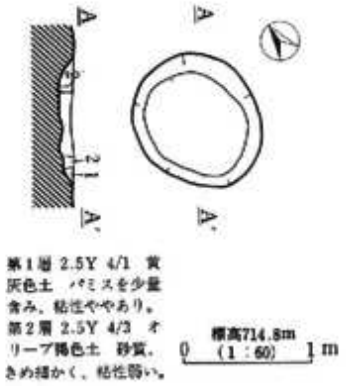
（小山）

3）第3号土坑

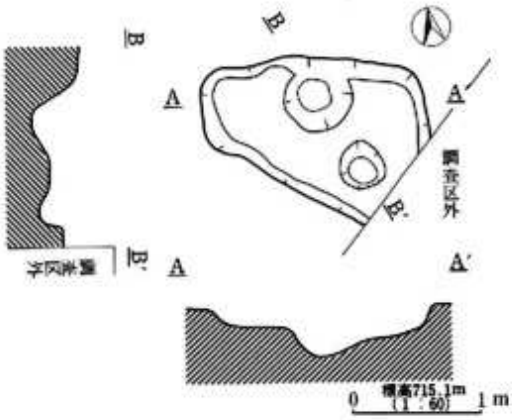
遺構（第47図、図版十三）

本址はた－12グリッドから検出され、南側は調査区外にある。長軸171cmの不整長方形と考えられる。最深部は26cmを測るが底面は凹凸が著しい。出土遺物はなく、時期決定できない。

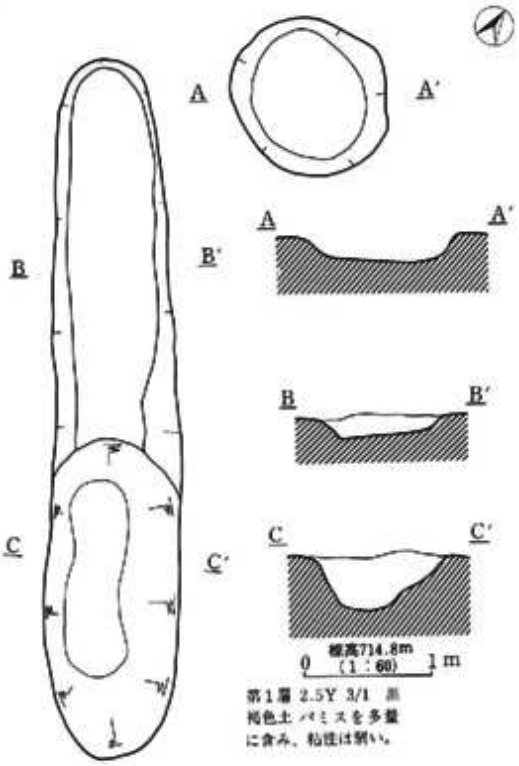
（小山）



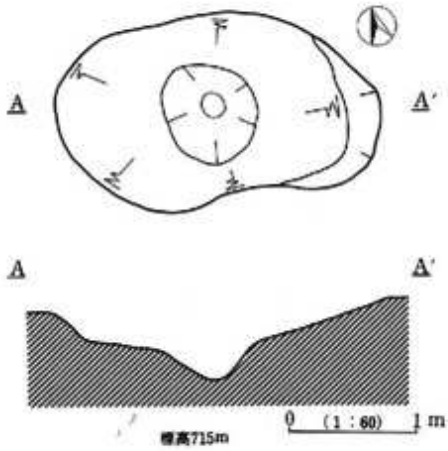
第45図　第1号土坑実測図



第47図　第3号土坑実測図



第46図　第2号土坑　第4号溝状遺構実測図



第48図　第4号土坑実測図

4）第4号土坑

遺構（第48図、図版十三）

本址はた－11・12グリッドから検出された。重複関係はもたない。252×140cmの歪んだ楕円形を呈し、長軸方位はN－58°－Wを示す。深さは最深部で61cmを測り、断面形は漏斗状を呈する。

出土遺物はなく、時期決定できない。（小山）

第5節　グリッド及び表採遺物

腰巻遺跡では、表土除去作業、遺構確認作業時において少量ではあるが、縄文土器・土師器・須恵器・陶器・石器等が遺構外から出土した。

縄文土器の器種には深鉢があり、中期後半加曽利E式系と曽利系に区分できる。49－1～3は加曽利E式系で1は単節LR縄文を沈線で区割した後、一間隔毎に磨り消している。2は無節L縄文が施されている。49－4は曽利系である。

土師器の器種には、壷・甕・鉢の胴・体部片等があるが、いずれも細片で図化できたものはない。壷・鉢には赤色塗彩されるもの、甕には刷毛調整されるものなどがある。古式土師器である。

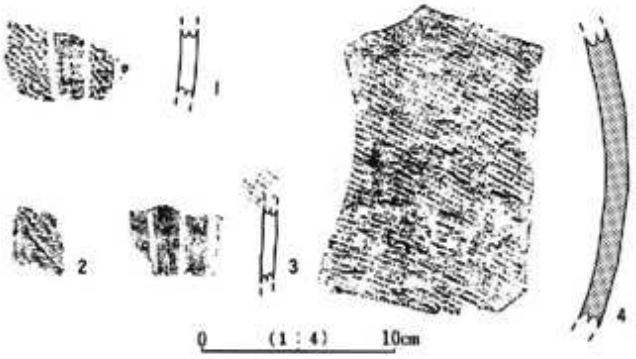
須恵器の器種には甕がある。49－4は甕の胴部片である。外面には平行叩きが施され、内面にはナデが施されている。

陶器には瀬戸・美濃系と考えられる小皿がある。灰釉が施釉されている。中世の所産と考えられる。

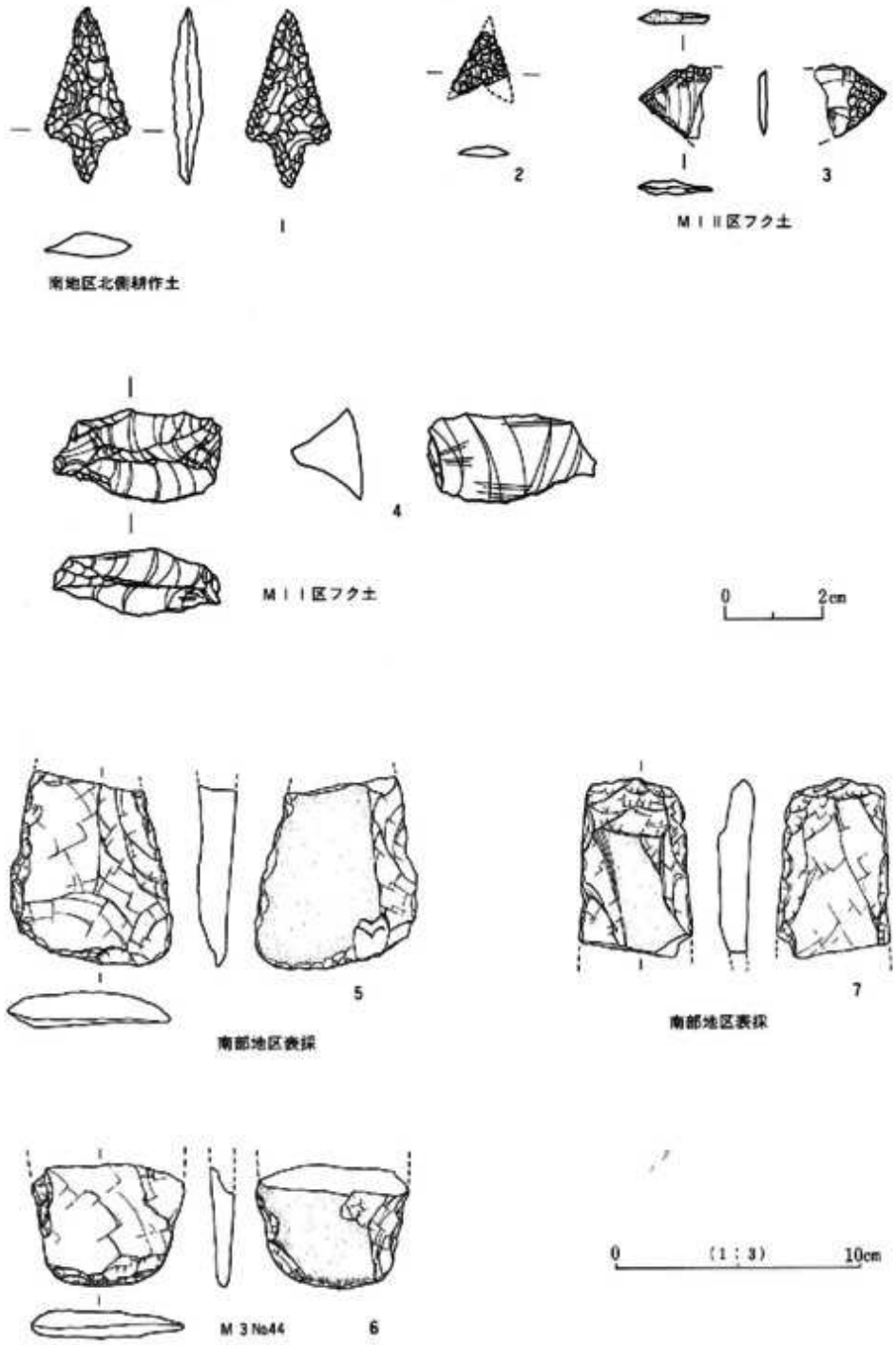
石器には打製石鏃・打製石斧がある。打製石鏃には有茎鏃50－1と無茎鏃50－2があり、1はチャート、2は黒曜石製である。重量は1が1.9g、2が0.1gを量る。打製石斧は50－5・6があり、5は玄武岩製で基部欠損、重量93.4gを量る。6は砂岩製で基部欠損、重量37.4gを量る。

以上、腰巻遺跡では少量ながら縄文土器が検出された。今回の調査では遺構は検出されなかったが隣接地には該期の遺構の存在が十分に予想されよう。

（小山）



第49図　グリッド表採土器実測図



第50図　表採および溝内出土石器実測図

第V章　調査のまとめ

今回の調査では腰巻遺跡から多くの遺構・遺物が検出されたのに対し、西大久保遺跡からは遺構・遺物が全く検出されなかった。従って、ここでは腰巻遺跡の遺構・遺物のまとめを行った上で、今後の問題を提起することにしたい。

遺構

検出された遺構には、弥生時代終末期の住居址1棟、古墳時代前期後半の住居址4棟、平安時代の住居址2棟、古墳時代前期後半の竪穴遺構1棟、時期不明の溝4条、土坑4基があり、腰巻遺跡は弥生～平安時代にわたる複合集落遺跡であることが判明した。南北両地区ともに孤状に展開する広い段丘面の一部調査であるため、集落規模は把握できないが、北部地区からは第1号住居址が検出され、北部第2段丘面上における集落址の南限が確認された。また、南部地区からは第2～7号住居址が調査区南端より近接して検出され、南部段丘面ではこの周辺を基点として南側に広く集落が展開することが予想された。土坑群は、住居址分布が希薄な南部地区北側に集中する。

まず、比較的まとまって検出された古墳時代前期後半の住居址を述べることにする。

完掘し得た住居址は、第5号住居址のみで、総体的な住居址プランの傾向を確実に打ち出すことはできなかったが、推定値も含めて考えると、弥生時代終末期と考えられる第6号住居址に比して小型方形で、コーナーの丸味も弱い。また、佐久地方の古墳時代前期住居址の検出例には、佐久市今井西原遺跡第1号住居址、同市宿上屋敷遺跡第1・6号住居址、同市西裏遺跡第10号住居址、望月町後沖遺跡第1・3・4・11・16号住居址があるが、これらに比較してみると本遺跡第3号住居址以外は、概ね小型の傾向にある。

主柱穴は、これまで判然としないものが多く、判明しても方形配置されるものが慣例であったが、本遺跡で整然とした方形配置されるものは第3号住居址のみで、第7号住居址は中央に2個配され、第4・5号住居址は判然としなかった。該期の2個主柱穴の住居址は余り知られないが本例は柱材も残存する確実なもので、このような方形配置以外の確実例の存在は、今後の調査に於いて留意したい点である。

炉として確信の持てるものは第3・5号住居址から検出されている。いずれも縁石をもつ浅い掘り込みの地床炉で、壁寄りほぼ中央に位置しており、位置的には弥生時代終末期頃から往々として観られる傾向を踏襲している。

壁体は、第7号住居址に10cm前後の厚さで補強土が確認され、立ち上がりも緩傾斜である。地

第7表　眉巻遺跡住居址一覧表

（　）は推定値

遺構名	検出位置	平面プラン 形態	規模 cm 長軸	規模 cm 短軸	壁長 cm 東壁	壁長 cm 西壁	壁長 cm 南壁	壁長 cm 北壁	床面積 ㎡	壁残高 cm	長軸方位	炉 カマド	ピット	時期	備考
1住	北区	隅丸長方形	420	386	386	368	316	315	(15.46)	4.5～9.5	N－51°－W	東北コーナー	主柱穴 不明 他8	平安	
2住	南区	隅丸方形or長方形	－	－	－	－	326	－	－	4～18	－	南東コーナー	主柱穴 不明 他2	平安	
3住	南区	隅丸方形	(473)	466	443	(384)	416	(415)	(20.9)	10～25.5	N－46°－W	北側 柱穴間 地床炉	主柱穴 4 他2	古墳前期	焼失住居址 炭化主柱材残存 ベッド状遺構有
4住	南区	隅丸方形or長方形	－	－	305	－	－	－	－	18.5～36.5	－	(住居中央か？地床炉)	主柱穴 不明 他15	古墳前期	貼床 焼失住居址の可能性あり
5住	南区	隅丸方形	395	322	342	359	289	304	12.5	20～35	N－11°－W	北側 壁寄り 地床炉	主柱穴 不明 他9	古墳前期	長さ70cmの壁溝有 焼失住居址
6住	南区	隅丸長方形	538	441	480	502	383	388	22.9	31～44.5	N－2°－E	北側 柱穴間 埋甕炉	主柱穴 他	弥生終末	焼失住居址
7住	南区	隅丸方形	－	319	－	－	－	298	－	19～34	－		主柱穴 2 他11	古墳前期	壁補強土 焼失住居址 炭化主柱材残存

山が砂層という崩れ易い性格であるための、壁崩落に対する措置として把えられる。確実な例は第7号住居址のみであるが、第3・4・5号住居址にも薄く盛り土が残っており、第7号住居址同様の措置が施されていたことは予想に難くない。また、床面は第4号住居址に貼り床が確認され、他の住居址にも薄い盛り土が残っており、壁体同様、砂層に対する措置が予想される。尚、佐久市宿上屋敷遺跡第6号住居址でも、地山砂層に対する措置の施された可能性が指摘されており、主柱穴同様、今後の調査に於いて留意したい点である。

ベッド状遺構は、現在のところ、確然たる概念規定は無く、一般には床面と明瞭な段差を有するものと解されているが、床面と同一レベルでも踏み固められていない面を持つことでそれと判断できるものを含める考え方がある[1]。ここでは意識的に一段高めたことに意義を置き、河野眞知郎氏の概念規定[2]に基づき、本遺跡第3号住居址をベッド状遺構付設住居址と判断した。

ベッド状遺構の構築法には、地山を削り残す場合と、別土を盛る場合とが知られているが、本址は後者にあたる。また、ベッド状遺構に関しては多くの論議がなされているにも関わらず、未だ不透明な部分が多い。しかしながら、集落内における住居址規模や二次元的位置、出土遺物に特異性を指摘する報告が良くなされている。本址の場合を観ると、住居址規模は他の3棟に比してやや大きめで、2個体分の磨製石鏃の出土が目立つ処であろう。古墳時代前期のベッド状遺構は、関東地方に於いて爆発的に増加するにも関わらず、中部地方では減少傾向を辿ると言われ[3]、見知し得る限りの県内例は伊那市堂垣外遺跡第1号住居址と本例のみである。この点に関しては、総体的な資料集成と多角的な検討の必要性を感ずる。

最後に、本遺跡の古墳時代前期後半の住居址4棟に弥生時代終末期の第6号住居址を加えた計

5棟は、総べて焼失住居址あるいはその可能性のあるものであった。岡村眞文氏は「我孫子中学校校庭遺跡」の中で古墳時代前期の住居址が火災に遭ってる割合が非常に多いことを指摘しているが[4]、佐久地方に於いて観ておきたい。佐久地方の弥生時代終末から古墳時代前期の検出住居址は前挙した今井西原、宿上屋敷、西裏、後沖遺跡以外に佐久市池畑遺跡第1号住居址、同市下小平遺跡Y1～5号住居址[5]、小諸市久保田遺跡Y2・3号住居址が在るが、そのうち焼失住居址あるいはその可能性のあるものは、宿上屋敷第1・6号住居址、久保田遺跡Y3号住居址、後沖遺跡第1・4・11・16号住居址であり、本遺跡例を含めると11／21棟、古墳時代前期のみで観ると9／12棟と検出例が少ない割には、火災に遭ったと考えられる住居址の比率が高い。しかし、資料の絶対数が少ないだけに即断はできず、今後の資料増加を待ち精度の高い観察が必要であろう。

弥生終末期、平安時代の住居址については簡単に述べておきたい。弥生終末期の第6号住居址は床面積22m²で該期では平均的な規模をもつが、方形化の傾向が看取される。東・西両壁から2本ずつ検出された柱穴は他に類例を見ないものである。また、埋甕炉が付設されていたことは、当該期に至っても佐久地方が、中南信・天竜川水系との関係を保ち続けていたことによるものと理解される。

平安時代の第1・2号住居址2棟はいずれもカマドを東南隅にもつ。付設位置が東南隅に多くなる時期は煮沸具に羽釜が出現する時期と密接な関係をもつようであり、今後この点についても十分に留意しなければならない。　（篠原）

註1　我孫子町教育委員会　1985　『我孫子中学校校庭遺跡』の中で、岡村眞文氏は「これらのベッド状遺構は床面と明瞭な段差を持つものと、床面と同一レベルで踏み固められていない面を持つことでそれと判別できるものの2種ある」としている。

註2　「初期農耕集落の解明―ベッド状遺構の再検討―」『CIRCUL PACIFIC I』1975の中で、河野眞知郎氏は「他の部分の床面より高まった平坦面に作られているものを指す。その名の通り、人が横たわれるほどの大きさを持つものを指しており、小規模なものは含めない。」としている。

註3　河野眞知郎　1975　「初期農耕集落の解明―ベッド状遺構の再検討」『CIRCUL PACIFIC I』参照

註4　「I群土器（五領後半としている）を伴う住居が火災にあっている割合が非常に高い。中略　この高率は単なる自然的要因がその原因とは考えられない。今のところ直接の根拠はないが、やはり社会的人為的要因が考慮されるべきであろう。」と記している。

註5　佐久市教育委員会　佐久埋蔵文化財調査センター　1986　『池畑・西御堂』「第V章調査のまとめ」註2参照

遺物

腰巻遺跡の各遺構からは弥生土器、土師器、金属器（佐波理鋺、鉄製刀子）、石製管玉等が出土している。このうち、第6号住居址出土の弥生土器、第3～5号住居址出土の古墳時代前期の土器群を中心に検討を加えることにする。但し、いずれの住居址も出土遺物は少なく、該期の器種構成を網羅できる状況ではない。また、全形態を伺えるものも一点もないため、予察的な見解に

ならざるを得ないことも予めお断りしておく。

第6号住居址の弥生土器は確実に伴出する第5層・炭化物層出土遺物を中心に述べる。壺・甕・蓋・鉢などがある。壺は下位に外稜を有する胴部の上半がふくらんでやや丸味を帯び、櫛描簾状文とT字文が融合した頸部文様をもつ。甕は胴部がやや下ぶくらみ状を呈し、波状文施文パターンの乱れが著しい。以上のような壺・甕の形態（球胴化・下ぶくらみ傾向）・施文傾向は箱清水式土器の系譜からみても新しい要素であり[1]、解体期の様相を示すと理解される。赤塚編年[2]でいうS字甕B類を共伴する御屋敷遺跡Y4号住居址出土資料（所謂御屋敷式土器）と密接な関連が考えられ、東海地方西部では元屋敷式土器古段階[3]に併行する可能性が強い。従って、33－9のような小型器台が伴出する可能性も強いと考えられる[4]。現状で腰巻6号住と類似要素をもつ資料は下小平遺跡Y1～5号住[5]、池畑遺跡第2号住[6]、清水田遺跡Y10号住[7]などにある。

第3～5号住居址、第6号住居址第2・3層、第1号竪穴遺構出土の古墳時代前期の土器群は、住居の焼失状況、出土土器相互の比較から、ほぼ同時期のものと見做して検討を行う。

器種には壺・甕・台付甕・甑・鉢・小型丸底土器・高坏・注口土器などがある。このうち、時期推定の指標となるのは外来系土器S字甕27－5、小型精製土器群の小型高坏17－6、小型丸底土器27－10、甕33－11等であろう。S字甕は形態・成形・調整技法の特徴、胎土に金雲母を含まれないことなどから、群馬県に分布するS字甕との類似性が指摘される。群馬県のS字甕編年田口分類[8]によればIV－b類に比定され、東海西部地方S字甕の赤塚分類ではC類[9]に対応する。小型精製土器群は本遺跡出土資料中では小型器台、小型鉢が欠落するが、口径が体部径を凌駕すると考えられる小型丸底土器27－10の存在から小型高坏・器台・丸底土器・鉢は出揃っている段階と考えられる。小型高坏は東海系であろう。甕33－11は佐久地方では初見の例である。口縁端部内面が肥厚して突出、胴部内面が削り込まれて薄く成形される技法等は畿内の布留甕の形質を有している。布留甕は寺沢編年[10]によれば布留O式（纒向3式後半）以降、成立・発展するようである。

これら群馬・東海・畿内各地の影響が考えられる外来系土器を整理するとS字甕群馬IV－b類＝東海C類＝元屋敷中段階、小型精製土器群小型高坏・器台・丸底土器・鉢が出揃う段階＝元屋敷中段階と時期が概ね一致する。従って、本遺跡出土の古墳時代前期の土器群は東海編年では元屋敷中段階以降、四世紀後半の所産の位置付けておくのが適当であろう。前述した外来系土器以外の土器は壺は球胴、折り返し口縁のもの、甕は刷毛調整で「く」の字状を呈する単純口縁のものと、ヘラミガキされる球胴のものなどがみられる。在地の土器の発展過程が不明瞭な状況であるが、弥生的色彩を残すものは赤彩鉢、高坏以外ほとんどないと思われる。

平安時代の遺物は少なく、時期決定には無理があるが羽釜と考えられる破片の存在から推しはかると十世紀中葉以降に落ち着いてこよう。佐波理鋺7－1は佐久地方初見例であるが、歪みから形態が把えられず、その位置付けは後の類例の増加に委ねたいと思う。　（小山）

第1図　腰巻・西大久保Ⅱ遺跡

註1　小山岳夫　1988　「弥生土器編年の確立に向けて（その2）」『佐久考古通信No44』

註2　赤塚次郎　1986　「「S字甕」覚書'85」『愛知県埋蔵文化財センター年報昭和60年度』

註3　加納俊介　1986　「東海地方」『シンポジウム「月影式」土器について』

元屋敷古段階・愛知県一宮市元屋敷遺跡竪穴状遺構出土土器を標式資料とする土器群には小型高坏・小型器台や二段口縁壺が伴出するとし、S字甕はB類が多いとしている。

註4　御屋敷式土器標式資料、御屋敷遺跡Y4住、長野市四ツ屋遺跡Y30号住などの出土資料中に明確な小型高坏・器台の共伴例はない。明確な小型器台を伴出した瀧の峯2号墳、小諸市久保田遺跡出土資料との相互比較が今後問題となろう。

註5　佐久市教育委員会　1981　「下小平」

註6　佐久埋蔵文化財調査センター　1986　「池畑・西御堂」

註7　佐久市教育委員会　1980　「清水田」

註8　田口一郎　1981　「S字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』　高崎市教育委員会

註9　前掲註2

註10　寺沢　薫　1986　「畿内における古式土師器の編年と北陸系土器」『シンポジウム「月影式」土器について』

引用参考文献

桐原健・御子柴泰正　1969　「長野県伊那市美篶笠原堂垣戸遺跡調査概報」『信濃21－4』

河野眞知郎　1975　「初期農耕集落の解明―ベッド状遺構の再検討―」『CIRCUL PACIFIC Ⅰ』

佐久市教育委員会　1975　『今井西原』

関川尚功・石野博信　1976　『壇　向』

長野市教育委員会　1980　『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』

比田井克仁　1980　「古墳発生時における小型高坏について」『金鈴22』

佐久市教育委員会　1981　『下小平遺跡』

高崎市教育委員会　1981　『元島名将軍塚古墳』

長野県教育委員会　1982　『長野県史』考古資料編・主要遺跡（東北信）・（中南信）

望月町教育委員会　1983　『後沖遺跡』

千曲川水系古代文化研究所　1984　『古墳出現期の地域性』　第5回三県シンポジウム

小諸市教育委員会　1984　『久保田』

我孫子町教育委員会　1985　『我孫子中学校校庭遺跡』

飯田市教育委員会　1986　『恒川遺跡群』

佐久埋蔵文化財調査センター　1986・1987　『西裏・竹田峯』『池畑・西御堂』『宿上屋敷・下川原・光明寺』

石川県考古学研究会　1986　『シンポジウム「月影式」土器について』

東海埋蔵文化財研究会　1986　『欠山式土器とその前後』

小田原市教育委員会　1987　『千代南原遺跡第Ⅳ地点』

三石宗一　1987　「瀧の峯古墳群について」『佐久考古通信No42・43』

付　　編

腰巻遺跡試料炭化材同定調査報告

パリノサーヴェイ株式会社

1 試　料

試料は、4住居址から検出されたNo.1～16の16点である(表1)。このうち、H6住は弥生時代終末期のものとされ、このほかのH3、H5、H7住は古墳時代前期後半（4世紀後半）のものとされている。試料はすべて建築材と考えられている。

2 方　法

試料を乾燥させたのち木口・柾目・板目三断面を作成、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版1、2）も作成した。

3 結　果

試料16点は以下4種類（Taxa）に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などはつぎのようなものである。

・コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種［Quercus(subgen.Lepidobalanus sect.Prinus)sp.］　ブナ科　No.1，2，3，4，5，6，10，11.

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火災状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（Quercus mongolica）とその変種ミズナラ（Q.mongolica var. grosseserrata）、コナラ（Q.serrata）、ナラガシワ（Q.aliena）、カシワ（Q.dentata）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具、機械、樽材な

どの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ(Q.acutissima)に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種［Quercus(subgen.Lipidobalanus sect.Cerris)sp.］　ブナ科　No.12, 14, 15, 16.

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では楕円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棚状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属の中で果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ（Q.variabilis）の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、楯材などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

・クリ（Castanea crenata）　ブナ科　No.7, 8, 9.

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棚状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楯木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

・イネ科の一種［Granieae sp.］　No.13.

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

イネ科は、稈が木質となるタケ亜科（タケ・ササ類）と木質とはならない草本性のものに2分されるが、試料は草本性のものである。

同定結果を一覧表で示す（表1）。

表1　腰巻遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	出土遺構	種名
1	H 3 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
2	H 3 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
3	H 3 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
4	H 3 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
5	H 3 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
6	H 5 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
7	H 6 住	クリ
8	H 6 住	クリ
9	H 6 住	クリ
10	H 6 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
11	H 7 住	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
12	H 7 住	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
13	H 7 住	イネ科の一種
14	H 7 住	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
15	H 7 住	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
16	H 7 住	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種

4 考　察

No.13はイネ科草本種と同定された。種は同定できなかったが、建築材であるならば屋根や壁の材料として用いられたもので、ススキなどが考えられる。このほかの木本種はいずれもブナ科のものであった。コナラ節のものの種は特定できないが、いずれも重硬な材であることから、各住居の主要な構造材として選択されたものとして考えてよいであろう。

ただ、焼失住居址検出の炭化材の場合、その残存率や残存量には樹種や材質の違いに加えて、材の大きさ（太さ）や燃え方など多くの要因が複合して影響を与えているものと考えている。さらに、今回の同定試料のように状態の良好なものが選択されたり残存量が少ない場合には、特定の樹種（多くは今回と同様にブナ科のもの）に偏った組成になることが、他の遺跡でも知られている。例えば、埼玉県庄和町尾ケ崎遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社　1984）や千葉県流山市

上貝塚遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社　1986）など。一方、火山噴火にともなう火砕流によって住居の焼失と埋積がほぼ同時に起こったとみられる群馬県渋川市中筋遺跡から検出された炭化材では、コナラ節の材も認められたが、同時にムラサキシキブ属やコクサギといった低木性の樹種も使われていたことが明かとなっている（パリノ・サーヴェイ株式会社　1988）。したがって、同定対象とならなかった出土材や、残存しなかった材の中には同定されたブナ科以外にも多くの樹種が含まれていたものと考えている。そこで当時の建築材の用材を知るためには、少なくとも出土したすべての試料を対象として同定作業を進めることが必要であろう。

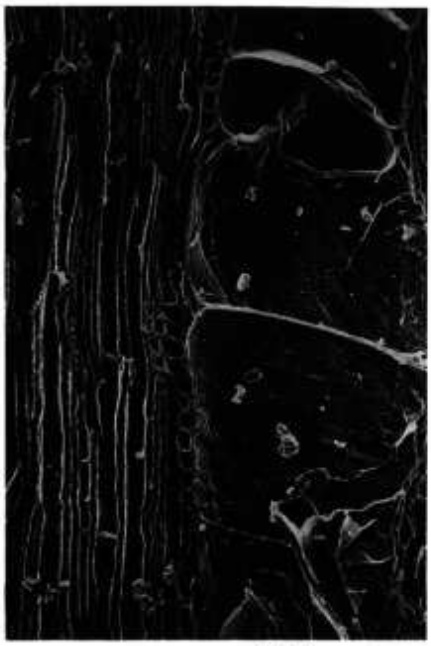
引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社　1984　古墳時代の樹種鑑定、「尾ケ崎遺跡―縄文・古墳時代集落跡の調査―」，埼玉県庄和町・尾ケ崎遺跡調査会，159－162.

――――――――――――1986　上貝塚遺跡001住居跡の炭化材樹種同，「常磐自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　―谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)―」，日本道路公団東京第一建設局・（財）千葉県文化財センター，386－388.

――――――――――――1988　中筋遺跡出土炭化材の樹種，「渋川市発掘調査報告書第18集中筋遺跡第二次発掘調査概要報告書」，渋川市教育委員会.

木口 x35



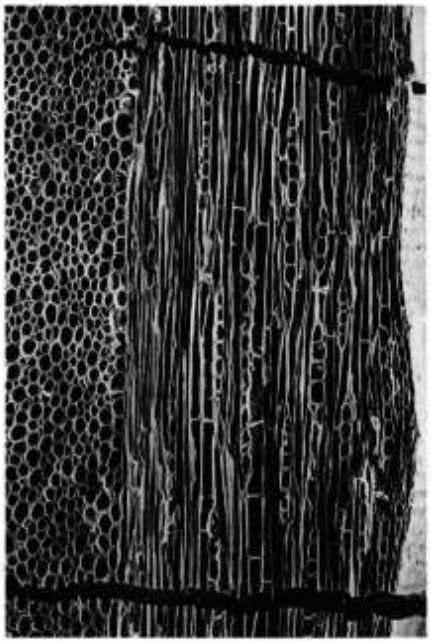
柾目 x140

板目 x140

Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. No. 1

木口 x35

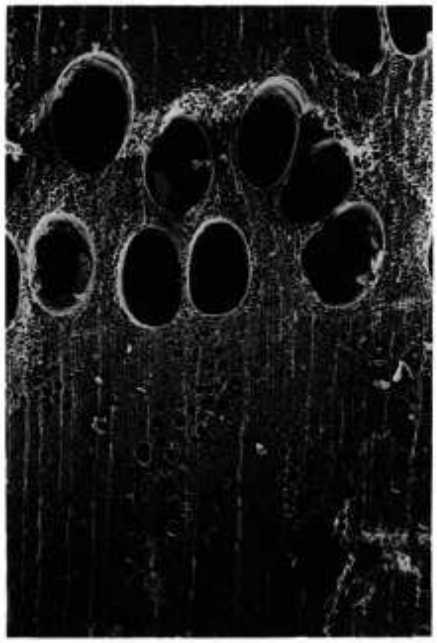
柾目 x140



板目 x140

Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. No. 12

図版 2

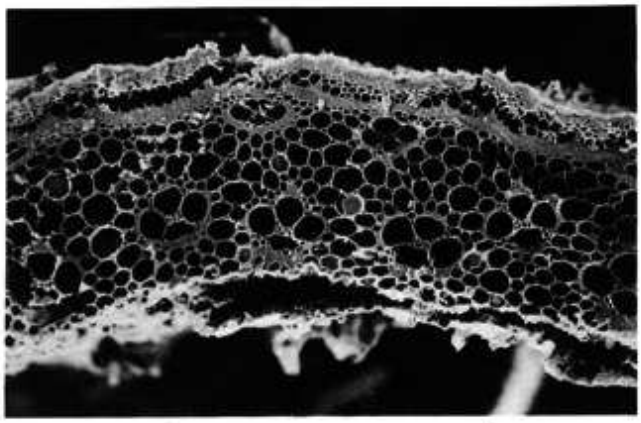


木口 x35

柾目 x140

板目 x140

Castanea crenata No. 7

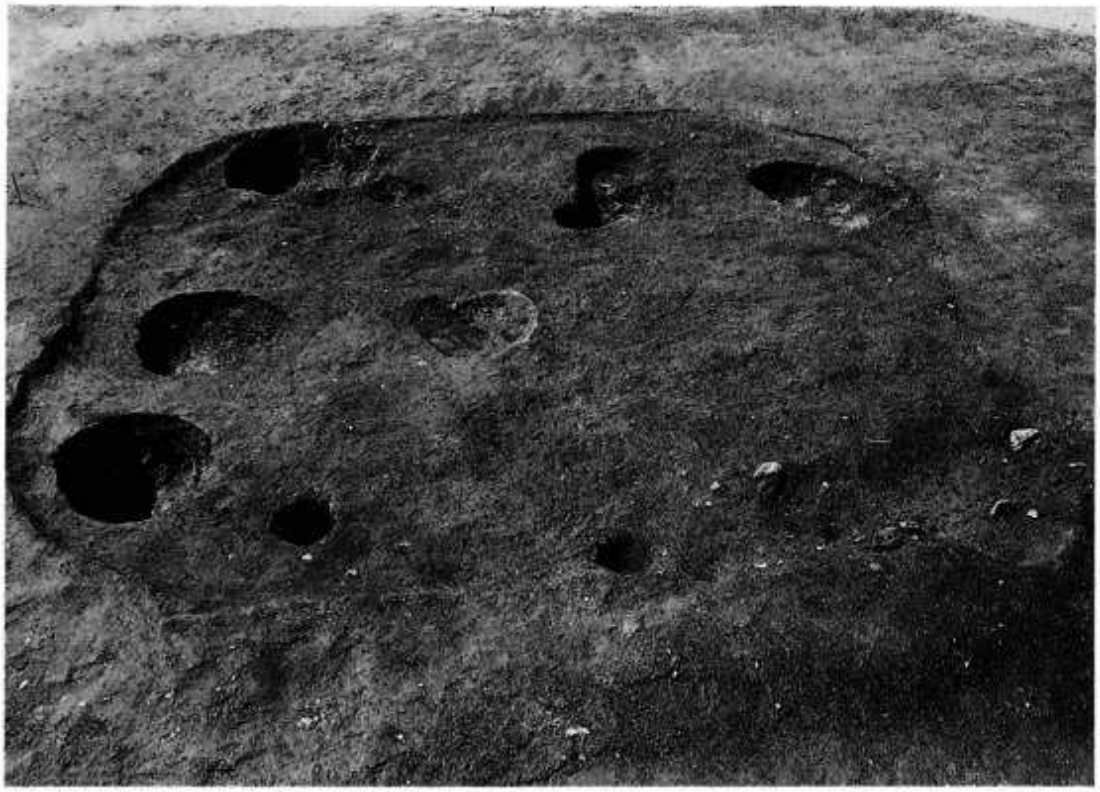


木口 x70

Gramineae sp. No. 13

1　腰巻遺跡遠景（対岸栗毛坂遺跡A地点より）

2　腰巻遺跡南部段丘面近景（（北方より）



1　第1号住居址（南東より）

2　第1号住居址遺物出土状況（南西より）

1　第1号住居址鉄刀子出土状況

2　第1号住居址佐波理鋺出土状況

3　第1号住居址カマド（西方より）

4　第2号住居址カマド（北西より）

5　第2号住居址（南方より）

1　第3号住居址（南東より）

2　第3号住居址炭化材出土状況（南東より）

1　第3号住居址遺物・炭化材出土状況（南西より）

2　第2号住居址炉址（南東より）

3　第3号住居址北東側遺物炭化材出土状況

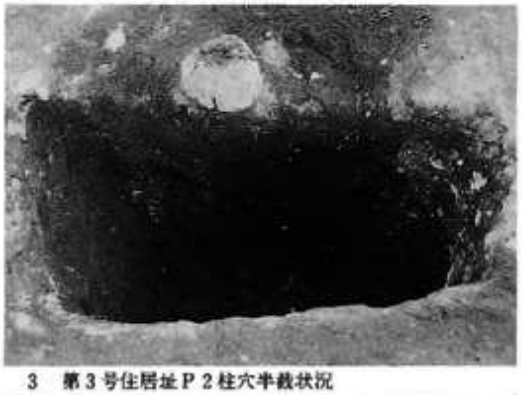
4　第3号住居址北東側炭化材出土状況

5　第3号住居址北東壁下炭化材出土状況

図版　六　腰巻遺跡

1　第3号住居址P1柱材出土状況

2　第3号住居址P1柱穴半截状況



3　第3号住居址P2柱穴半截状況

4　第3号住居址P3上炭化材出土状況

5　第3号住居址P3上炭化材出土状況

6　第3号住居址P3柱穴半截状況

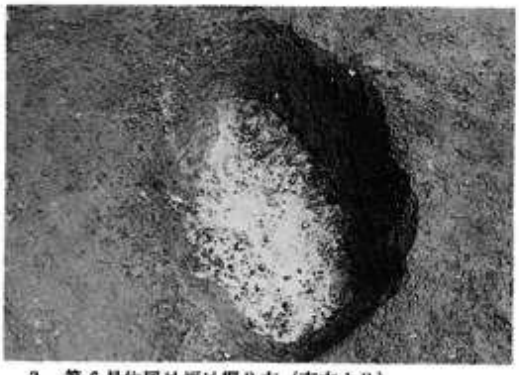
7　第4号住居址遺物出土状況

1 第4号住居址（南東より）

2 第4号住居址遺物出土状況（南東より）

1　第5号住居址炭化材出土状況（南方より）

2　第5号住居址炉址（南方より）



3　第6号住居址炉址掘り方（南方より）

4　第6号住居炉址半截状況

5　第6号住居址炉址（直上から）

1　第6号住居址（南方より）

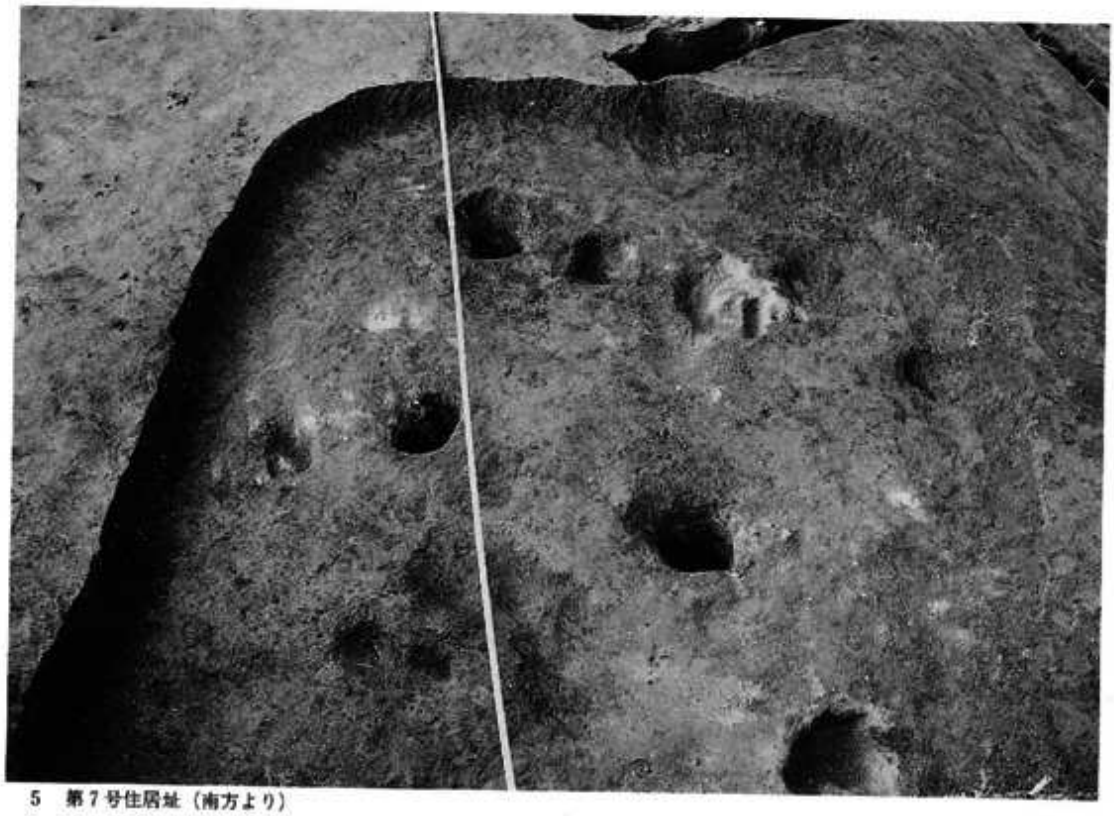
2　第6号住居址遺物・炭化材出土状況（南方より）

1 第6号住居址遺物出土状況

2 第6号住居址遺物出土状況

3 第6号住居址遺物出土状況

4 第6号住居址遺物出土状況



5 第7号住居址（南方より）

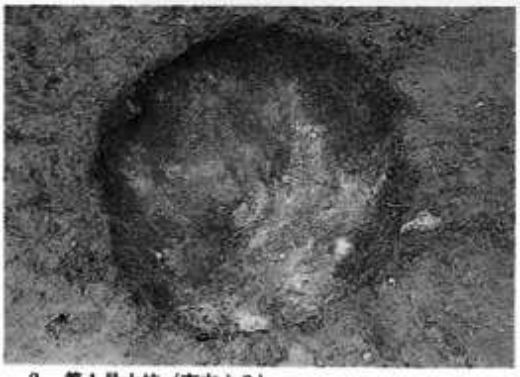
1 第7号住居址炭化材出土状況（南方より）

2 第7号住居址炭化材出土状況

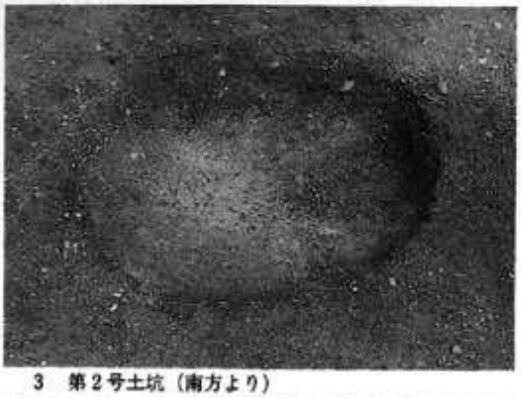
3 第7号住居址遺物出土状況

4 第1号竪穴遺構遺物出土状況

1 第1号竪穴遺構（南東より）

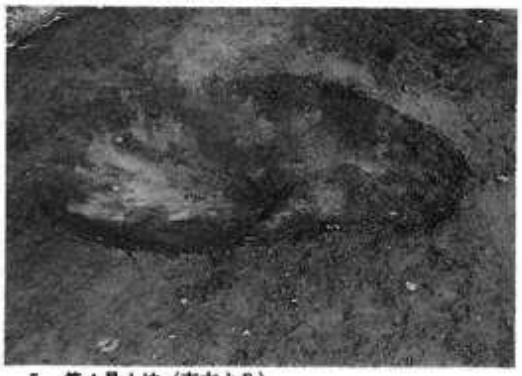


2 第1号土坑（南方より）



3 第2号土坑（南方より）

4 第3号土坑（南方より）



5 第4号土坑（南方より）

1 第2・3号溝状遺構（南方より）

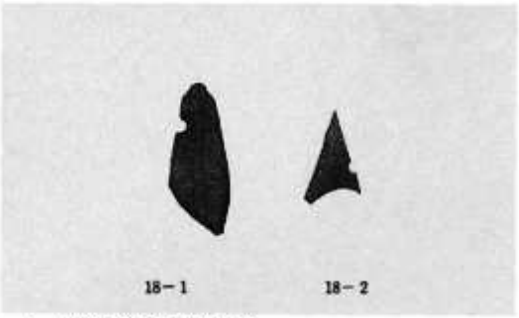
2 第4号溝状遺構（南西より）

3 スナップ

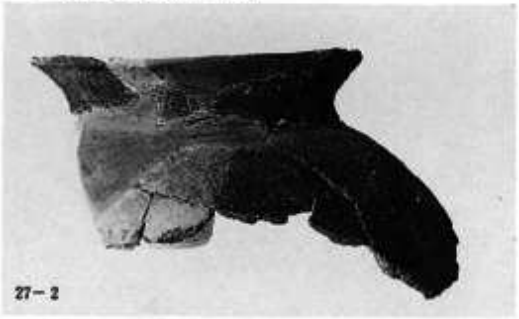
1 第1号住居址出土佐波理鍋

2 第1号住居址出土鉄刀子

3 第3号住居址出土土器



4 第3号住居址出土石器



5 第5号住居址出土土器

6 第5号住居址出土土器

7 第6号住居址出土土器

8 第6号住居址出土土器

9 第6号住居址出土土器

1 第6号住居址出土土器

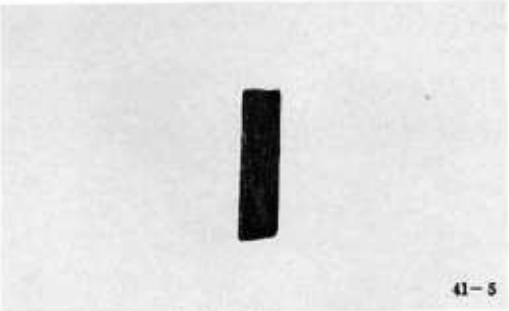
2 第6号住居址出土土器

3 第6号住居址出土土器

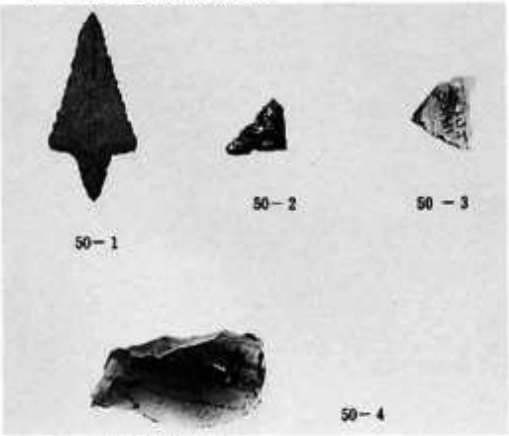
4 第6号住居址出土土器

5 第6号住居址出土土器

6 第1号竪穴遺構出土土器



7 第1号竪穴遺構出土管玉



8 表採・溝内出土石器

9 表採・溝内出土石器

1 現地説明会スナップ

2 スナップ

3 スナップ

4 スナップ

5 スナップ

第２編　曲尾Ⅱ遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る動機

曲尾II遺跡は、佐久市香坂東地の山麓、標高870m内外の南傾斜地に存在する。

昨年、隣接した曲尾Ⅰ・Ⅲ遺跡の発掘調査を実施した結果、曲尾Ⅰ遺跡からは、竪穴状遺構1基、縄文時代中期後半加曽利EⅢ期の土壙墓1基を含める土坑8基が検出されており、また、曲尾Ⅲ遺跡からは、平安時代前葉の竪穴住居址1棟、性格・時期不明の土坑9基が検出された。以上のことから、曲尾II遺跡は遺跡の中心からはずれるものの縄文・平安時代の遺構の存在が十分予想される。

今回、佐久市土木課が行う市道香坂曲尾線新設事業（高速道路関連道路）に伴い遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に発掘調査をし、記録保存する必要が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久市土木課より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査をする運びとなった。

第1図　曲尾II遺跡の位置（1：50,000国土地理院地形図による）

第2節　調査日誌

10月16日（金）～19日（月）・21日（水）

第3・4地区を重機により表土削平を行う。

10月20日（火）～27日（火）

第3・4地区の精査、土坑掘り下げ、実測、写真撮影を行い、第3・4地区の作業を終了する。

10月29日（木）

第1・2地区を重機により表土削平を行う。

10月30日（金）～11月9日（月）

第1・2地区の精査、土坑の掘り下げ、写真撮影を行い、全体写真、全体実測を実施し、現場での作業をすべて終了する。

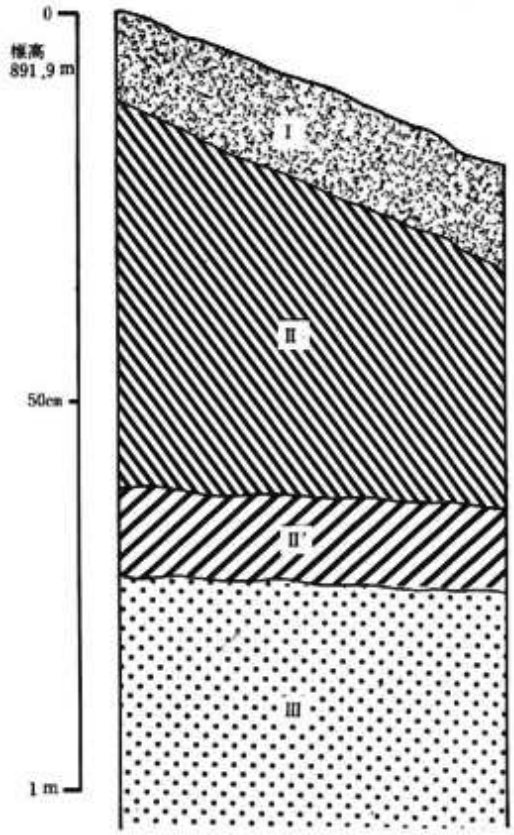
11月10日（火）～昭和63年3月29日（火）

室内において報告書作成作業を行いすべての調査を完了する。（高村）

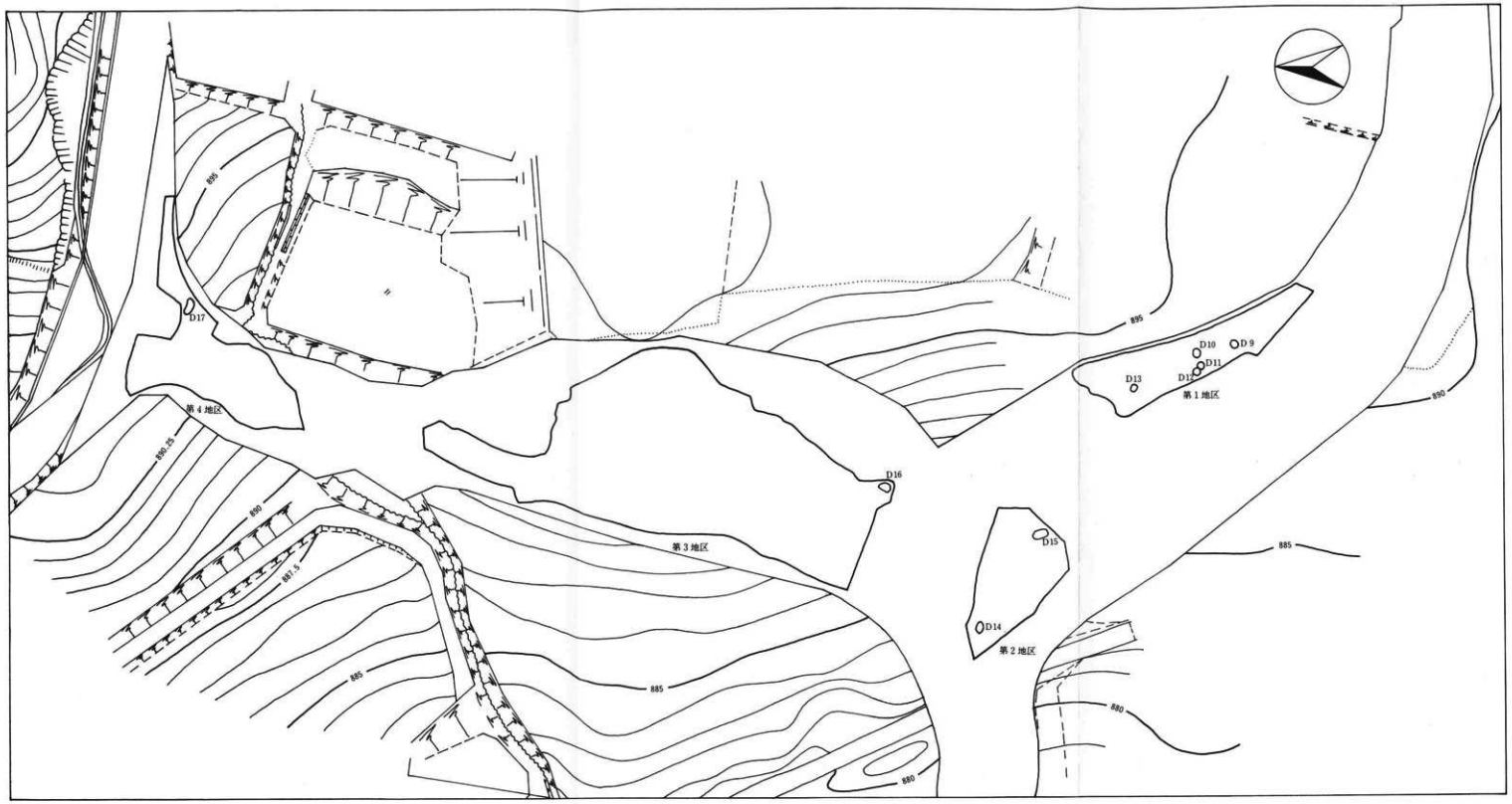
第II章　基本層序及び概要

第1節　基本層序

曲尾II遺跡は、曲尾I遺跡の道路幅変更分の第1・2地区と新たに敷設される第3・4地区に大きく分けて二分割できる。第1・2地区の基本層序については、昭和62年に刊行された『淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I』の曲尾I遺跡の項に報告してあるのでここでは再述しない。第3地区は



第2図　曲尾II遺跡第3地区基本層序模式図



第3図　曲尾Ⅱ遺跡全体図（1：500）

遺跡の中心と思われる台地の西斜面で、かなり急角度の西方向への傾斜地である。ここに深掘トレンチを1ヶ所入れ、基本層序の観察を行った。

曲尾II遺跡基本層序

第I層	10YR 4/4	褐色土層	粘性ややあり、粒子やや細かく、パミス少量含む。
第II層	10YR 7/8	黄橙色土層	粘性ややあり、小礫・パミスを含む。
第II'層	10YR 7/8	黄橙色土層	II層にやや粘性が加わる。
第III層	10YR 6/8	明黄褐色土層	粘性強く、白色粒子・赤褐色粒子混入。

基本土層は、表土を削平した後、観察したため、漸移層（第I層）から観察してある。第3・4地区の間には、小川が流れており、低湿地が在存する。土坑の確認面は第I層上面からである。

（高村）

第2節　検出遺構・遺物の概要

遺構

土坑9基

遺物

縄文土器（早期・中期後半・後期）、打製石斧、凹石。土師器

第Ⅲ章　遺構と遺物

第1節　土　　坑（第4～6図、図版四・五）

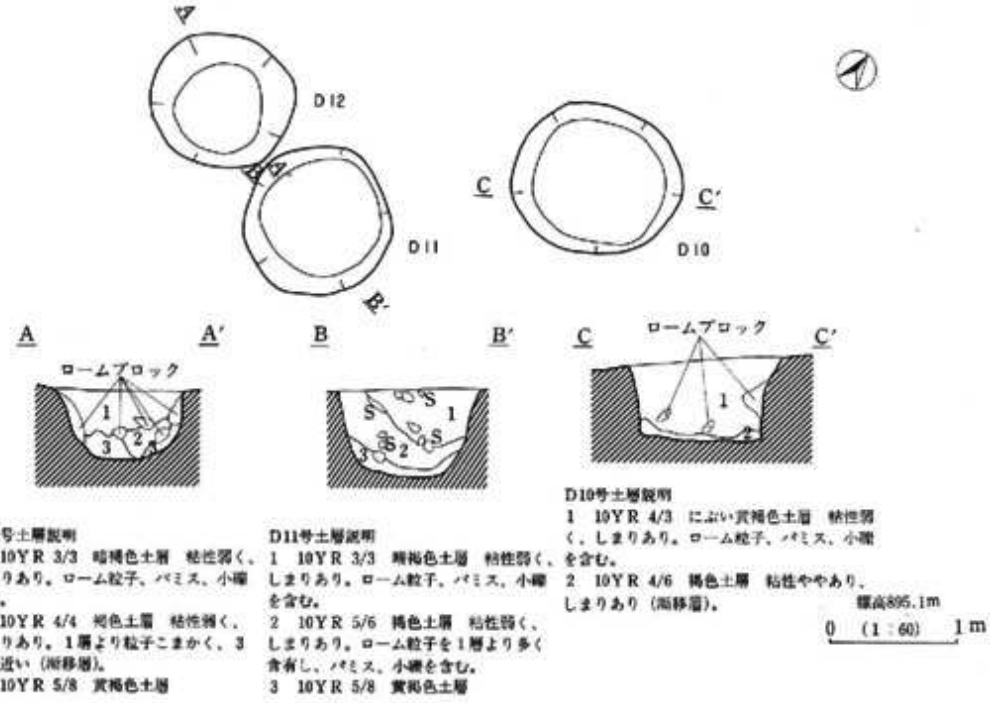
本遺跡で検出された土坑は総数で9基を数える。

第9号土坑は第1地区東側に位置し、径125～132cmの円形を呈する。深さは20cmを測り、底面平坦で急角度に落ち込む。

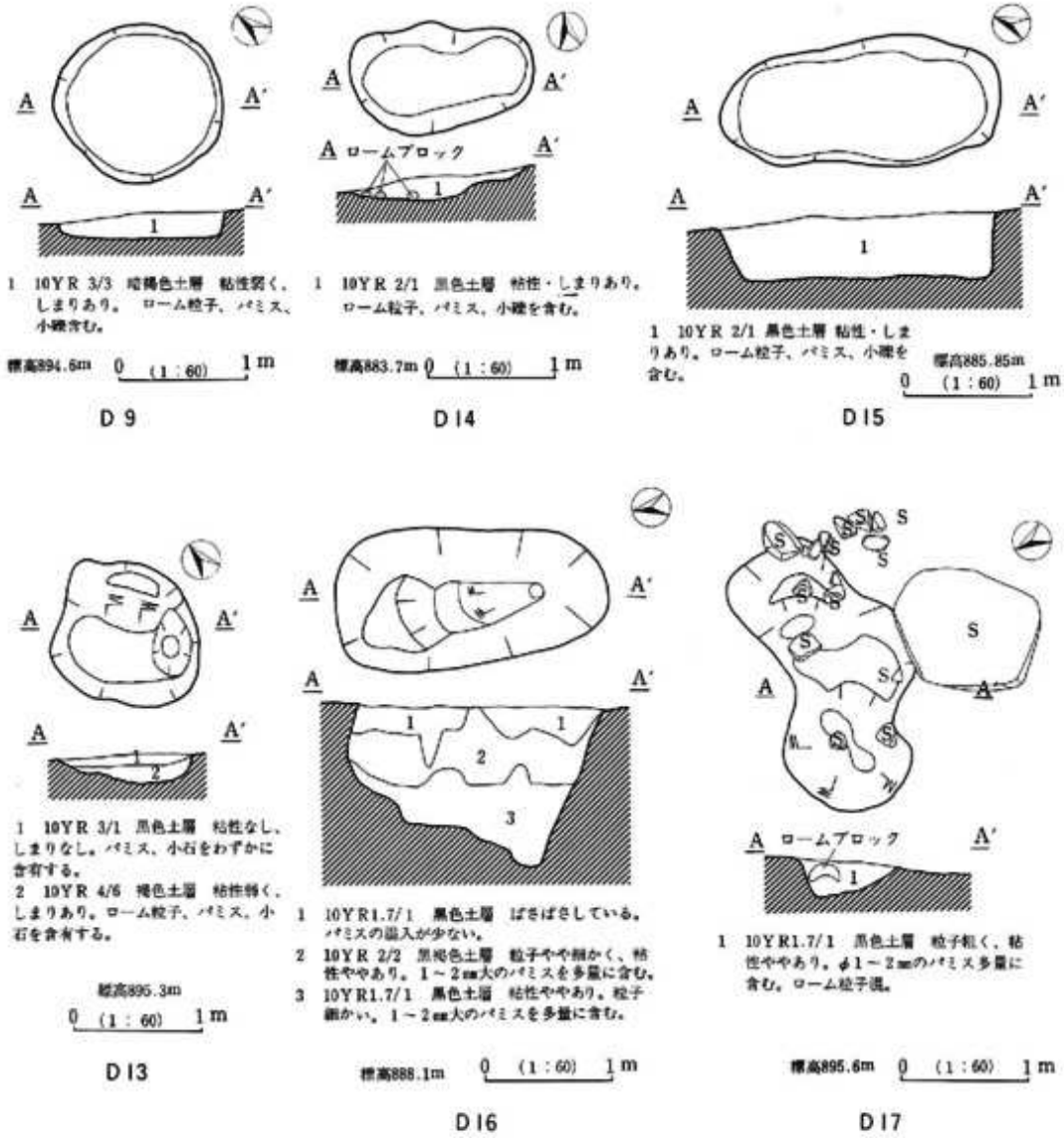
第10号土坑は第1地区、第9号土坑の西側に位置し、径115～132cmの円形を呈する。深さは55cmを測り、底面平坦で急角度に落ち込む。

第11号土坑は第1地区で、第10号土坑の南側に位置し、径120cmの円形を呈する。深さは70cmを測り、底面はほぼ平坦で急角度に落ち込む。

第12号土坑は第1地区、第11号土坑の西側に近接し、径105～110cmの円形を呈する。深さは54



第4図　第10～12号土坑実測図

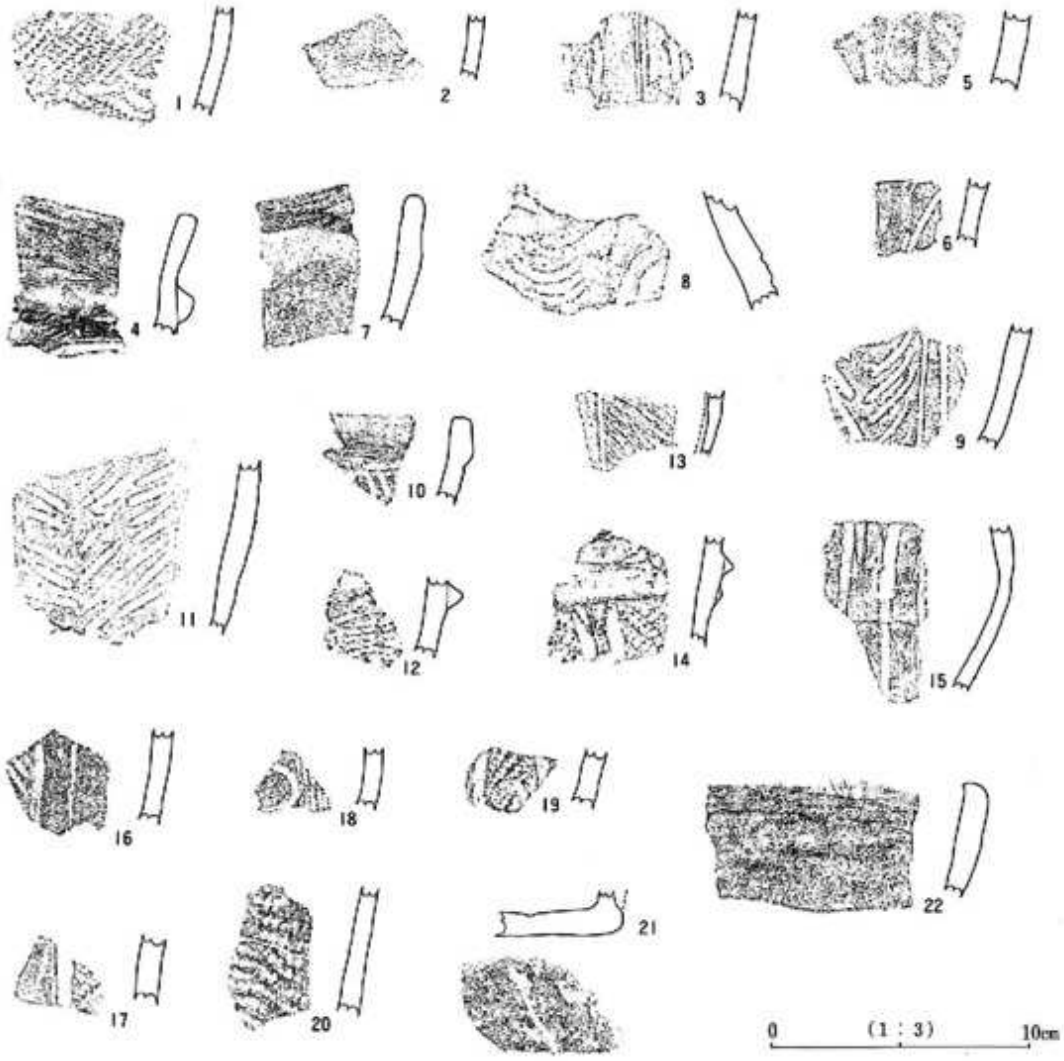


第5図　第9・13・17号土坑実測図

cmを測り、底面ほぼ平坦で急角度に落ち込んでいる。

第9～12号土坑の4基は、台地がやや南に傾斜しはじめた平坦地に一つの群として存在しており、規模・形態も径105～132cmの円形を呈し、急角度の落ち込みと底面平坦である点などほとんど同一の性格をもった土坑と考えられるが、出土遺物が皆無で、その時期等に言及できない。

第13号土坑は第1地区、西側に位置し、長軸長113cm、短軸長110cmを測る不定形を呈する。深さは最深部で22cmを測り、浅い掘り込みである。出土遺物は縄文時代早期末から前期初頭の時期と考えられる深鉢胴部片（6－1）が一片出土しているが、流れ込みによる混入と思われる。



第6図　第13・14・16号土坑出土土器拓影図

第14号土坑は第2地区、西側に位置し、長軸長142cm、短軸長80cmの楕円形を呈する。長軸方位N－89°－Wを示し、深さは19cmを測り、浅い掘り込みである。出土遺物は、縄文時代中期末と考えられる器種不明の胴部片（6－2）が一片出土しているが、流れ込みによる混入と思われる。

第15号土坑は第2地区、東側に位置し、長軸長220cm、短軸長95cmの楕円形を呈する。長軸方位はN－28°－Wを示し、深さ49cmを測る。底面平坦で急角度に落ち込む。覆土は一層で自然堆積とは異質で、ローム粒子・パミスを含み、あるいは人為埋土の可能性がある。出土遺物がなく時期等は言及できない。

第16号土坑は第3地区、南西隅に位置し、長軸長211cm、短軸長105cmの楕円形を呈する。長軸

第1表　第13・14・16号土坑出土土器拓影図観察表

挿図番号	器種	部位	文様	時期	備考
6－1	深鉢	胴部	RL単節縄文とLR単節縄文との結束による羽状縄文。	早期末～前期初頭	胎土に植物繊維と粗粒砂を多く含む　D13
6－2	?	〃	RL単節縄文をまばらに施文。	中期末	D14
6－3	深鉢	〃	多条の沈線を垂下。	中期後半（曽利）	D16W区　(No.4)
6－4	〃	口縁部	口縁上部に幅広の無文帯。隆帯区画	〃	D16E区　(No.7)
6－5	〃	胴部	短沈線地文。沈線を垂下。	〃	D16W区　(No.10)
6－6	〃	〃	短沈線地文。	〃	D16E区　(No.20)
6－7	〃	口縁部	浅い凹線による口縁部文様。	〃	D16E区　(No.24)
6－8	〃	胴部	鋸状の短沈線を地文とする。2条の沈線による懸垂文。	中期後半（曽利Ⅱ？）	D16W区　(No.1)
6－9	〃	〃	波状の短沈線文を地文とする。2条の沈線を垂下。	中期後半（曽利Ⅱ～Ⅳ）	D16W区　(No.3)
6－10	〃	口縁部	短沈線地文。	〃	D16W区　(No.6)
6－11	〃	胴部	垂下する沈線による区画。波状の短沈線を地文とする。	中期後半（曽利Ⅳ～Ⅴ）	D16E区　(No.8)
6－12	〃	頸部	縄文＋隆帯、原体　RL単節縄文。	中期後半（加曽利E）	D16W区　(No.5)
6－13	〃	胴部	縦位懸垂文＋磨消縄文（調整→沈線→縄文充填）。原体　LR単節縄文。	〃	D16W区　(No.16)
6－14	〃	頸部	横走する隆帯により頸部を区画。口縁は渦巻文か？胴部はLR単節縄文を地文として、2条単位の沈線文を垂下させる。	中期後半（加曽利EⅢ）	D16W区　(No.2)
6－15	〃	胴部	縦位沈線懸垂文＋磨消縄文。原体　RLR複節縄文。	〃	D16W区　(No.9)
6－16	〃	〃	沈線による懸垂文＋磨消縄文。原体　LR単節縄文。	〃	D16W区　(No.11)
6－17	〃	〃	縦位懸垂文＋磨消縄文（調整→沈線→縄文充填）。原体　RL単節縄文。	〃	D16W区　(No.15)
6－18		〃	LR単節縄文地文。沈線による蛇行懸垂文。	〃	D16E区　(No.19)
6－19	深鉢	〃	RL単節縄文を地文として、縦位及び蕨手状の懸垂文。	中期後半（加曽利EⅢ～Ⅳ）	D16W区　(No.17)
6－20	〃	〃	LR単節縄文。	中期後半	D16W区　(No.13, 14)
6－21		底部		〃	D16W区　(No.18)
6－22	深鉢	口縁部		〃	D16W区　(No.26)

方位はN－3°－Wを示し、深さは最深部で124cmを測る。底面は長軸に沿って北方から2段のテラスを有し、南方に最深部が偏っている。出土遺物は他の土坑に比べて多く、縄文時代中期後半の深鉢の破片が25片出土している。そのうち20片を図示した（6－3～22）。これらの土器片は後で述べるが、曲尾遺跡の中心である台地上部からの流れ込みと考えられ、本土坑と共伴する可能性は薄いと思われる。

第17号土坑は第4地区、北側に位置し、長軸長215cm、短軸長92cmの不定形を呈する。深さは最深部で32.5cmを測り、出土遺物は皆無であった。

以上、9基の土坑について述べたが、第13・14・17号土坑は遺構とするよりも自然営力による落ち込みかもしれない。

（高村）

第2節　区出土遺物

1）土　　器（第6～10・13図、図版六～八）

区出土遺物は、表土からの出土及び流れ込みの遺物がほとんどであるため、表採と同様な情報量しか含まないと考えられる。本項で行う、区出土土器の分析は、表採土器の分布から遺跡を類推すると同様に、土器自身がもっている情報をもとに曲尾遺跡の内包している姿の一端を類推していきたい。

区出土土器の総数は342点（土坑出土土器も流れ込みと考えられるので、区出土土器総数の中に含まれている。）で、そのうち図示したのは127点である。図示した土器は、拓本として有効なもの及び小片でも特異なものを恣意的に抽出した。そのため無文土器のほとんどが図示し得なかった215点の中に含まれ、縄文時代後期に属する土器片が数多く含まれている可能性がある。342点のうち第3地区から1点だけ土師器武蔵甕胴部小片が出土しており、あとはすべて縄文土器である。

第2表　第1～3地区出土中期後半土器分類表

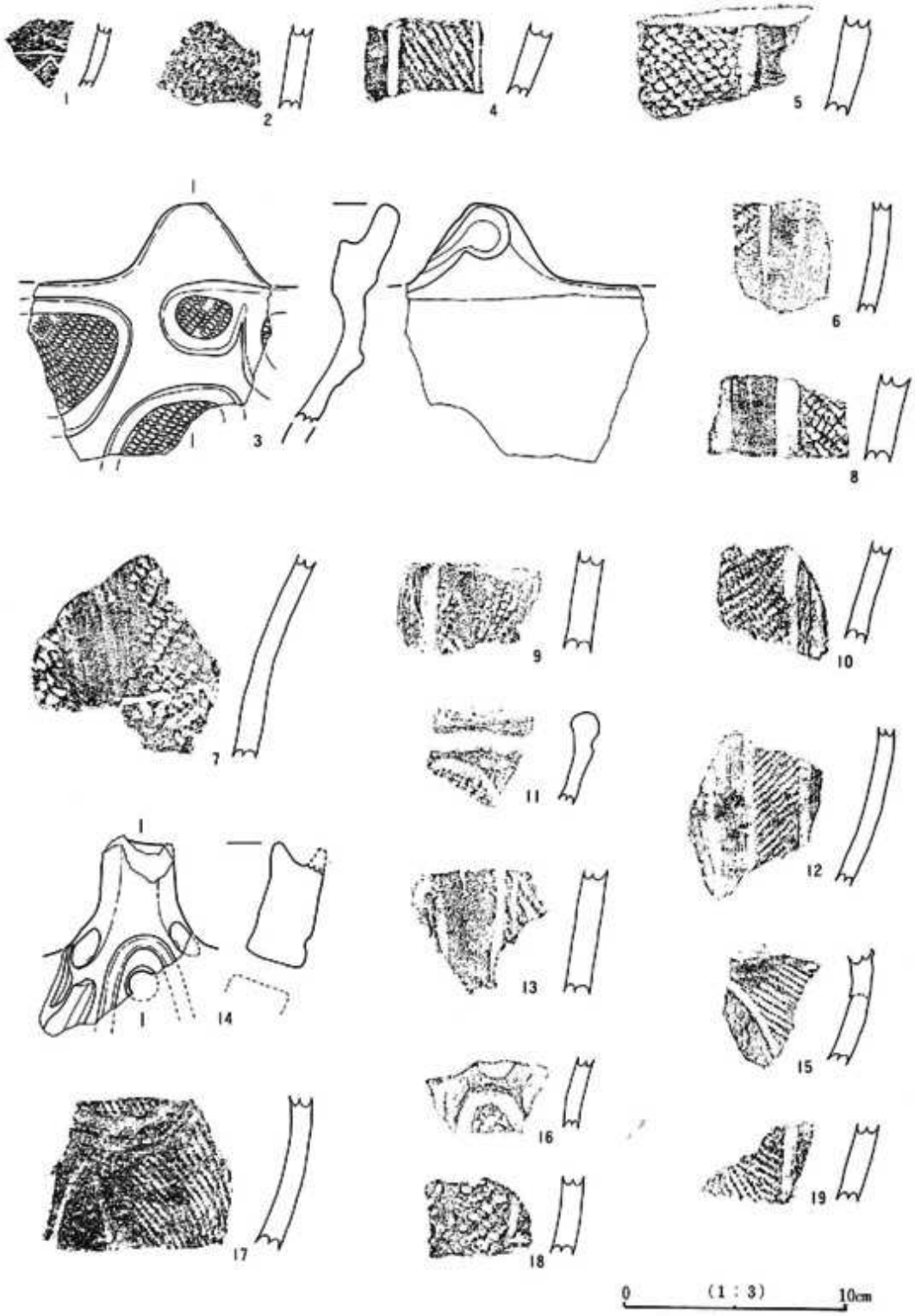
時期名		破片数
加曽利E系	加曽利E Ⅲ	18
	加曽利E Ⅲ～Ⅳ	7
	加曽利E Ⅳ	2
	加曽利E系	21
	小計	48
曽利系	曽利Ⅲ	4
	曽利Ⅲ～Ⅳ	6
	曽利Ⅳ～Ⅴ	1
	曽利系	23
	小計	34
唐草文系		7
唐草文系と加曽利E系の折衷		3
唐草文系－曽利系		2
中期後半		19
合計		113

曲尾遺跡の中心地域は、詳細分布調査等から、湧水地付近から北方に広がる平坦地と考えられ、第1地区はその平坦地の西南部、第2地区は南西側の南傾斜面、第3地区は平坦地の先端、北西急斜面で第1～3地区は、曲尾遺跡の中心地域の周縁部に当る。

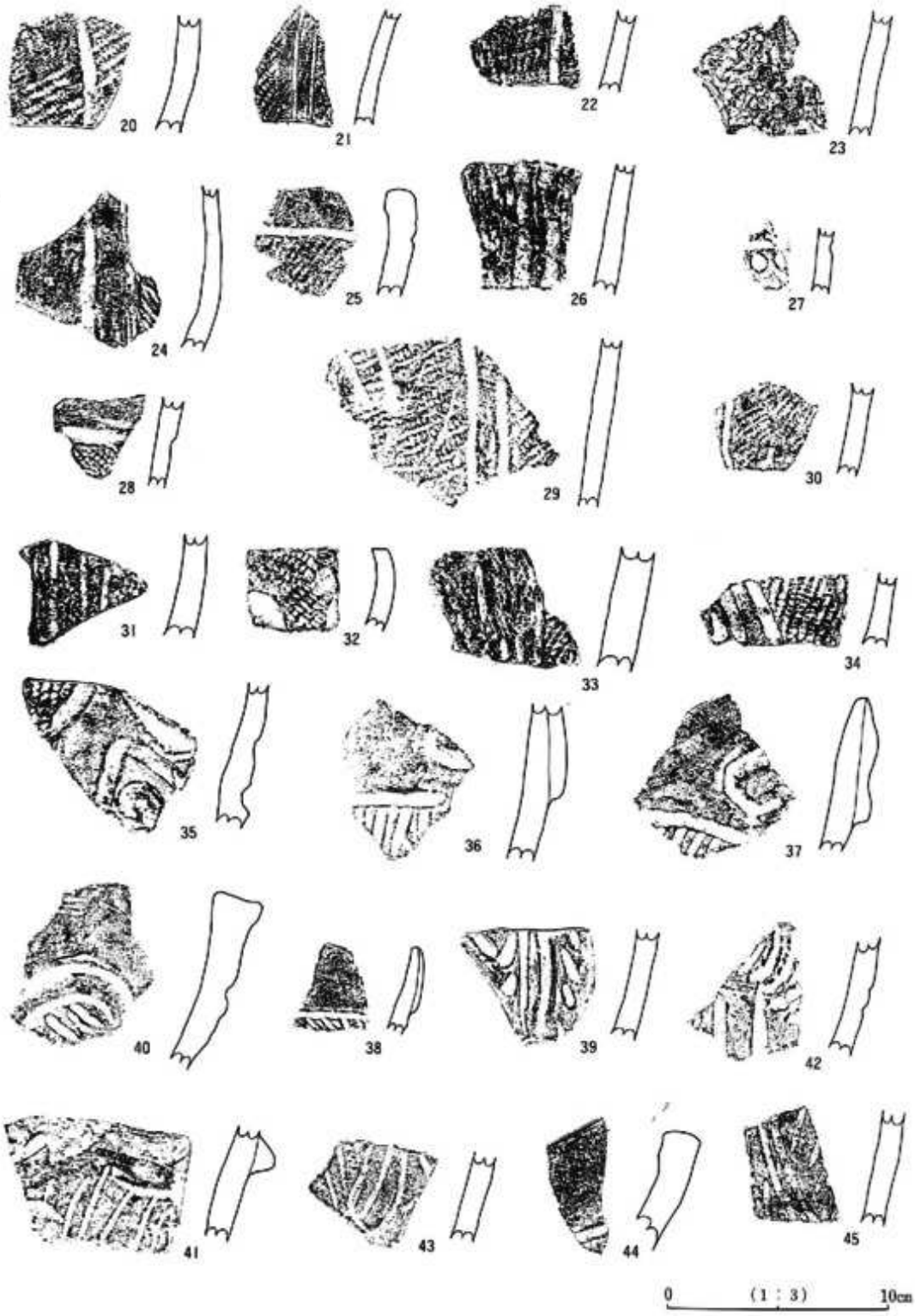
第4地区は中心地域と小さな沢一つ隔てた北方に存在する小高い山から続く南傾斜地であるので、本区出土土器は第1～3地区の中心地域からの流れ込み土器とは別の視点で取り扱わなければならない。

地区別の出土数は第1地区4点、第3地区300点、第4地区29点であり、第3地区出土土器がほとんどを占めている。

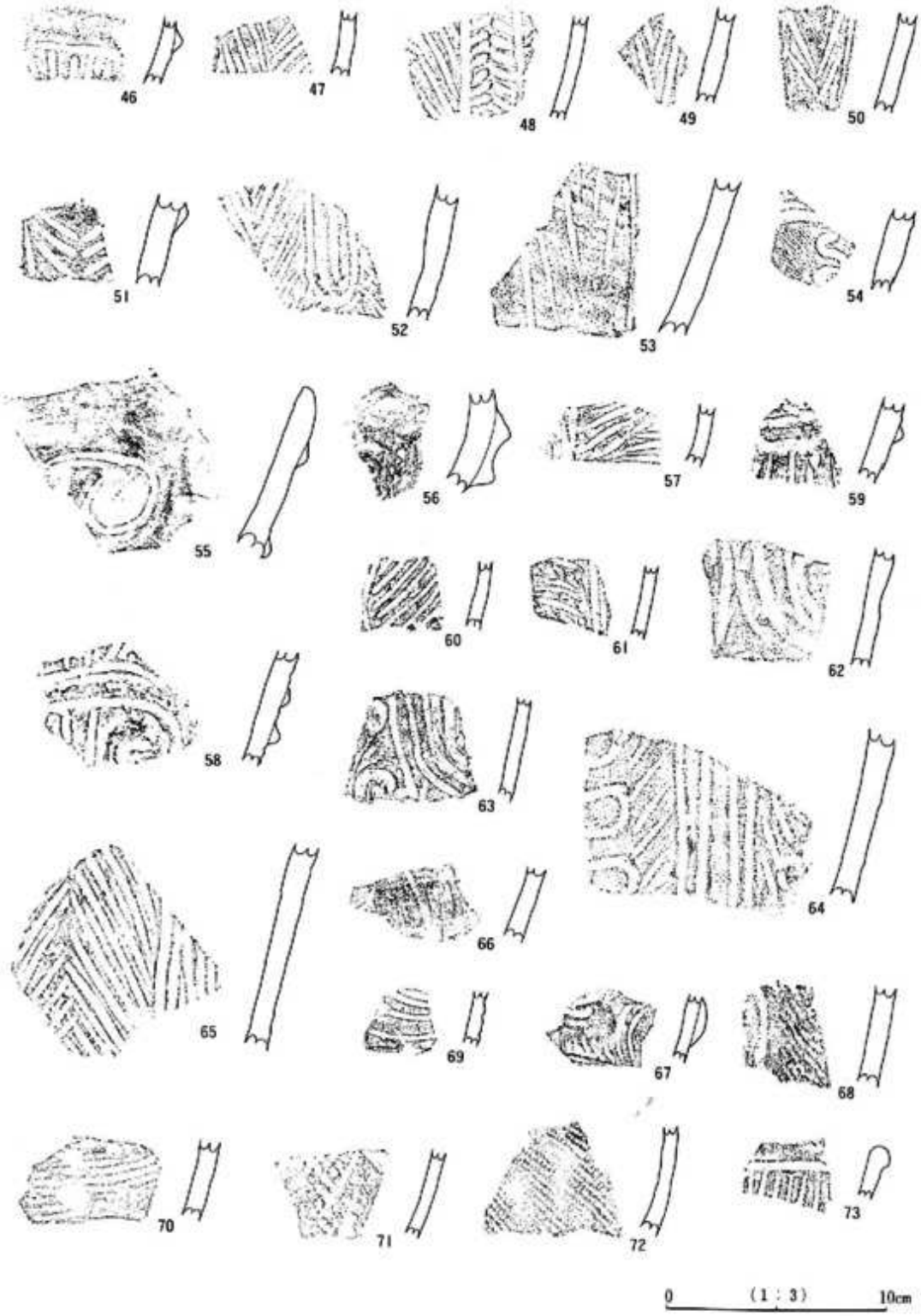
第4地区の29点のうち図示したのは3点（12－22～24）で、すべて中期後半の土器である。このことは、曲尾遺跡の中心地域である平坦地から小さな沢一つ隔てた緩傾斜地まで遺構存在の可能



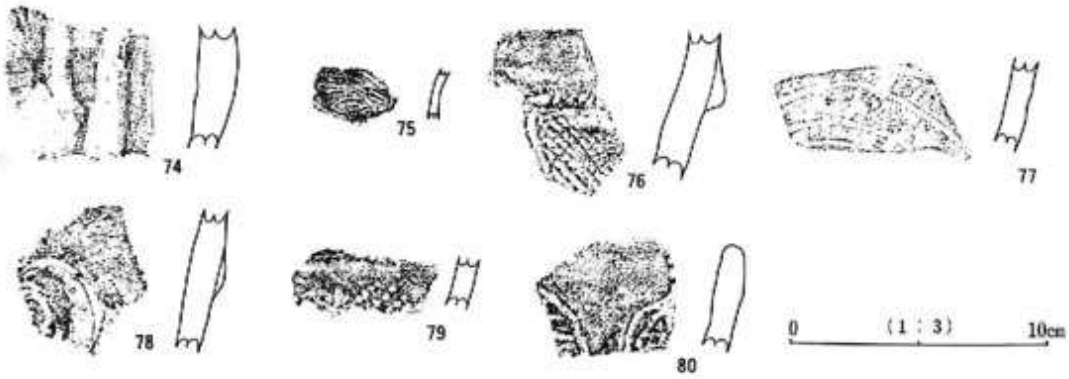
第７図　第３地区No土器拓影図〈１〉



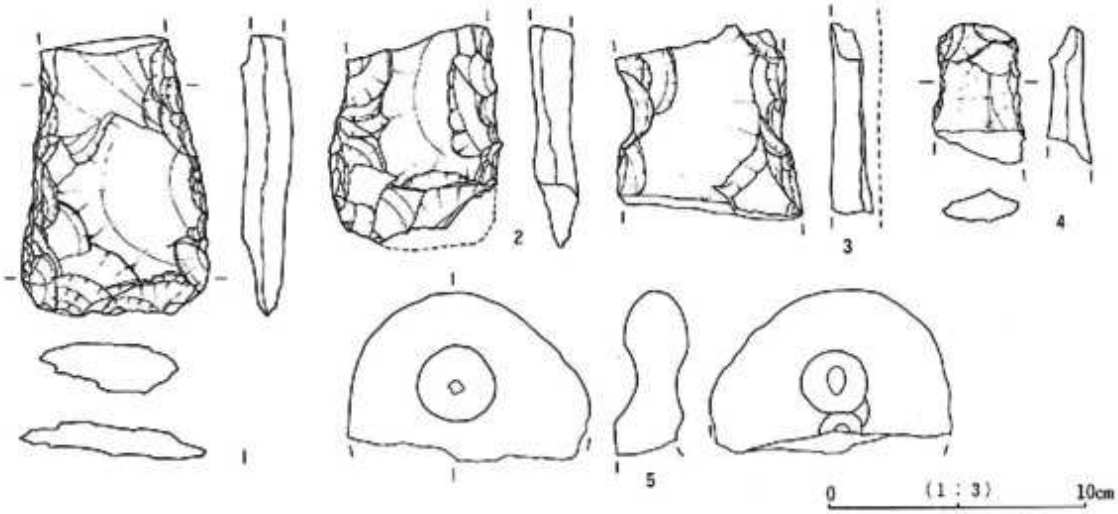
第8図　第3地区No土器拓影図〈2〉



第9図　第3地区No土器拓影図〈3〉



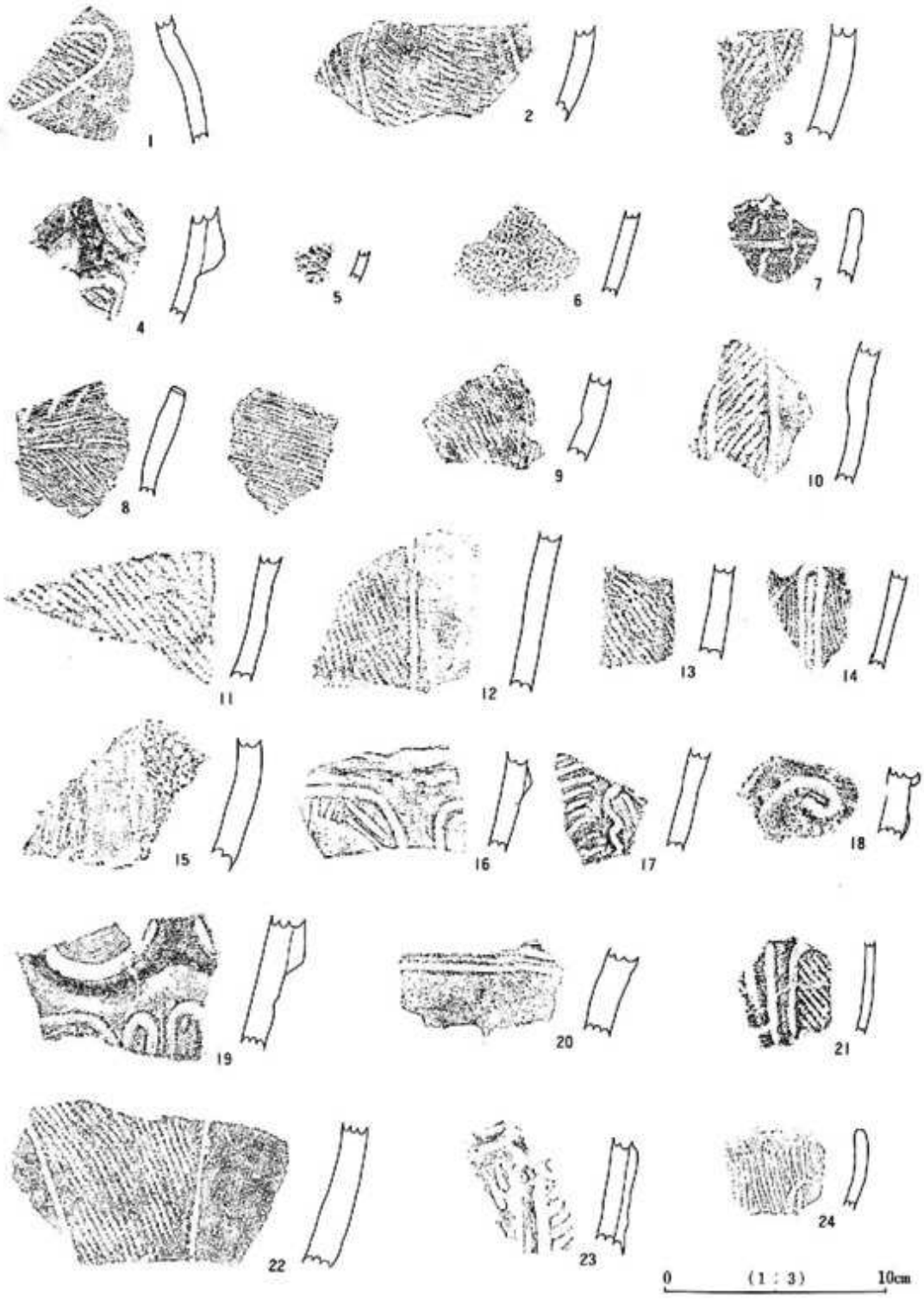
第10図　第3地区No土器拓影図〈4〉



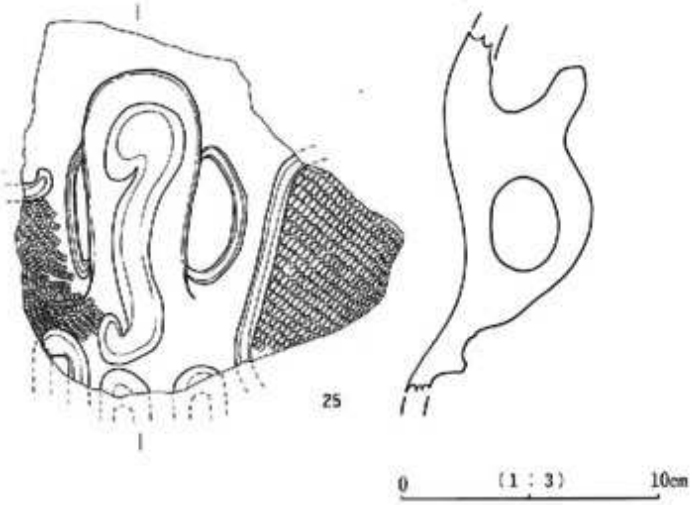
第11図　第3地区No石器実測図

第3表　第3地区No石器観察表

挿図番号	出土位置	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
11－1	No174	打製石斧	玄武岩	<10.8>	<7.2>	<1.8>	169.8	基端部欠	整形を呈すと思われる。刃部直刃、表裏面粗割面を残す。側縁・刃縁両面加工。右刃縁磨耗痕が観察できる。
11－2	No199	打製石斧	玄武岩	<8.5>	<6.4>	1.5	116.6	刃部・基端部欠	裏面自然面残し、表面粗割面残す。
11－3	No209	打製石斧	玄武岩	<7.3>	<7.1>	<1.6>	83.9	裏面・刃部基端部欠	着柄部抉り有す。
11－4	No118	打製石斧	玄武岩	<5.3>	<3.4>	<1.5>	25.6	刃部～基部中央欠	表裏面粗割面残す。
11－5	No 81	凹石	安山岩	<6.5>	<9.3>	<2.6>	212.3	半欠	扁平な川原石利用、表面φ3cm、深さ0.6cmの凹を1個残し、裏面φ2.5cm、深さ0.5cm、φ1.5cm、深さ0.4cmの凹を2個残す。



第12図　第1～4区表採土器拓影図



第13図　第2区表採土器実測図

性が判明し、遺跡規模の大きさを物語っている。

遺跡の中心地域周縁部である第1～3地区からは313点出土しており、図示したのは123点である。図示した土器の時期別内訳は早期前半4点（7－1、12－5～7）、早期後半2点（12－8・9）、早期末葉1点（7－2）、早期末～前期初頭1点（6－1）、中期後半113点、中期末1点（6－2）、中期～後期1点（12－21）[1]である。縄文時代早期の土器片が8点出土していることから、早期の遺構の存在も考えられよう。

中期後半の土器は、図示した土器の92%を占め、第4地区出土土器と考えあわせて、該期に曲尾遺跡の規模が最も大きかったと推察できる。第2表に示したようにこれらを加曽利E系、曽利系、唐草文系に分類してみると、加曽利E系48点で42.5%、曽利系34点で30.1%、唐草文系7点で6.2%となる。このことから、関東に分布圏をもつ加曽利E系土器がやや優勢であるが、八ヶ岳南麓に分布圏をもつ曽利系土器の影響もかなり関与している。また、少数ではあるが諏訪盆地、松本、伊那谷に分布圏をもつ唐草文系文化圏との交流があったことも確かである。

以上、本遺跡区出土土器から曲尾遺跡は縄文時代中期後半に規模的拡大が見られ、早期～前期初頭、後期、奈良・平安時代にも人々が生活した可能性がある。（高村）

註1　百瀬忠幸・近藤尚義両氏に鑑定していただいた。

2）石　　器（第11図、図版九）

本遺跡の第3地区から破損した打製石斧が9点出土し、そのうち4点を図示した。11－1は撥形を呈し、刃部直刃、11－2は刃部円刃と思われ、11－3は着柄部が明確に抉りを有しており、11－4は細身の打製石斧と思われる。石質はいずれも玄武岩で1・2は自然面を残している。11－5は石質安山岩の凹石で、残存部分では表面に1個、裏面に2個の凹を有している。

第4表　第3地区№土器拓影図観察表

拓図番号	器　種	部　位	文　　様	時　期	備　　考
7－1	深　鉢	胴　部	幾何学状の沈線文＋貝殻腹縁文	早期前半 貝殻沈線文系（田戸下～上層）	胎土に微量の植物繊維含む。その他石英や長石など鉱物質の粗粒多く含む。　№204
7－2	〃	〃	絡条体圧痕文を斜位にまばらに施文。内面に条痕をとどめる	早期末葉。絡条体圧痕文系土器の中でもやや新しい段階	胎土に植物繊維を含む。　№217
7－3	〃	口縁部	ＲＬ縄文。	中期後半 （加曽利ＥⅢ）	№209
7－4	〃	胴　部	縦位磨消縄文。ＲＬ単節縄文。	〃	№ 31
7－5	〃	頸～胴部	横位沈線をめぐらし、口縁部文様帯区画。縦位様成の磨消縄文。ＬＲＬ複節縄文。	〃	№ 38
7－6	〃	胴下部	縦位磨消縄文。原体はＲＬＲ複節縄文。	〃	№ 53
7－7	〃	胴　部	磨消縄文。縦位に区画する沈線は浅く不明瞭。ＲＬＲ複節縄文地文。	〃	№ 56
7－8	〃	〃	縦位構成の磨消縄文。ＬＲ単節縄文地文。	〃	№ 82
7－9	〃	〃	縦位沈線。ＲＬＲ複節縄文地文。	〃	№ 95
7－10	〃	〃	縦位沈線。ＲＬ単節縄文地文。	〃	№122
7－11	〃	口縁部	内湾する口縁下に１条の沈線をめぐらし、下部に沈線による渦巻文。渦巻内にＲＬ単節縄文充填。	〃	№132
7－12	〃	胴　部	磨消縄文手法による縦位モチーフ。縄文原体はＬＲ単節縄文	〃	№150
7－13	〃		縦位の磨消縄文。ＬＲ単節縄文地文。	〃	№183
7－14	〃	把　手		中期後半 （加曽利ＥⅢ～Ⅳ） 在地的土器	№173
7－15	〃	胴　部	隆起線を横位にめぐらす。曲線的な沈線区画による磨消縄文。空白部をＬＲ単節縄文で埋める。	中期後半 （加曽利ＥⅢ～Ⅳ）	№ 47
7－16	〃	〃	「U」字状、逆「U」字状の沈線文、同沈線文間にそれぞれＲＬ単節縄文充填。上下に文様帯が分離。空白部に蕨手状の沈線文。	〃	№ 91
7－17	〃	口縁下～胴部	（上部に）低い隆起線により楕円ないＬ渦巻状の文様。（胴部に）逆「U」字状の沈線文、区画内無文。区画外の器面にはＬＲ単節縄文施文。	〃	№ 97
7－18	〃	胴　部	縦位沈線。ＲＬ単節縄文（縦位回転施文）？。	〃	№155
7－19	〃	〃	縦位沈線。ＬＲ単節縄文地文。	中期後半 （加曽利Ｅ）	№ 7
8－20	〃	〃	縦位沈線。ＲＬ単節縄文地文。	〃	№ 45
8－21	〃	〃	２条の縦位沈線。沈線間を除く器面はＲＬ単節縄文縦位回転施文。	〃	№ 84
8－22	〃	〃	縦位沈線。ＲＬ単節縄文地文。	〃	№ 87
8－23	〃	〃	平行する２条の縦位沈線。	〃	№ 94
8－24	〃	〃	磨消縄文。Ｌ無節縄文。	〃	№108
8－25	〃	口縁部	口縁下に１条の沈線をめぐらす。以下、ＲＬ単節縄文施文。	〃	№116
8－26	〃	胴　部	２条の沈線を垂下。ＲＬ単節縄文地文。	〃	№127

8－27	深　鉢	胴　部	棒状工具により刺突。	中期後半 （加曽利E）	№144
8－28	〃	〃	磨消縄文。ＬＲ単節縄文。	〃	№146
8－29	〃	〃	縦位の平行沈線（沈線間無文）。胴部にはＲＬ単節縄文粗く施文。	〃	№194
8－30	〃	〃	縦位沈線。ＲＬ単節縄文。	〃	№208
8－31	〃	〃	多条の縦位沈線。沈線間無文。ＬＲ単節縄文地文。	中期後半 （加曽利E系）	№ 76
8－32	〃	口縁部	中広の肉彫り風沈線による曲線的（渦巻状）モチーフで口縁部文様を構成。器面にはＲＬ単節縄文施文。口縁下は横位に胴部は縦位にそれぞれ回転施文。	〃	№130
8－33	〃	胴　部	４条単位の沈線を垂下、ＲＬ単節縄文地文。	〃	№170
8－34	〃	〃	平行する多条の沈線による曲線的なモチーフ。ＲＬ単節縄文地文。	〃	№184
8－35	〃	〃	曲線的な沈線文、沈線区画内縄文充填（ＲＬ単節縄文）。蕨手状の沈線文。	〃	№229
8－36	〃	口縁部	口縁部渦巻文。短沈線地文。	中期後半 （曽利Ⅲ）	№ 20
8－37	〃	〃	口縁部渦巻文。短沈線地文。	〃	№192
8－38	〃	〃		〃 （曽利Ⅲ？）	№187
8－39	〃	胴　部	２条の縦位沈線。綾杉状の短沈線地文。	中期後半 （曽利Ⅲ～Ⅳ）	№ 27
8－40	〃	口縁 ～胴部	縦帯による楕円ないし渦巻文。短沈線充填。	〃	№106
8－41	〃	口縁下 ～胴部	縦帯による口縁部区画文。短沈線地文。	〃	№120
8－42	〃	胴　部	２条の縦位沈線。短沈線地文。	〃 （曽利Ⅲ～Ⅳ）唐草文系の可能性あり	№ 24
8－43	〃	〃	沈線による蛇行懸垂文。綾杉状の短沈線地文。	中期後半 （曽利）	№ 60
8－44	〃	口縁部	口縁下に無文帯を残す。下部に横位沈線。	〃	№ 78
8－45	〃	胴　部	２条単位の平行沈線。斜位の短沈線地文。	〃	№ 93
9－46	〃	〃	横位に縦帯をめぐらす（口縁部文様帯区画）。胴部短沈線地文。	〃	№103
9－47	〃	〃	綾杉状の短沈線地文。	〃	№115
9－48	〃	〃		〃	№131
9－49	〃	〃	綾杉状の短沈線地文。	〃	№134
9－50	〃	〃	縦位の沈線垂下。綾杉状の短沈線地文。	〃	№143
9－51	〃	〃	縦位沈線。綾杉状の短沈線地文。	〃	№182
9－52	〃	〃	「U」字状の沈線による懸垂文。綾杉状の短沈線地文。	〃	№193
9－53	〃	〃	縦位沈線。短沈線地文。	〃	№222
9－54	〃	〃	無節Ｌ撚りの縄文地文。蛇行懸垂文など沈線文を施す。	中期後半 （曽利？）	№ 35

9—55	深　鉢	口 縁 部	口縁下に横位に連帯する渦巻文。地文不明。	中期後半（曽利？）	No. 57
9—56	〃	胴　部	隆帯	〃	No.102
9—57	〃	〃	縦位沈線。鋸歯状の短沈線地文。	中期後半（唐草文系）	No. 54
9—58	〃	〃	渦巻状の隆帯文によるモチーフ。短沈線を地文。	〃	No.156
9—59	〃	〃	隆帯。短沈線地文。	〃	No.210
9—60	〃	〃	沈線文。平行する斜位の短沈線充填。	〃（唐草文系？）	No. 78
9—61	〃	〃	縦位沈線。短沈線地文。	〃	No.117
9—62	〃	〃	曲線的な沈線により文様を構成。一部にＬＲ単節縄文を充填。	中期後半（唐草文系と加曽利Ｅの折衷？）	No. 51
9—63	〃	〃	曲線状あるいは蕨手状の沈線。一部にＲＬ単節縄文充填。	〃	No.198
9—64	〃	〃	鋸歯状の短沈線地文として、４本単位の垂下する沈線と蛇行沈線。	中期後半（曽利—唐草文系？）	No.157
9—65	〃	〃	縦位沈線を垂下。鋸歯状の短沈線地文。	〃	No.160
9—66	〃	〃	沈線文。	中期後半	No. 37
9—67	〃	〃	渦巻状の隆帯。短沈線地文。	〃	No. 59
9—68	〃	〃	縦位沈線。無節Ｌ縄文地文。	〃	No. 70
9—69	〃	〃	曲線的な短沈線地文。	〃	No. 71
9—70	〃	〃	ＲＬ単節縄文。	〃	No.101
9—71	〃	〃	浅い凹線様沈線によるモチーフ。ＬＲ単節縄文地文。	〃	No.128
9—72	〃	〃	ＬＲ単節縄文（縦位回転施文）	〃	No.136
9—73	〃	口 縁 部		〃	No.137
10—74	両耳広口壺	把　手		〃	No.158
10—75	深　鉢	胴　部	曲線的な沈線文。ＬＲ単節縄文地文。	〃	No.175
10—76	〃	〃	隆帯。蛇行沈線。上部に無文帯を残す。Ｌ無節縄文地文。隆帯上へも縄文施文。	〃	No.185
10—77	〃	〃	多条の平行する曲線的な沈線。	〃	No.197
10—78	〃	〃	渦巻隆帯文。	〃	No.200
10—79	〃	〃	ＬＲ単節縄文を縦位に帯状施文。	〃	No.302
10—80	〃	口 縁 部		〃	No.304

これらの石器は遺構内出土の石器ではなく、曲尾遺跡中心地域から連なる急傾斜上に位置するため、上部平坦地からの流れ込みと考えられる。　（羽毛田伸）

第5表　第1～4地区　表採土器拓影図観察表

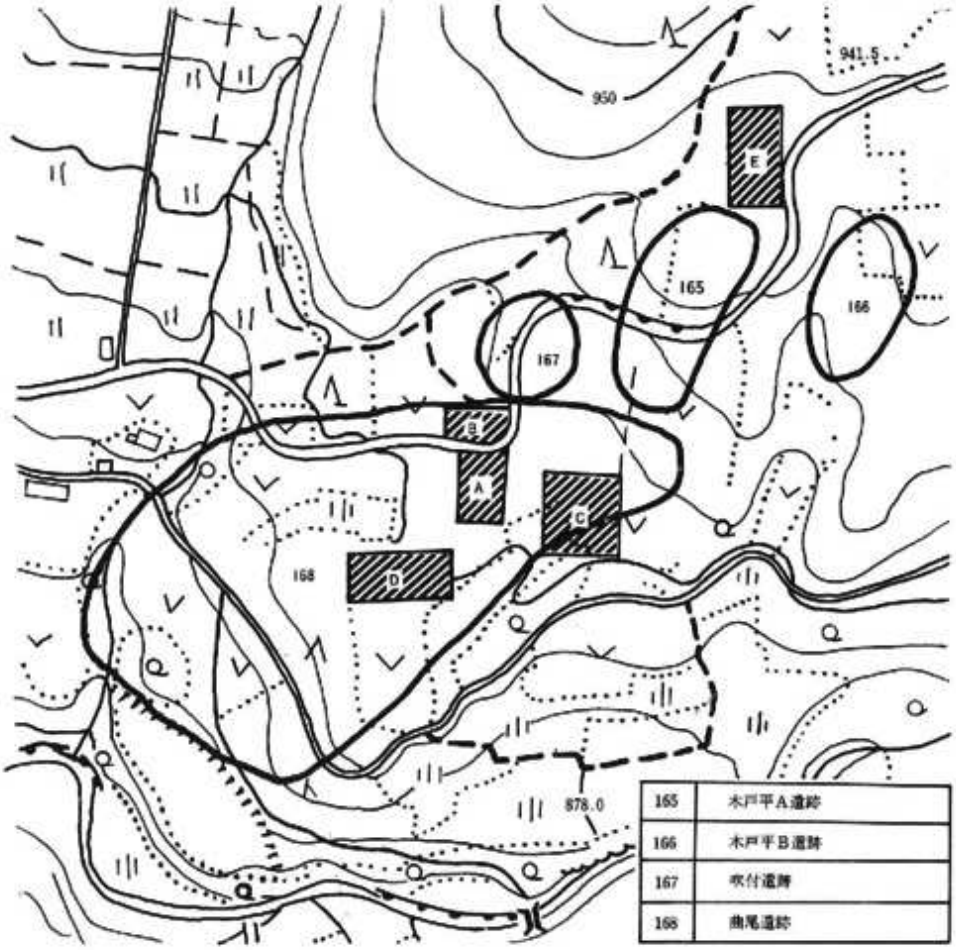
掲図番号	器種	部位	文様	時期	備考
12－1	深鉢	胴部	磨消縄文。沈線区画。RL単節縄文充填。	中期後半（加曽利EⅣ）	第1地区表採
12－2	〃	〃	磨消縄文。曲線的区画。LR単節縄文充填。	〃	第2地区表採
12－3	〃	〃	縦位沈線。RL単節縄文地文。	中期後半（加曽利E）	第2地区表採
12－4	〃	頸部	隆帯文。短沈線地文。	中期後半（曽利）	第2地区表採
12－5	〃	胴部？	楕円押型文（原体の大きさは不明）	早期前半（細久保）	胎土に、繊維を微量含む。長石、白い輝石の粒子含む。第3地区表採（№2）
12－6	〃	胴部	山形押型文。直交密接施文（原体の大きさについては不明）	早期前半（細久保）	胎土に長石、白い輝石を含む 第3地区表採（№12）
12－7	〃	口縁部	口縁部に植物茎による沈線を一条めぐらし、口縁～胴部にかけて、貝殻腹縁文を縦位にまばらに施文。口縁端部にも貝殻腹縁文施文。	早期前半 貝殻沈線文系（田戸上層？）	胎土に微量の植物繊維を含む。第3地区表採（№17）
12－8	〃	〃	外面、横位～斜位。内面、横位の条痕をとどめる。口縁端部にヘラ状工具による斜めのキザミ。	早期後半 貝殻条痕文系（茅山下層～上層）	胎土に植物繊維と粗砂を含む。第3地区表採（№14）
12－9	〃	胴部	外面に条痕。	〃	胎土に植物繊維若干量を含む。第3地区表採（№16）
12－10	〃	〃	磨消縄文。LR単節縄文。	中期後半（加曽利EⅢ）	第3地区表採（№3）
12－11	〃	〃	沈線。縦位懸垂文。RL単節縄文（横位回転）地文。	〃	第3地区表採（№9）
12－12	〃	〃	磨消縄文。LR単節縄文。	中期後半（加曽利EⅢ～Ⅳ）	第3地区表採（№1）
12－13	〃	〃	浅い凹線。無節R縄文地文。	中期後半（加曽利E系）	第3地区表採（№10）
12－14	〃	〃	逆「U」字状の懸垂文。4～5本単位の条線を地文とする。	中期後半（曽利）	第3地区表採（№15）
12－15	〃	〃	中広の隆起帯により文様を描く。RL単節縄文地文。	中期後半（曽利系？）	第3地区表採（№4）
12－16	〃	〃	頸部、横帯する隆帯区画、胴部、逆「U」字状の区画。綾杉状の短沈線地文。	中期後半（曽利？）	第3地区表採（№11）
12－17	〃	〃	沈線による蛇行懸垂文。横状の短沈線を地文とする。	中期後半（唐草文系）	第3地区表採（№8）
12－18	〃	〃	隆帯による渦巻文。	中期後半（唐草文系？）	第3地区表採（№7）
12－19	〃	頸～胴部	隆帯と沈線、蕨手状沈線文由、隆帯による渦巻文。	中期後半（唐草文と加曽利Eの折衷？）	第3地区表採（№5 or 6）
12－20				中期後半	第3地区表採（№13）
12－21	深鉢	胴部	磨消縄文。LR単節縄文？	中期～後期	第3地区表採（№18）
12－22	〃	〃	磨消縄文。RL単節縄文充填。	中期後半（加曽利EⅢ～Ⅳ）	第4地区表採
12－23	〃	〃	短沈線地文。隆帯によりモチーフを描く。	中期後半（唐草文系）	第4地区表採
12－24	〃	口縁部	条線様の細い短沈線を地文。曲線的な沈線文。	中期後半（唐草文系？）	第4地区表採
13－25	両耳広口壺		蕨手文。磨消縄文。原体RL縄文。	中期後半（加曽利EⅢ）	第2地区表採

第IV章　曲尾・木戸平A遺跡既出資料

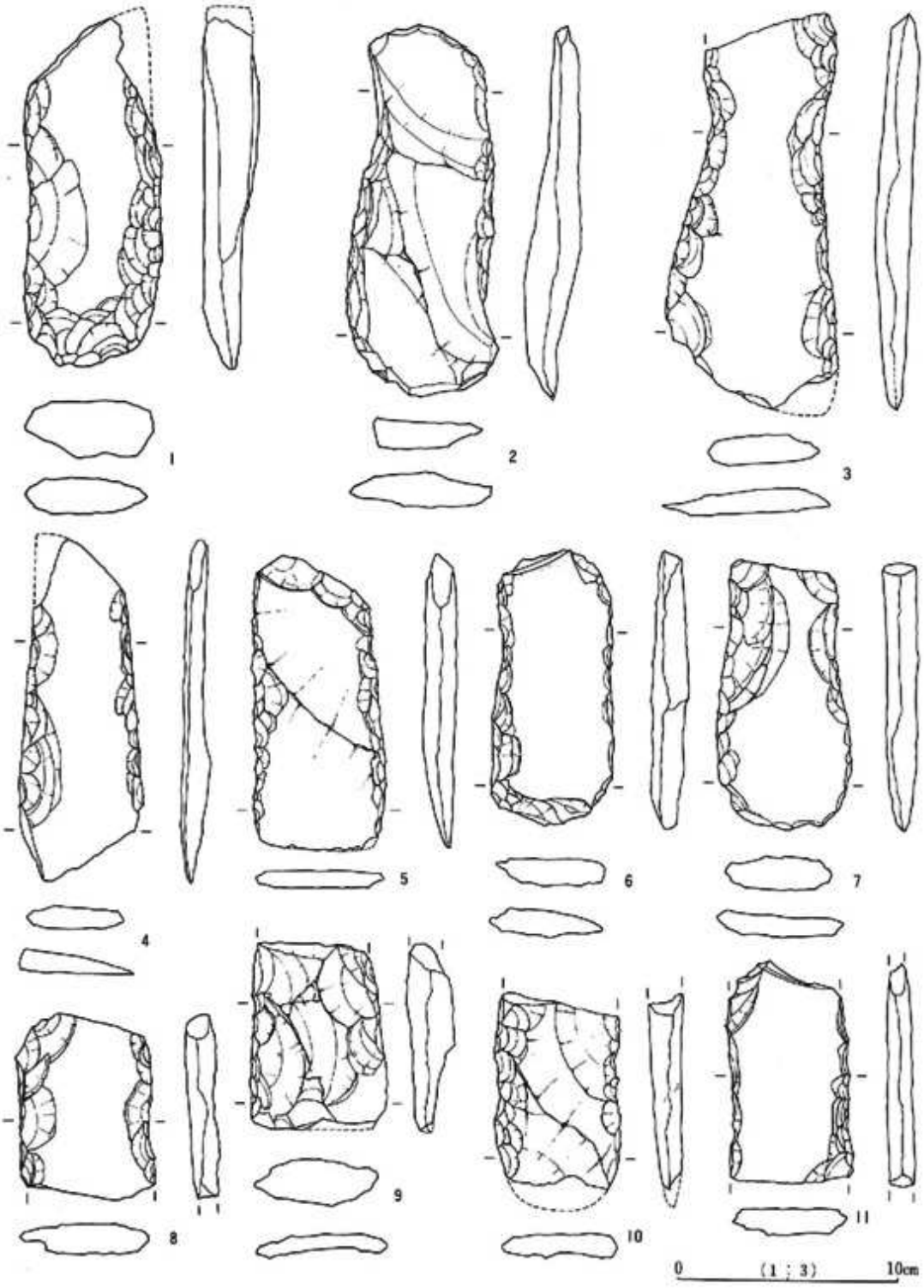
曲尾遺跡は背後に山岳を擁し、山脚上の緩斜面をもった小平坦面が形成され、香坂川に流れ込む先端、洪積台地上に位置する。台地上の中央付近から泉が湧きでており、以前から縄文時代中期後半から後期前半にかけての遺物が多く表採されており、筆者が表採した既出資料を、表採地点の解るものにはA・B・C・D・E地区として図示したものである。

A地点からは扁平な溶結凝灰岩、鉄平石が畑より幾枚も出土しており、畑の縁に積まれていることから、西片ヶ上遺跡で検出された、敷石住居址が検出される可能性が非常に高い場所である。

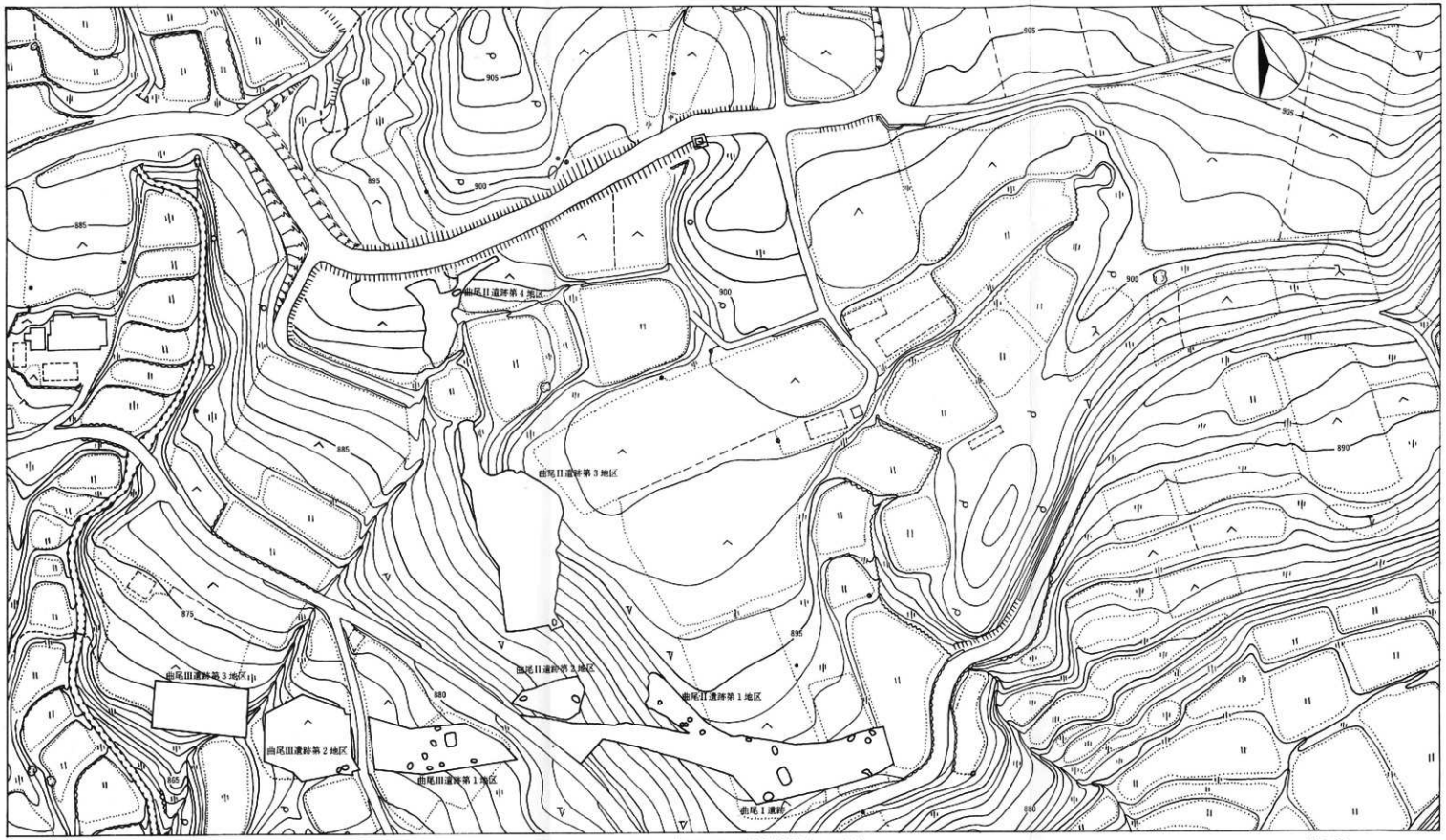
D地点からは表採において、土器片よりも石器、剥片が多く表採されるところであり、また、A地区西側は石器・剥片より土器片が多く表採される場所である。以上は表面上の特徴である。



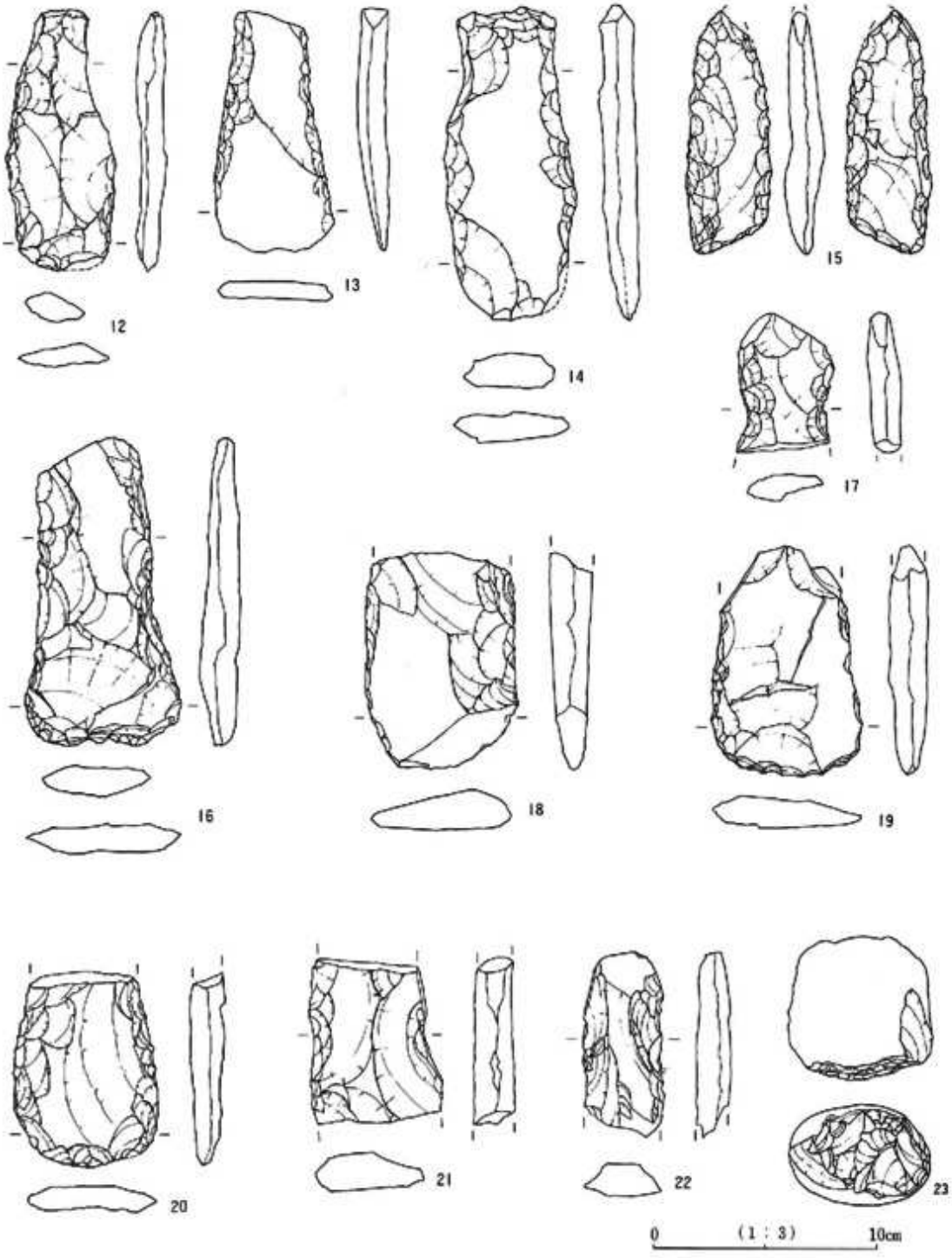
第14図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器表採地域図



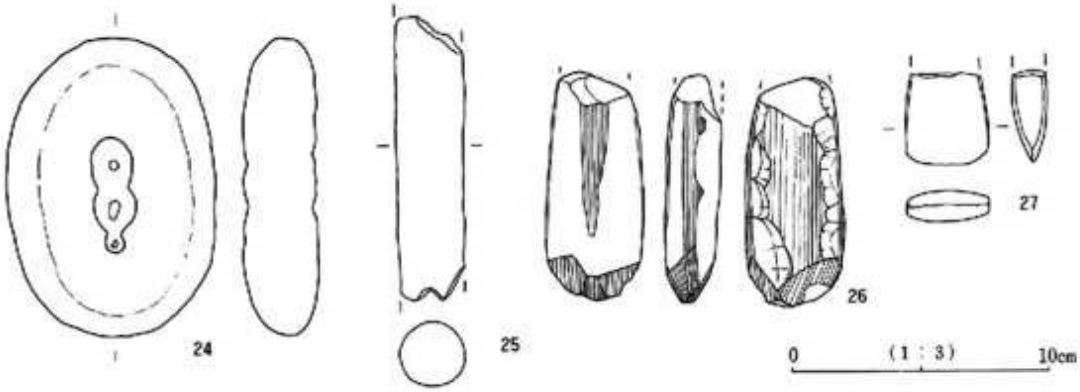
第15図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈1〉



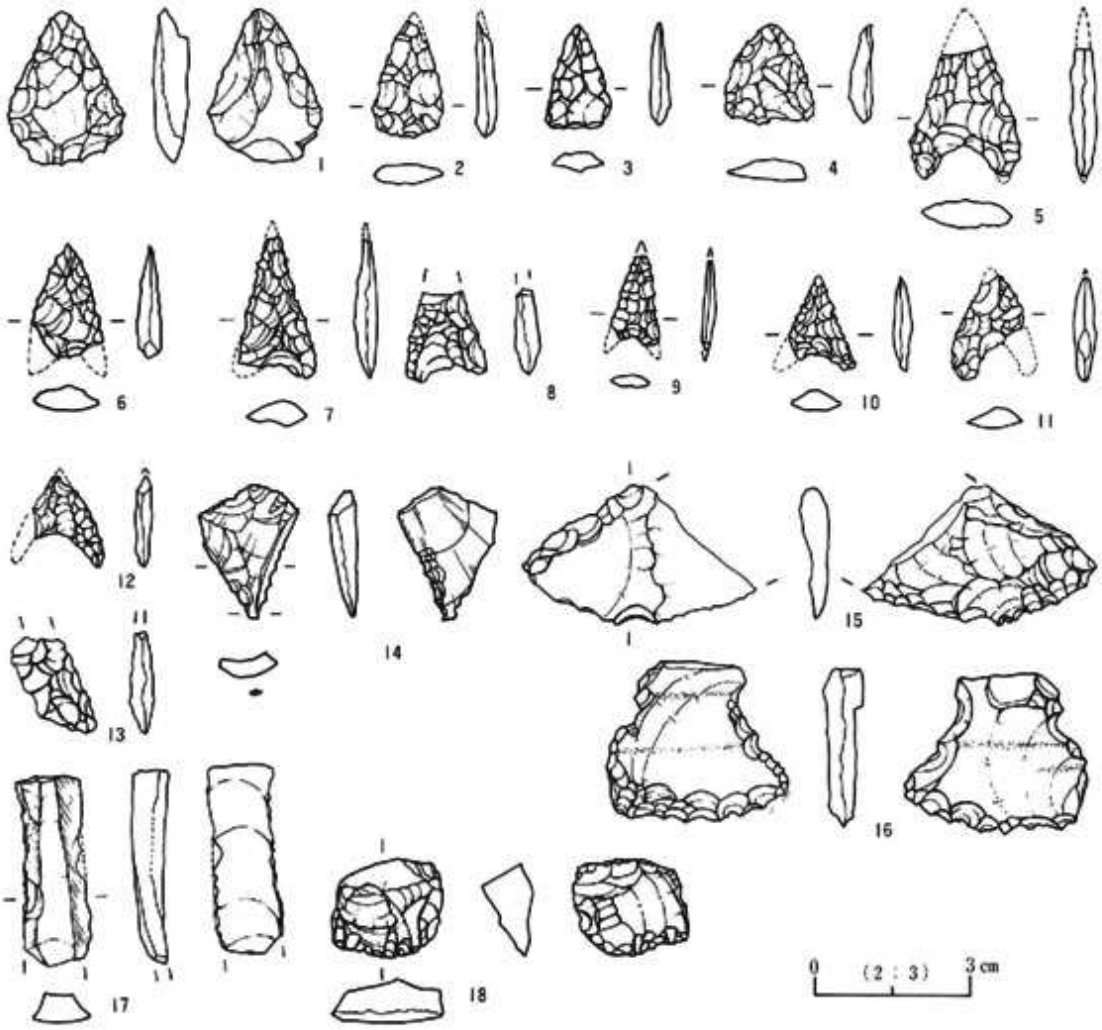
第19図　曲尾I・II・III遺跡全体図（1：1,000）



第16図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈2〉



第17図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈3〉



第18図　曲尾・木戸平A遺跡既出石器実測図〈4〉

第6表　曲尾・木戸平A遺跡既出石器観察表＜1＞

挿図番号	遺跡（地区）	器種	石質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	欠損状態	備考
15－1	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	<15.8>	6.0	2.5	< 304.1>	基端部僅欠	短冊形を呈し、刃部円刃、表裏面自然面を残す。側縁・刃部両面加工。刃面に縦位の線条痕、刃縁磨耗痕残る。刃面有機質付着。
15－2	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	<16.6>	6.4	2.3	< 253.0>	略完形	短冊形を呈し、刃部偏刃、表面粗割面残し、裏面自然面残す。側縁・刃部両面加工。刃面僅かに使用痕残る。
15－3	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	<17.8>	7.7	1.5	< 276.9>	刃部僅欠	短冊形を呈し、刃部偏刃、表裏面自然面を残し、着柄部抉りを有し、敲打痕が残る。刃面全体に縦位の線条痕、刃縁磨耗痕残る。刃面炭付着。
15－4	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	15.5	5.4	1.2	112.0	略完形	短冊形を呈し、刃部偏刃、表面自然面残し、裏面粗割面残す。側縁両面加工。刃縁刃毀れが観察できる。
15－5	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	13.3	5.7	1.5	151.3	完形	短冊形を呈し、刃部直刃、表面粗割面残し、裏面自然面残す。側縁・刃部両面加工。基部中央磨耗が僅かに観察できる。
15－6	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	12.6	5.4	1.7	135.2	略完形	短冊形を呈し、刃部円刃、表裏面自然面を残す。側縁・刃部両面加工。着柄部右側縁僅かに敲打痕残る。刃面に縦位の線条痕、刃縁に磨耗、刃毀れが観察できる。
15－7	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	11.7	5.9	1.4	152.4	完形	短冊形を呈し、刃部円刃、表面自然面残し、裏面粗割面残す。側縁・刃部両面加工。着柄部僅かに抉り有す。刃面から基部縦位の線条痕、刃縁刃毀れ磨耗痕が観察できる。
15－8	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	< 8.3>	< 6.0>	< 1.3>	< 110.5>	基部中央～刃部欠	短冊形と思われる。表面自然面残し、裏面粗割面残す。側縁両面加工。
15－9	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	< 8.5>	< 6.1>	< 2.1>	< 107.0>	基端部欠	短冊形を呈し、刃部直刃、表裏面粗割面残す。側縁・刃部両面加工。刃面に縦位の線条痕、刃毀れ、刃縁～右側縁磨耗が観察できる。
15－10	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	< 8.9>	< 5.6>	< 1.4>	< 113.6>	基端部 刃部欠	短冊形と思われる。刃部円刃と思われ、表裏面粗割面残す。側縁両面加工。側縁下部から刃縁にかけ磨耗著しい。
15－11	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	<10.1>	< 5.6>	< 1.2>	< 97.7>	基端部 刃部欠	短冊形と思われる。表面自然面残し、裏面粗割面残す。側縁両面加工。基部中央に縦位の線条痕残る。
16－12	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	11.5	4.8	1.2	72.8	刃部僅欠	撥形を呈し、刃部円刃、表裏面粗割面残す。側縁・刃部両面加工。
16－13	曲尾 D地区	打製石斧	玄武岩	10.8	6.2	1.2	86.6	完形	撥形を呈し、刃部円刃、表裏面自然面残す。側縁両面加工。刃面～基部中央縦位の線条痕が観察でき、刃縁磨耗著しい。
16－14	曲尾 C地区	打製石斧	玄武岩	14.1	5.7	1.6	169.2	完形	短冊形を呈し、刃部円刃。表裏面自然面残す。着柄部抉りを有す。基端部・側縁・刃部両面加工。左側縁～刃縁にかけ磨耗痕が観察できる。
16－15	木戸平A E地区	打製石斧	硬質砂岩	<10.8>	3.6	1.5	< 58.9>	略完形	表裏面粗割面を残し、側縁、刃縁、基端部両面加工。周縁に部分的に押圧剥離が認められ、他の器種とも考えられる。
16－16	曲尾	打製石斧	玄武岩	13.7	6.9	1.7	169.5	完形	撥形を呈し、刃部直刃。表裏面粗割面残し、側縁、刃部両面加工。
16－17	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 6.2>	< 4.2>	< 1.4>	< 43.8>	着柄部 基端部残存	着柄部抉りを有す。
16－18	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 9.7>	< 6.6>	< 1.9>	< 181.4>	基部半欠	刃部円刃、表面自然面残し、裏面粗割面残す。刃部片面加工。側縁両面加工。刃部僅かに刃毀れ観察できる。
16－19	曲尾	打製石斧	玄武岩	<10.1>	6.7	1.6	< 140.0>	基部半欠	刃部円刃、表裏面粗割面残し、側縁・刃縁両面加工。基部に縦位と横位の線条痕残す。
16－20	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 8.5>	< 6.4>	< 1.4>	< 117.1>	基部半欠	刃部円刃、表裏面粗割面残し、側縁・刃部両面加工。刃面に縦位の線条痕、右側縁～右刃縁に磨耗痕が観察できる。
16－21	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 7.4>	< 5.7>	1.8	< 123.6>	着柄部残存	着柄部抉りを有す。
16－22	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 8.2>	< 3.5>	< 1.5>	< 62.8>	刃部欠	表裏面粗割面を残し、側縁半両面加工。
16－23	曲尾	敲石	玄武岩	6.4	6.4	4.5	240.0		

第7表　曲尾・木戸平A遺跡既出石器観察表＜2＞

掲図番号	遺跡（地区）	器種	石質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	欠損状態	備考
17−24	曲尾 D地区	凹石	安山石	11.6	8.1	2.9	418.3		扁平な川原石、表面に3個の凹状を有し、裏面に2個の凹状を有す。
17−25	曲尾 C地区	石棒	緑泥片石	<11.0>	φ2.6	φ2.6	< 140.5>		断面φ2.5〜2.6cmの円柱状を呈し、全面研磨が施されている。
17−26	曲尾 D地区	石剣 未成品？	緑泥片石	< 8.9>	< 3.8>	< 2.0>	< 109 >		製作途中において欠損したと思われる。部分的に研磨されている。
17−27	曲尾 A地区	磨製石斧	硬質砂岩	< 3.5>	< 3.3>	< 1.3>	< 27.8>	刃部残存	定角式磨製石斧。
18−1	曲尾	打製石鏃	チャート	2.9	2.2	0.65	4.1		円基鏃、未成品の可能性有り。
18−2	曲尾 B地区	打製石鏃	黒曜石	< 2.3>	1.3	0.4	< 1.0>	先端部欠	円基鏃。
18−3	曲尾	打製石鏃	玄武岩	2.0	1.2	0.35	0.8	完形	平基無茎鏃。
18−4	曲尾	打製石鏃	黒曜石	1.9	1.7	0.4	1.2	完形	平基無茎鏃。
18−5	曲尾 C地区	打製石鏃	玄武岩	< 2.5>	2.1	0.5	< 2.4>	先端欠	比較的大型の凹基無茎鏃、抉りやや深く、逆刺やや鋭い。
18−6	曲尾	打製石鏃	黒曜石	< 2.2>	< 1.3>	0.5	< 1.0>	両逆刺欠	凹基有茎鏃。
18−7	曲尾	打製石鏃	黒曜石	< 2.7>	< 1.4>	0.4	< 1.1>	先端・左逆刺僅欠	凹基有茎鏃、抉り浅く、逆刺鈍い。
18−8	曲尾	打製石鏃	黒曜石	< 1.7>	1.5	< 0.5>	< 1.0>	先端欠	凹基無茎鏃、逆刺やや鈍く、円形を呈す。
18−9	曲尾	打製石鏃	チャート	< 1.6>	0.9	0.2	< 0.3>	先端・両逆刺僅欠	凹基無茎鏃。
18−10	曲尾	打製石鏃	チャート	1.8	1.2	0.4	0.5	左逆刺欠	凹基無茎鏃。
18−11	曲尾 A地区	打製石鏃	黒曜石	< 2.0>	< 1.2>	< 0.4>	< 0.7>	先端・右逆刺欠	凹基無茎鏃。抉りやや深く、逆刺やや鈍く、円形を呈す
18−12	曲尾	打製石鏃	黒曜石	< 1.8>	< 1.2>	< 0.3>	< 0.4>	先端・左逆刺欠	凹基無茎鏃。抉り深く、逆刺鋭い。
18−13	曲尾	打製石鏃	黒曜石	< 1.9>	< 1.2>	< 0.5>	< 0.9>	先端・左側辺欠	凹基無茎鏃。
18−14	曲尾	石錐	チャート	2.1	1.9	0.5	1.7		不定形な剥片に錐部を造り出す。
18−15	曲尾	石匙？	玄武岩	< 4.5>	< 2.7>	< 0.5>	< 5.5>		刃縁片面加工。
18−16	曲尾 B地区	石匙	黒曜石	3.4	3.0	0.75	6.8	略完形	つまみ部を有し、刃部両面加工。
18−17	曲尾	剥片石器	黒曜石	3.6	1.3	0.7	3.5		縦長剥片を用い、削器として使用した可能性有り。
18−18	曲尾	剥片石器	黒曜石	1.9	2.0	1.0	3.1		刃部押圧剥離が施され、掻器として使用した可能性有り

打製石器について（第15〜17図、図版九・十）

22点図示した。打製石斧の器形は従来の3形態を基に分類するならば、16−12・13・16の撥形を呈する石斧以外は短冊形を呈している。ここで限られた資料ではあるが、15−1〜4と15−5〜7と16−12・13の3つにグルーピングができる。

15−1〜4は長さ15cm以上、刃部偏刃であり、1〜3の刃面には縦位の線条痕が走っているが、4は刃部割りぱなしてある。……A類

15−5〜7は長さ12〜15cmであり、刃部6・7は円刃であり、5は割りぱなしてある。これらの石斧は概ね、側縁は左右対称であり、表裏面に縦位の線条痕が走る。……B類

16−12・13は長さ12cm以下で、幅が狭い、刃部円刃でいずれも撥形を呈している。……C類

以上の３分類を他の打製石斧に用いるとＢ類には他に15－８～11、18～21を含め計11点、Ｃ類には他に16－22を含め計３点、他にいずれの分類にも属さない16－14～17の計４点がある。15については表採された場所が木戸平Ａであり、石質が硬質砂岩で、部分的に押圧剥離の跡が観察できることから、打製石斧でない可能性もある。これら３タイプに分類できることは、打製石斧の機能分化が行われた結果生ずるものと考えられる。

石材と調整加工については、石材は俗称「渦巻石」（本遺跡周辺で入手が容易）と呼ばれる、薄く剥げる性質を有す荒船玄武岩で、自然面を残す表裏面には酸化鉄の付着が観察でき、これは石の目に水が浸透していった結果生じたものと思われ、この目にそって石を剥いだかは判明できず、自然面としてここではとらえた。このように自然面を残し、側縁と刃部に両面加工が施されている石斧は15－１～８・11、16－13・14と計11点と多く、本遺跡石斧調製加工の特徴といえよう。また、粗割面を表裏面に残し、側縁と刃部に両面加工が施されている石斧は15－９、16－12・16・19・20・22と計６点表採された。

16－23は敲石で、使用面には打痕が観察されず、剥離痕のみであることから、柔かいものに対しての敲打がなされたと考えられるが、用途等今後の問題にしたい。

17－24はＤ地区表採の凹石で川原石を使用、17－25はＣ地区表採で石棒の破片と考えられ、石質緑泥片岩で小形であることから縄文時代後期の石棒の可能性がある。17－26はＤ地区表採、石質緑泥片岩で石剣の製作途中の破損と考えられる。17－27は石質硬質砂岩の定角式磨製石斧で、Ａ地区、敷石住居址に使用されたと思われる扁平な石が掘り出されている所よりの表採。

石鏃について（第18図、図版十一）

13点図示した。円基鏃が18－１・２、平基鏃が18－３・４、凹基無茎鏃が18－５～13と表採され、有茎鏃は表採されなかった。数少ない点数であるが、縄文時代中期～後期の特徴を有している、抉りが比較的深いハート形を呈す18－11・12が表採されている。黒曜石による石鏃は18－２・４・６～８・11～13の計８点、チャートによる石鏃は18－１・９・10の計３点、玄武岩による石鏃は18－３・５の計２点表採されており、石質においてはバラエティーに富んでいる。

18－14は剥片利用の石錐で石質はチャートである。18－15は欠損部分が多いが、形状・調整方法から石匙の可能性がある。18－16は横型の石匙であり、摘部が造り出されているが、粗製品の観が否めない。18－17・18はいずれも黒曜石の剥片を利用した剥片石器であり、削器・掻器として利用したと考えられる。

以上、曲尾遺跡の表採石器を中心に述べてきたが、特に打製石斧の点数が多いことは、汎日本的な流れとも一致している。

（羽毛田伸）

1 曲尾Ⅱ遺跡遠景（西方より）

2 第1地区全景（北方より）

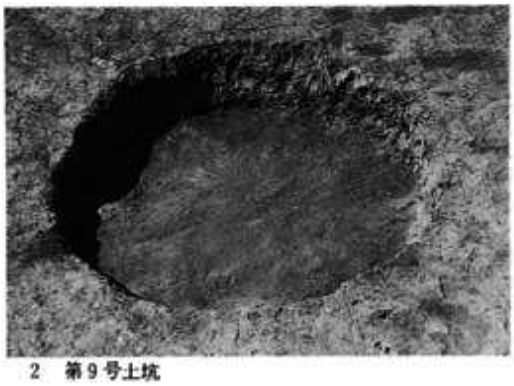
1　第２地区全景（西方より）

2　第３地区全景（西方より）

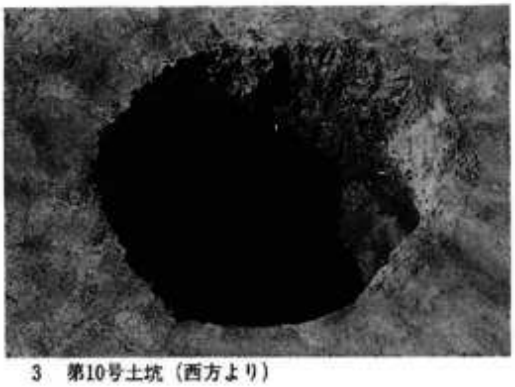
1 第3地区近景（西方より）

2 第4地区全景（南方より）

1 第10～12号土坑（西方より）



2 第9号土坑

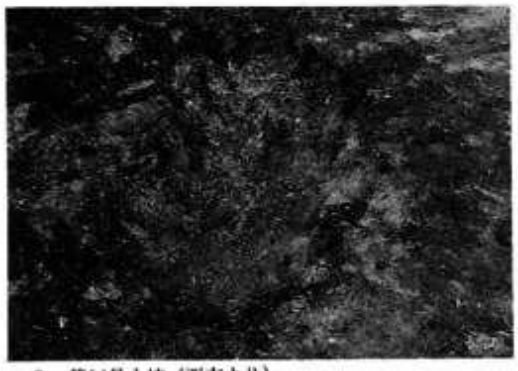


3 第10号土坑（西方より）

4 第11・12号土坑（東方より）

5 第13号土坑（南東より）

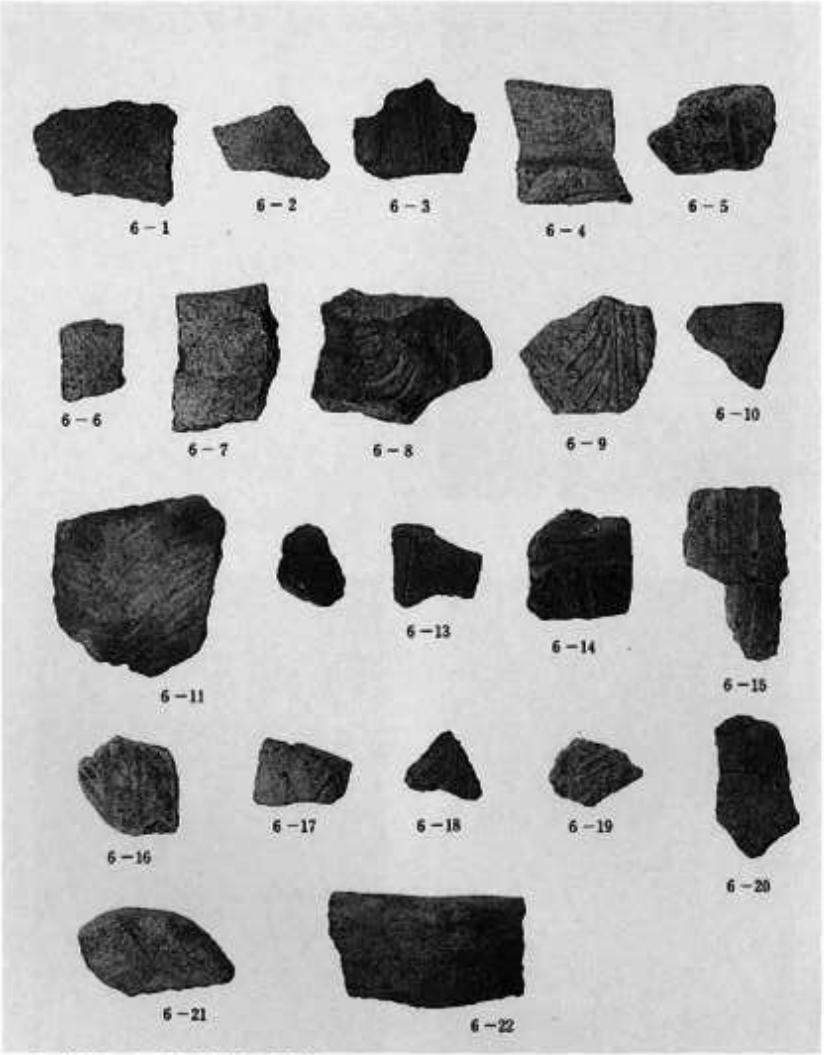
1　第15号土坑（西方より）



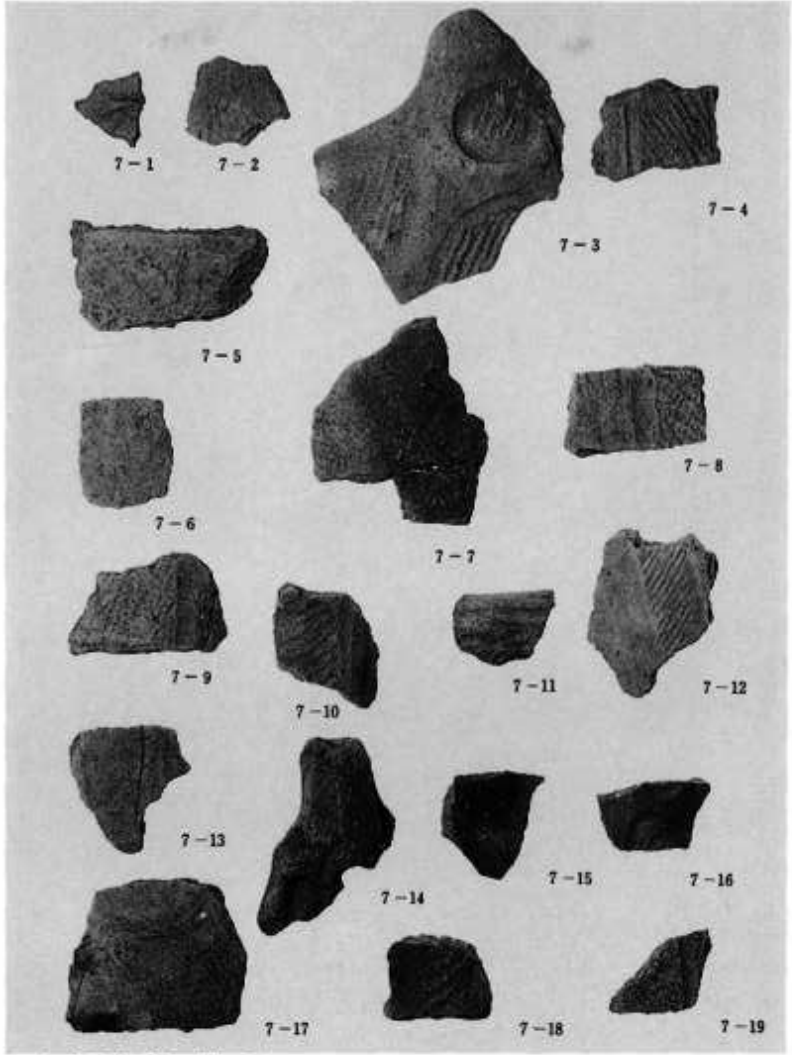
2　第14号土坑（西方より）

3　第16号土坑（西方より）

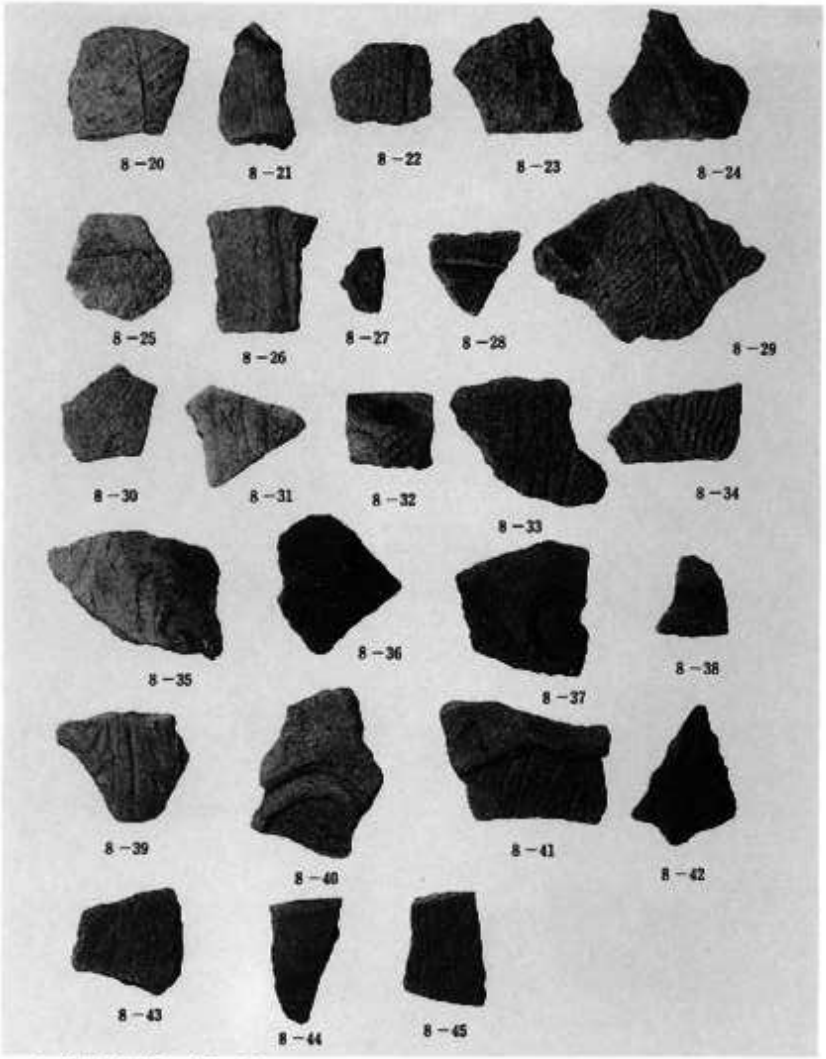
4　第17号土坑（北方より）



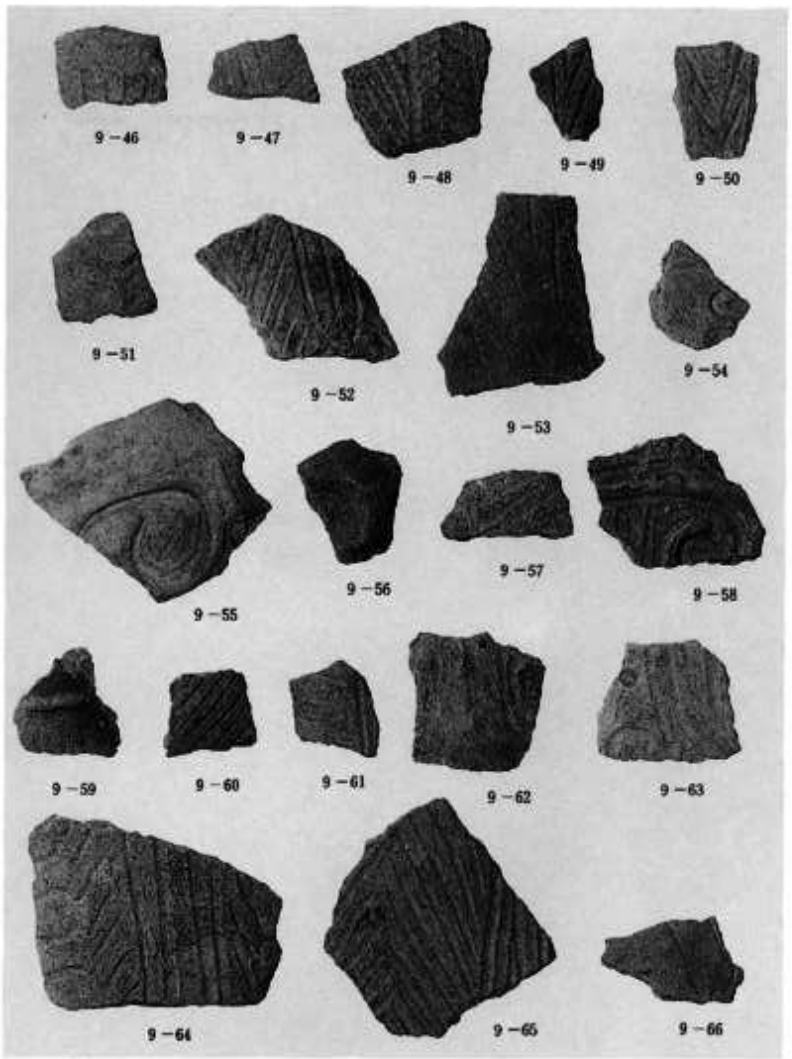
1　第13・14・16号土坑出土土器



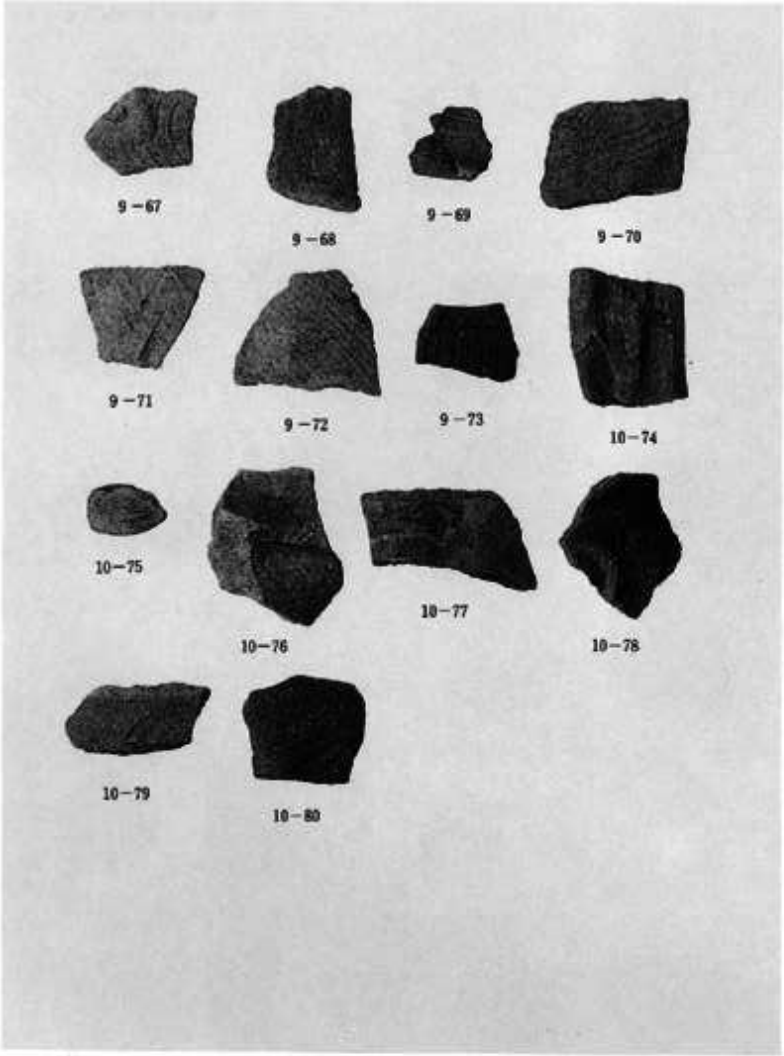
2　第3地区Ｎｏ土器〈1〉



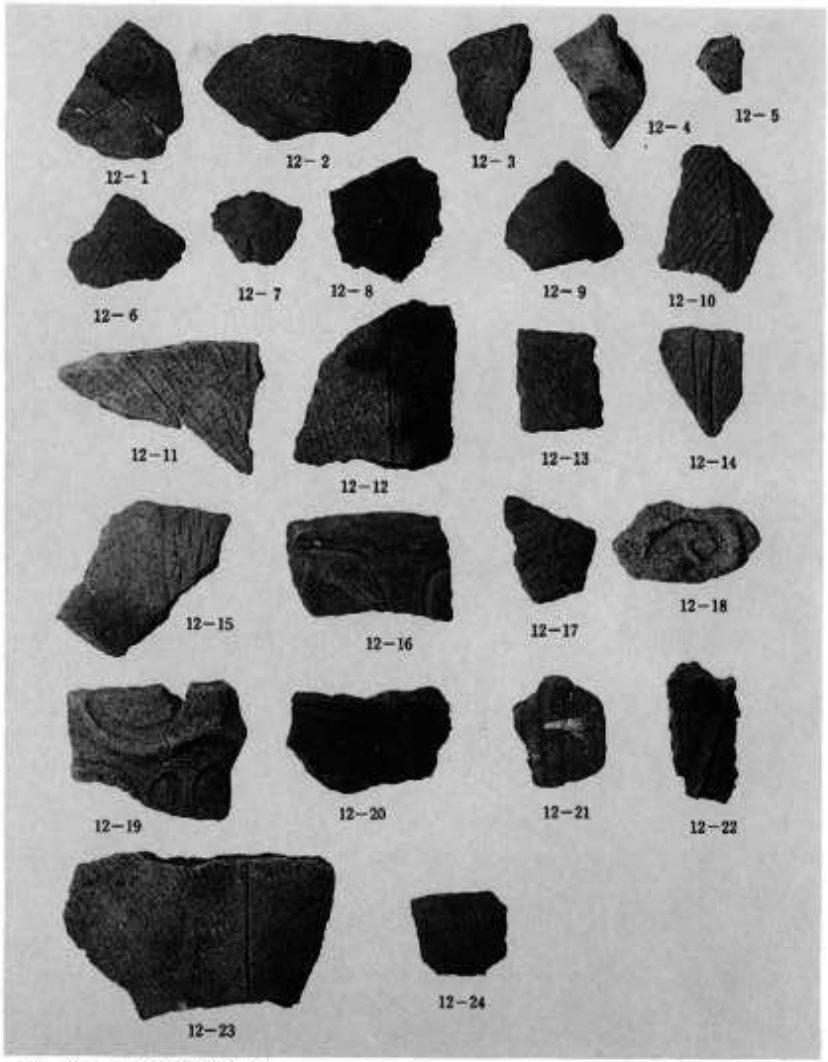
1　第3地区Noエ器（2）



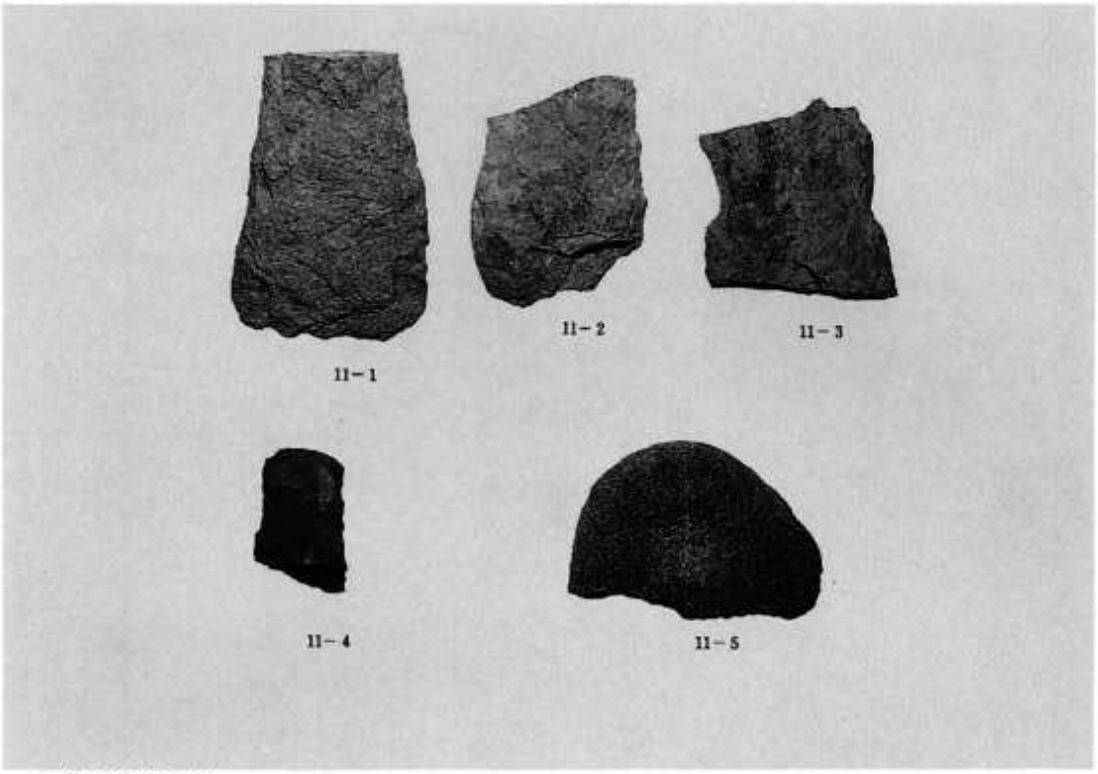
2　第3地区Noエ器（3）



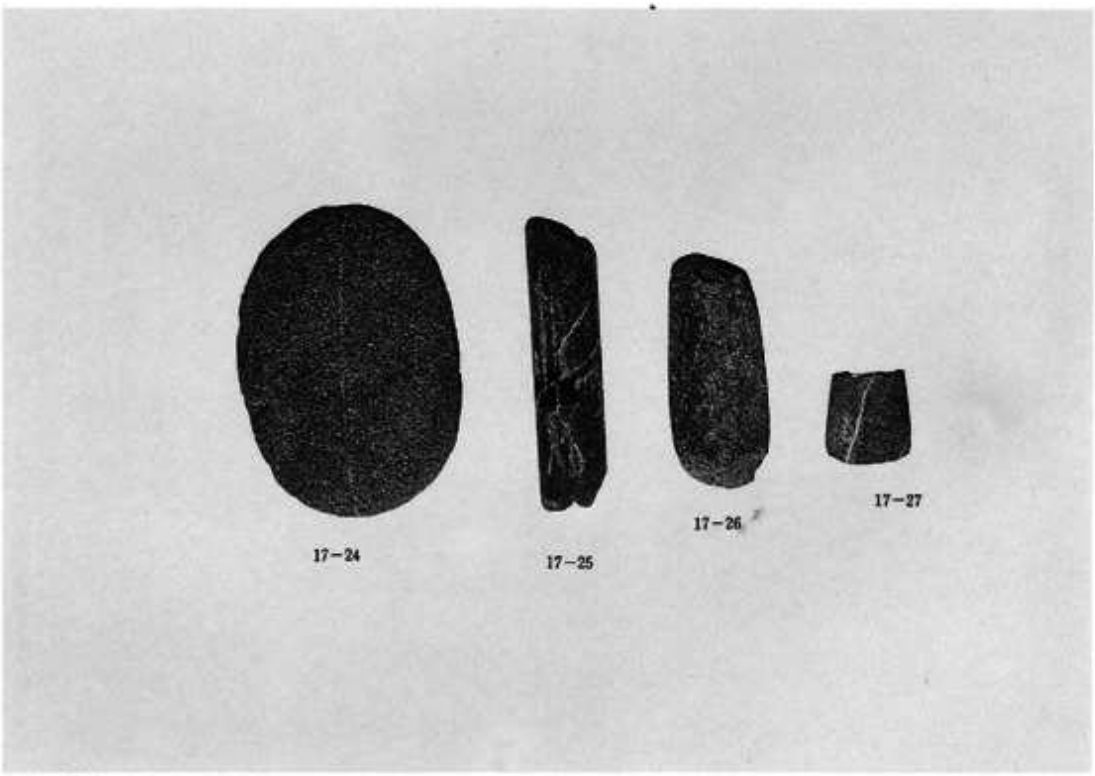
1　第3地区No土器〈4〉



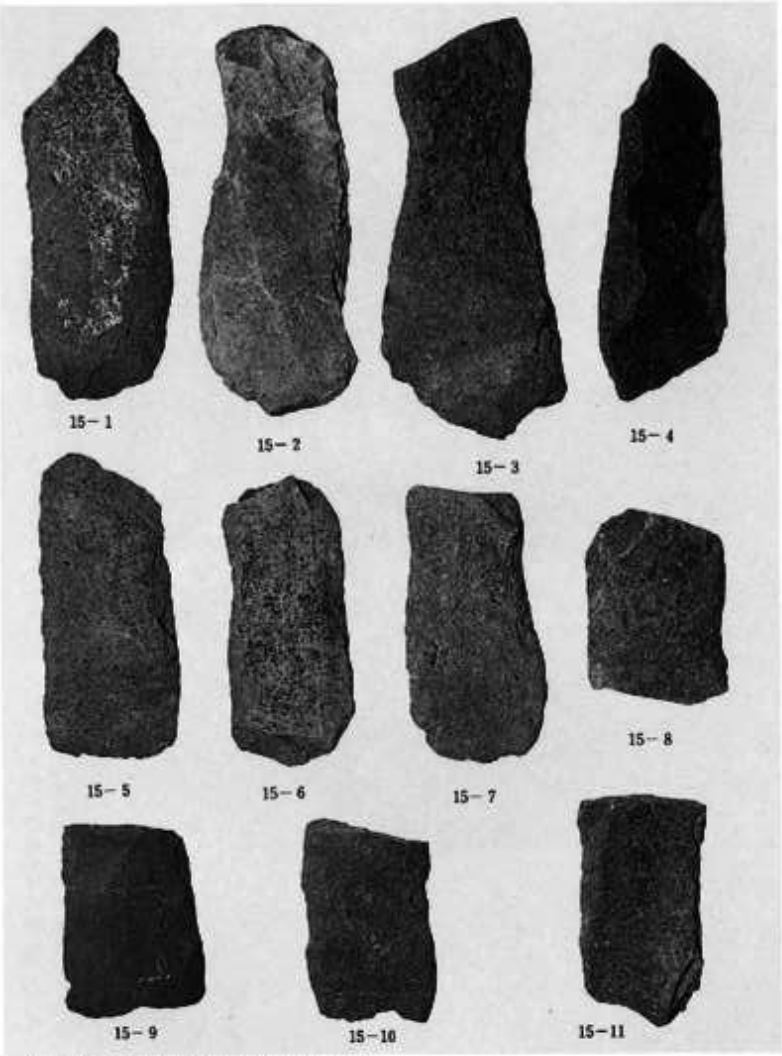
2　第1－4地区表採土器



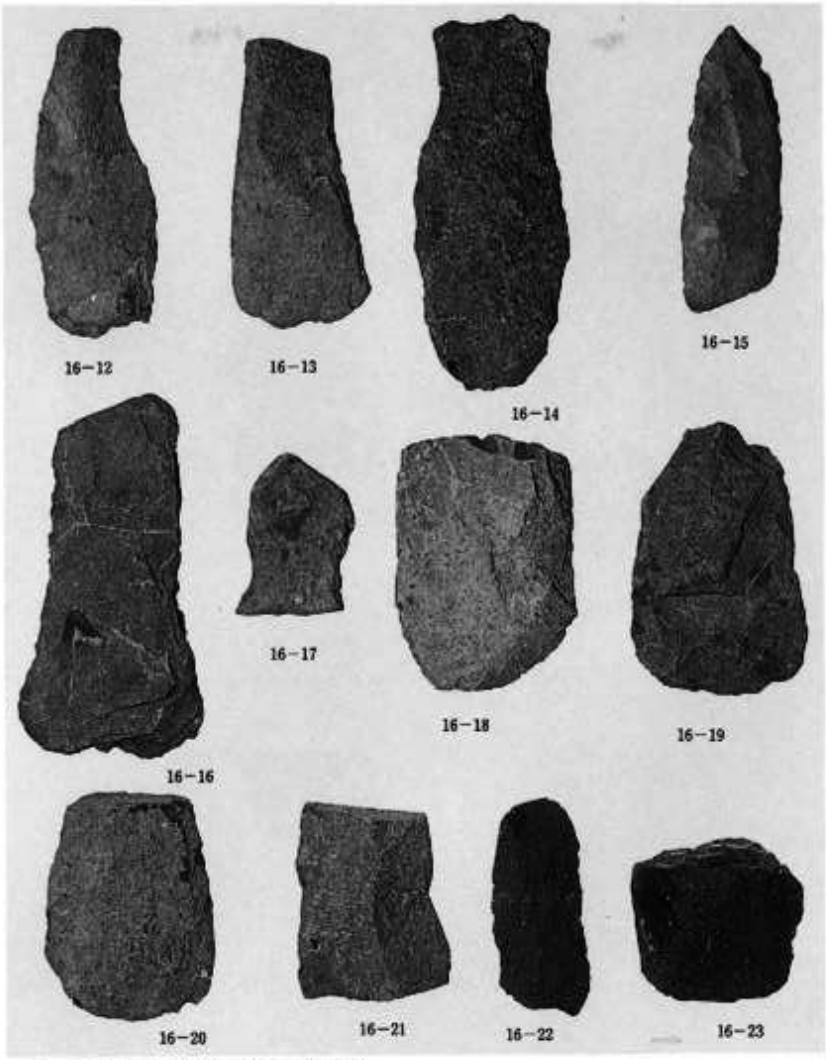
1　第3地区Ｎｏ石器



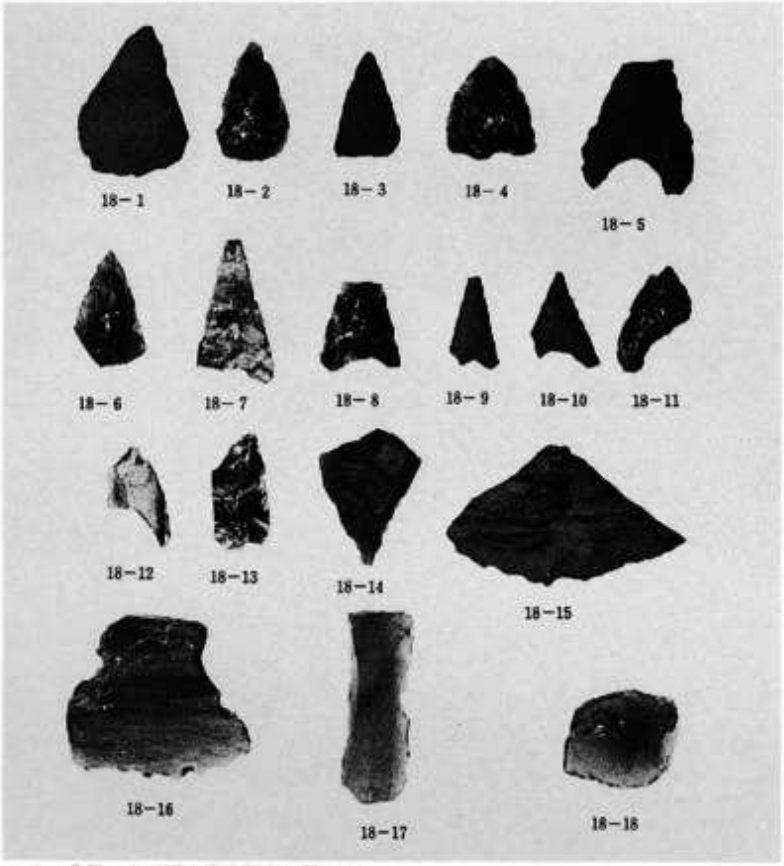
2　曲尾・木戸平Ａ遺跡既出石器〈1〉



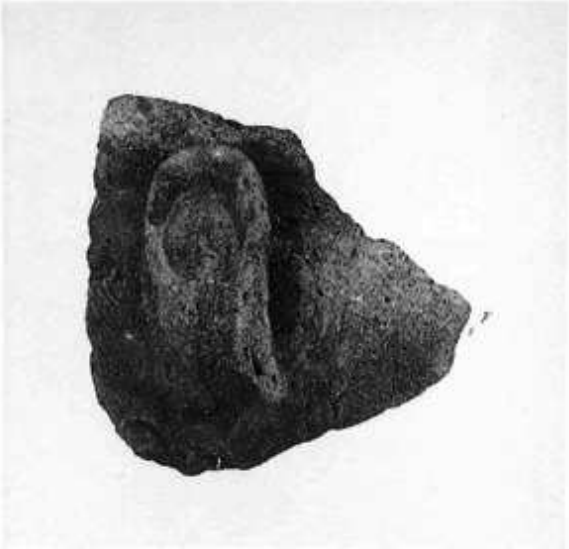
1　曲尾・木戸平A遺跡既出石器〈2〉



2　曲尾・木戸平A遺跡既出石器〈3〉



1　曲尾・木戸平A遺跡既出石器〈4〉



2　第2地区表採土器

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西裏・竹田峯』(TNU・NTM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池畑・西御堂』(YIT・YNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝　　間』(ISM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新　町　II』(IIM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『宿上屋敷、下川原・光明寺』(YKY・YSK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I』(KAB・KYM・KNU・KMOIII・KMO I)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高柳町・西大久保』(ATM・SNO)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	『北西ノ久保』(IKK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	『梨　の　木』(NNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	『菅田III・新町III・宮の上・中曽根・藤塚』(IIS・IIMIII・YMM・INN・TFK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	『長峯古墳群』(UNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第12集	『西　祢　ぶ　た』(KNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第13集	『荷　沢・寄　石』(NAZ・IET)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第14集	『諏の峯古墳群』(TNM)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第15集

長野県佐久市　腰　巻　遺　跡

西大久保遺跡群

西大久保遺跡 II

曲尾遺跡 II

1989年3月

編集者　佐久埋蔵文化財調査センター

発行者　長野県佐久市教育委員会

印刷所　ほおずき書籍株式会社